

第V章 遺物

1 木簡

木簡の出土点数は合計64点にのぼる (Tab.14)。ここでは、釈読可能な14点について、釈文を掲げ、簡単な註釈を加えることとする。なお、山田寺出土木簡については、既に橋本義則が詳細な検討を加えており、¹⁾本稿はこれに拠りながら、その後の変更点も含めて記述する。

A 木簡出土遺構

Tab.14 出土木簡点数表

はじめに木簡が出土した遺構を見ておく。第1次調査では塔の東側に拡がるバラス層から2点の木簡、第2次調査でも金堂東南隅近くの焼土層下から2点の削屑が出土しているが、いずれも釈読できない。

第4次調査のうち1点(①)は包含層から、他2点は石積み溝SD531の堆積土から出土した。①は、東

次数	木簡	削屑	計
第1次	2点	-	2点
第2次	-	2点	2点
第4次	3点	-	3点
第7次	7点	42点	49点
第8次	8点	-	8点
合計	20点	44点	64点

面回廊倒壊の要因ともなった流入土(暗灰色砂土)出土であり、8世紀~11世紀前半頃の土器を伴出。同層の直下からは近接した位置で押出仏も出土している。SD531は、東面大垣塀SA500に平行する南北溝で、SA500の東約5mの位置を南流する。下幅約0.8m、深さ約0.6~0.9m。堆積土は上下2層からなり、木簡は上下層から1点ずつ出土した。②は上層からの出土である。溝は先行する素掘りの南北溝SD530(7世紀中頃)の堆積土を掘り込んで作られており、出土遺物から判断して、7世紀後半につくられ8世紀中頃に埋没したのであろう。

第7次調査は、南門とその南方で実施したもので、南門南の参道上で行った断ち割り調査で、山田寺造営に伴う整地土と、その下層にある遺構も検出した。木簡(③~⑦)は全てその下層で検出した旧流路SD619からの出土である。SD619は幅が4.4m以上、深さは約1.6mあるが、土層の上から1.1mは整地土で埋められ、底の0.4mが堆積土である。木簡はみなこの堆積土の北寄りから出土したが、他に飛鳥I(7世紀前半)の土器、木製品、獣骨などが伴出した。

第8次調査の木簡は、宝蔵SB660B付近からの出土である。SB660Bは、金堂の東北方、東回廊SC060の外側で、東西大垣SA500との間に位置する。方3間に礎石が並ぶ総柱建物である。四周には雨落溝が巡る。木簡は6点(⑧~⑫)が西側雨落溝SD664Bから、2点(⑬⑭)は宝蔵SB660Bの基壇上面からの出土である。SD664Bは幅約1.4m、深さ約0.2mの素掘り溝で、埋土は上下2層に分かれる。木簡は上層から木製品、建築部材、金属製品などとともに出土した。宝蔵は東からの土砂の流入によって、東面回廊ともに西に倒壊しており、それに伴って蔵品が周辺に散乱して埋もれたものと推定できる。なお、宝蔵は7世紀後半に建立(SB660A)され、9世紀中頃に改修(SB660B)された後、11世紀前半に廃絶したものと見られる。

B 出土木簡 (Ph.76~81)

第4次調査 (Ph.76) ①は題籤軸 (往来軸) の頭部にあたる。題籤部分は長さ45mmあり、軸部は27mmのみ残存し、下は欠損している。かつては初行を3文字とし3文字目を「寺」と読み、上の2文字が「山田」や「浄土」とはならないことから、他所にある某寺の経論司から山田寺へ充てた經典の貸借に関する文書を巻き付けていた可能性が指摘されていた。今回、改めて積読すると、初行の「寺」と積読された部分は2文字に分かれて計4文字と見るべきである。また、最初の文字は「符」の可能性が高い。そうすると、未読の部分が残るが、「経論司」は山田寺に属する經典管理の機関で、そこから他の部署に出した命令の控えか、もしくは他から山田寺経論司に充てて下された文書をつないだものの軸であったと考えられる。つまり、経論司の名称が、出土地を指し示す可能性があるわけである。

第7次調査 (Ph.76) ③~⑦の5点を示したが、いずれも断片もしくは削屑であり、顕著な内容のものではない。ただし、出土遺構が前記のように山田寺創建以前の旧流路であるから、7世紀前半に遡るもので、年代的に注目される。7世紀前半の木簡としては、坂田寺跡、伝飛鳥板蓋宮跡下層、上之宮遺跡 (以上奈良県)、前期難波宮跡下層、桑津遺跡 (以上大阪府) などが知られるが、この山田寺下層の木簡群もそれらとともに最古の木簡のひとつと言える。木簡の内容はほとんどが習書である。そうした古い時期に、この地において文字を扱っていることは、山田寺造営以前にここに公的な機関があったか、もしくは貴族の邸宅に属する人がいたのであろうとし、石川麻呂との関係から後者の可能性が高いとする橋本の見解が妥当であろう。

第8次調査 (Ph.76~81) ここには7点の積文をかかげた。そのうち⑩⑪⑫の3点はいずれも完形品ではないが極めて大型の木簡である。また3点ともに年紀が見える。すなわち⑩に「弘仁二年」(811)「大同二年」(807)、⑪に「天平勝宝六年」(754)「宝亀七年」(776)、⑫に「天平…」などである。通常、木簡は短期間のうちに使用され、用済みになれば廃棄されるから、木簡に記される年紀は、木簡廃棄時とそれほど隔たりがなく、ために遺構の年代を考える際に大きな威力を発揮する。ところが、⑩⑪⑫の3点はそうした点では例外と見なすべきであろう。理由は、これらが經典の借貸についての記録を書き継いだものであり、木簡の大きさから見ても、それ自体が長期にわたって機能していたこと、また、相互の木簡に年紀の隔たりがあり、そのことは、書き記された時期がそれぞれ異なっても、ともに保管されるべきものとして「伝存」してきたことを示していること、などである。出土状態から推定すると、これらの木簡は宝蔵の倒壊という事態がなければ、おそらくさらに長期間保存されていたのではなかろうか。つまり、木簡に記す年紀は、この場合、遺構の年代決定の決めてにはならず、わずかに「弘仁二年」以降に宝蔵が倒壊したという上限を示すにすぎないということである。

個々の木簡の検討にうつる。⑩は、上端と右辺を欠く。左辺には下から51cmのところ切り込みがあり、失われた右辺にもあったものと見られる。これだけ大型の木簡に切り込みをもつのは珍しいが、おそらく木簡を柱のようなものに括り付けていたことを示すのであろう。⑩の表 (表裏関係は定かではないが、仮に年紀のある方を表とする) は内容から、六つの部分に分けられる。すなわち1は右上の二行で、弘仁2年11月16日に某疏と判比量論 (新羅・元暁671年

述)を義勝に貸し出したこと、2はその下で、某経(右辺の欠損部分に表記があったか)を11月27日に貸し出し、責任者は持成であること、3はその左の一行で、某経を慈忠に貸し出し、責任者が乙人であること、4は中央右よりの二行で、目代光嚴と主録某の名が見える部分、5はその左二行で、大同2年11月26日に唐の側法師(円測)による唯識論疏を義勝に貸し出し、責任者は持成であること、6は下端部の二行で、成業論(唐玄奘訳)などの貸し出しについての記述、である。⑩の裏も同様の經典貸し出しの記録と推定できる。判読しうるのは法花経のみであるが、借貸にあたった人物として、義勝と慈忠の二人とも表と共通することから、その時期も表と大きくは隔たっていないものと判断される。

こうした大型の「經典借貸記録」とでも称すべき木簡について、橋本は正倉院に残る通常の大きさで1件毎の經典借貸を記録し紙の帳簿の資料となった木簡、あるいは代本板としての木簡などとは異なり、經典の収納された倉に結びつけて置かれ、長期間にわたって機能したのであろう、といういわば「倉札²⁾」としての機能に重点をおいた解釈を示しているが、妥当である。大同二年の記述よりも後年の弘仁二年が上にくるといった変則的な書き方も、そうした長期にわたって表面を削りながら使用され続けた結果であろう。ただし、そうした使い方をすると、この木簡の中での区切り方に混乱が生じかねない。4の部分の上に斜めに入る墨線、あるいは5の大同2年部分を囲うように巡る墨線は文章の区切りを示すのではなかろうか。通常こうした墨線は抹消もしくは合点と考えられ、橋本も抹消と判断したが、表面に関しては文字を避けるような曲線であり、抹消というよりは区切りと見た方がよかろう。一方、裏の墨線は合点である。

倉 札

⑪⑫はいわゆる横材の木簡で、長方形の材を横にして、木目に直交する方向に文字を書く記録木簡である。⑪⑫ともに表とした面の下端のみ原形をとどめ、他は欠損している。

⑪は表裏ともに年紀があるが、天平勝宝年間と宝亀年間に集中する。多くの異筆がみられ、しかも同じ面で文字の天地が逆になったり、削り残しと見られる箇所などもあって、複雑である。表の下端つまり文字の向きで右端から始まる一連の記述が裏の三行まで続き、それ以外はまた別の時期の記述と見られる。内容は判然としないものの、日付と經典名、及び僧侶名が列記され、中に「借」「受」といった語句があるから、やはりこれも經典類の借貸に関わる木簡と推定される。ただし、⑩とは異なり、僧侶の記述が「上坐延勝」「寺主□□」「都維那仁憲」と三綱の職名とともに記されるところを見ると、⑩のような単なる倉札ではなく、よりあらたまった場で用いられた可能性を示唆する。そうすると、ほぼ同じ記載内容をもつ⑫の木簡の中に「検定」という語句が見られる点が注目される。つまり、⑩は倉の付近において經典の貸し出しをその都度、書き込んでいた記録であったのに対して、⑪⑫はその貸し出し状況を「検定」した時の木簡と見ることができる。その検定の責任を明らかにするために、三綱の職と僧名が書き込まれたのであろう。

木簡から判明する經典名を列举すれば、金剛般若経、薬師経、瑜伽論菩薩地、法花経、瑜伽論、仏地論、成業論、大毘婆沙論、順正理論、顕宗論となり、法相宗の唯識関係のものが多く見られ、奈良時代における山田寺を宗教的に位置づける際の一つの手がかりともなる。

經 典 名

⑬は、下端が欠損しており、欠損部分の文章によっては表裏関係が逆となる可能性もないとは言えないが、文字の向きが表裏で異なることから「日向寺」を裏から続けて「～日、寺に向

かふ」と読むのはいかにも不自然で、表裏関係はこのままで良いと考える。物品の支出を記した記録の木簡であろう。

日向寺 表裏がこのとおりだとすると、冒頭の「日向寺」という寺が目される。大脇潔は、飛鳥の寺々のうち、飛鳥寺、豊浦寺、山田寺、奥山廃寺（小治田寺）、和田廃寺（葛木寺）、田中廃寺、日向寺の7箇寺を蘇我氏の寺とし、それらがちょうど飛鳥の中心に円を描くかのように分布することを指摘した³⁾。日向寺は10世紀初頭の『聖徳太子伝暦』に聖徳太子建立とされた寺で、香久山南麓の南浦に礎石が残り、採集される瓦から見て、創建は7世紀に遡る。大脇は、建立した氏族が蘇我稲目の後とする箭口氏ではないかとする。壬申紀によれば、中ツ道を南下した場所に「矢口」なる地名が記されるが、中ツ道の延長線上で飛鳥を望む高所としては香久山の南がふさわしいことから、古代の地名「矢口」の場所に箭口氏の手によって造営された寺院が後に日向寺となった、と推定した。平城京の長屋王家木簡よれば、王家は庄所として「矢口」に土地を所有していたことが知られ、その場所が問題となるが、長屋王の父・高市皇子がかつて「香久山宮」に居住していたことと関連して、その近くに「矢口」を求めるのは蓋然性が高い。また、飛鳥池遺跡から出土した木簡の中に、大和の寺号を列挙したのがあり、その中に「矢口」という記述があるのは、他の例からみて「矢口寺」のことであるから、7世紀において「矢口」に寺が存在したことも間違いない。よって、大脇の推定はその後の知見によって、成立する可能性がより高まったと言えよう。とすれば、山田寺跡から「日向寺」との関連を示す木簡が出土することも、それほど不自然ではないと言えよう。

⑭は、上端が欠損しており全長がわからないが、記載内容からみて、経巻を包む帙に付けられた題籤であろう。経帙の題籤としては正倉院にいくつかの類例があり、経巻をまとめた経帙はさらに櫃や厨子に入れられて保管されたい。⑭は經典名の部分が欠損しているが、橋本大般若経はこれを大般若経であろうと推定している。それは、この木簡によれば第22帙が10巻で帙に包まれたことがわかり、仮にほかの帙も同様だとすると、少なくとも220巻以上の經典となり、当時の漢訳一切経のなかで、それほど大部なものは大般若経600巻以外に存在しないからである。そうだとすると、「山田寺の歴史」の章で述べた、天平11年に石川年足が施入した大般若経との関係が気になることである。橋本は、古代においては大多数の寺院で大般若経を一部のみ所蔵されていたとする指摘を受けて、この⑭が年足施入の大般若経の帙に付けられていた可能性を考えているが、これも有りうべき想定である。

以上見てきたうちでも、特に第8次調査出土木簡からは、文献史料から窺い知ることのできない7・8世紀の山田寺の具体的な活動を示唆するものが含まれていると言ってよい。そして、発掘遺構との関わりで指摘したいのは、木簡の多くが經典に関連するものである、ということである。これまでSB660を「宝蔵」と称してきたが、より具体的には經典類を主として納めていた「経蔵」であった可能性が高いのではなからうか。ただし、第IV章2Hで触れているように、SB660以外にも「経蔵」があった可能性もありえよう。

1) 橋本義則「山田寺跡出土の木簡」『考古学ジャーナル』339、1991年。

2) 大型木簡については原秀三郎「倉札・札家考」(『木簡研究』8、1986年)が詳しい。

3) 大脇 潔「蘇我氏の氏寺からみたその本拠」『堅田 直先生古希記念論文集』真陽社、1997年。

2 瓦磚類

11次にわたる発掘調査により、膨大な量の瓦磚が出土した。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、垂木先瓦、そして、面戸瓦、熨斗瓦、鴟尾、鬼瓦などの道具瓦、文字瓦、磚などである。

A 軒丸瓦

第1次調査から第11次調査までに出土した軒丸瓦には、山田寺式軒丸瓦（外縁に四重圏文をめぐらす単弁八弁蓮華文）、大官大寺式軒丸瓦、平城宮式軒丸瓦、三巴文軒丸瓦、菊花文軒丸瓦、文字文軒丸瓦がある。山田寺式軒丸瓦の場合に分析の対象としたのは、種の識別の手がかりとなる弁ないし中房を残す個体に限定し、外縁のみの資料については、種の特定が困難なものが多いので除外した。山田寺式軒丸瓦以外の資料は少量であり、ほとんどが内区文様を残しており、しかも外縁だけでも種の特定ができたので、すべてを分析対象とした。これによって算定された第1次調査から第11次調査で出土した軒丸瓦の点数は3842点で、うち98%の3772点が山田寺式軒丸瓦である。なお、軒瓦の型式番号は『一覽』にしたがう。また、三巴文軒椀瓦と菊花文棟飾り瓦が出土しているが、ごく少量なので別に項を設けず、本項末に記述する。

i 山田寺式軒丸瓦 (Ph.84~91、Fig.85~87、別表1)

A 種 (Ph.84~86、Fig.86) 山田寺出土の山田寺式軒丸瓦のなかで瓦当径が最大で、それは弁長、弁幅、中房径においても同様である。弁の最大幅は弁端寄りにあり、弁の輪郭線は細い凸線で、隣り合う輪郭線同士が弁長の1/2ほどのところで接する。弁端は比較的丸みをもっているが、幅狭く落としている。したがって、弁央を縦貫する鑄（稜線）は弁端で間弁のようにT字形ないし逆三角形をなす。弁の盛り上がりも山田寺式軒丸瓦の中で最大であり、盛り上がりの最大位置は弁端寄りにある。弁の上には先端に丸みをもつ凸子葉を1枚置く。弁と弁の間には稜線が明瞭な逆三角形の間弁を置く。突出した中房には1+6の凸蓮子を置く。蓮子は正六角形に近い状態で置かれ、その対角線のうちの1本が、対向する4対の間弁を結ぶ4本の線のうちの1本に重なるという点は、A種の特徴である。これは、範型製作時に文様を墨書きする際の基準線（以下、施文基準線）と考えられる。外区内縁には細い圏線を一重めぐらす。外縁には太めの圏線を四重めぐらし、外から二重目がとくに太い。

山田寺式で
径が最大

施文基準線
間弁で一致

瓦当面の範傷の進行状況によって、範傷なしの段階、さらに4段階の範傷進行がたどれ、それに対応して丸瓦広端の加工手法が片柄形I型（a面はb面より相当幅広く、外縁端に達しない）、片柄形II型（a面とb面は同程度に幅広く、a面は外縁端に達する）、楔形、未加工の順に変化（Fig.85）し、調整手法も変化する。丸瓦は玉縁丸瓦である。

4種の丸瓦
広端加工法

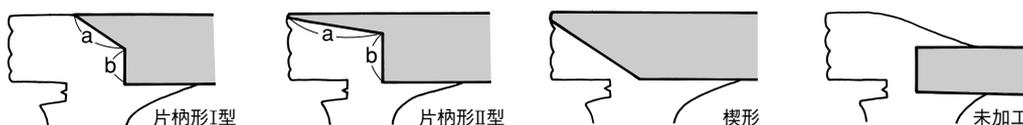
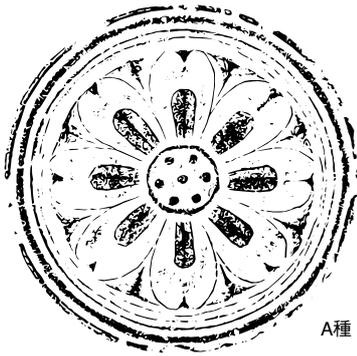


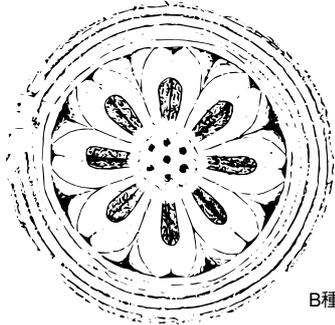
Fig.85 山田寺式軒丸瓦の丸瓦広端の加工手法模式図

施文基準線
弁央で一致



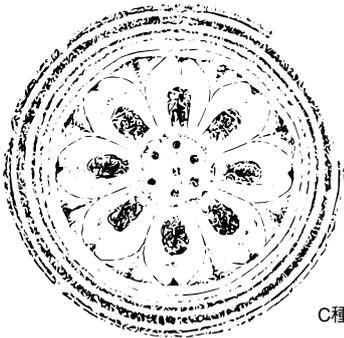
A種

片柄形加工
のⅡ型

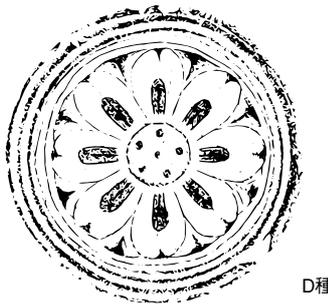


B種

弁の盛り上
りが弱い



C種



D種

3種の丸瓦
広端加工法



E種

Fig.86 山田寺式軒丸瓦Ⅰ 1:4

B種 (Ph.84・88、Fig.86) 文様はA種に酷似するが、違いもある。まず、弁と子葉の最大幅がA種に比べてやや狭い。弁央の鑄はA種より明瞭で、弁端を幅広く落としている。中房径はA種よりやや小さい。蓮子は1+6で、六角形をなす蓮子の3本の対角線のうちの1本が、対向する1対の弁央を結んだ直線と重なる。文様を范型に描いたときの施文基準線と考えられる。

外区内縁には圏線を一重めぐらす。外縁には四重圏文をめぐらし、外から二重目の圏線の幅が広い。外縁にははじめから范傷があるが、進行は認められない。瓦当外縁端に残る粘土の段(バリ)は、B種の范型も瓦当側面に被らない外縁端まで彫られるタイプであったことを示す(Ph.88-11)。瓦当面には糸切り痕を残すことがあるので、糸切りした粘土板(粘土塊)を范詰めしていたことがわかる(Ph.88-11)。

丸瓦接合位置の瓦当側面を縁端まで斜めに削る(Ph.88-9)。ここに広端を片柄形Ⅱ型に加工した丸瓦を立て、凹面に薄く接合粘土をつけて固定する。丸瓦広端のb面は10~20mmと幅広く、A種の片柄形Ⅰ型の加工と明瞭な差がある(Ph.88-8・10、Fig.85)。丸瓦は玉縁丸瓦で、斜格子叩き目を施した筒部凸面側から釘孔をあけている(Ph.88-13)。肩凹面の屈曲が強い(Ph.88-14)。丸瓦筒部の厚みも21mm前後とA種より厚い。色調は暗灰色や灰色主体で、硬質のものが多い。

C種 (Ph.87~89、Fig.86) 蓮子1+6で、六角形をなす中房の周辺蓮子の3本の対角線のうちの1本が、対向する1対の弁央を結んだ直線と重なる(施文基準線)という文様の特徴がある。これはB種と共通する。しかし、C種は弁幅がやや広いのに弁の盛り上がりが弱いので、B種と比べてやや平板である。弁央の鑄も鮮明でない。中房径は大きい。外区内縁には圏線を一重、外縁には四重めぐらし、後者は瓦当縁から二重目が太い。

范型には、糸切りした粘土板を詰め込んでいる(Ph.88-15)。外縁端に粘土の段があるので、范型は瓦当側面にまったく被らないタイプである(Ph.89-1)。范傷のないものとあるものがあり(Ph.89-1・5)、それに対応して丸瓦広端の加工手法は、片柄形Ⅱ型、楔形、未加工の3種を確認した。丸瓦は玉縁丸瓦である。

D 種 (Ph.84・86・88, Fig.86) 文様の特徴はA・B種に似るが、瓦当径や弁長、弁幅はA・B種より小さく、後述するE・F種より大きい。突出した中房には1+5の蓮子を置く。周囲の蓮子のうち三つは中房から発生する間弁に、二つは弁央に、それぞれ近い位置に置く。外縁には圏線を四重めぐらし、外から二重目がとくに太い。

蓮子1+5

範傷なしの段階、範傷が弁脇に発生する段階、それが大きくなる段階が追えるが(Ph.86-9~11)、以下述べる製作技法は共通する。瓦当縁には範端の存在を示す粘土の段があり、瓦当側面に範端痕を残す例がないので、範型は瓦当縁で終了し、瓦当側縁に被らないタイプである(Ph.86-12)。範型に糸切りした粘土板を詰め込み、それを指押さえによって範型に密着させ、とくに瓦当側面にその痕跡が残る(Ph.86-12・13)。

瓦当裏面を回転ナデによって平坦にする(Ph.86-14)。とくに同心円のナデの痕跡は、範型を回転台に固定していたことを示す(Ph.86-15・16)。その後、瓦当裏面を乱ナデで平坦にする(Ph.88-6)。

瓦当裏面は
回転ナデ

丸瓦を瓦当裏面に接合する手法は、範傷なしの段階のA種に近い。丸瓦の広端をすべて片柄形I型に加工する(Ph.88-1)。a面の幅は12~25mmとA種に近いが、b面の幅は5~15mmで、A種と比べてやや幅広の例もある(Fig.181)。丸瓦先端は瓦当外縁端に達せず、瓦当外縁端から8mm前後離して接合する(Ph.88-3)。丸瓦先端にキザミを施す場合が多いが、丸瓦凹面にもキザミを施す場合がある(Ph.88-3~5)。なかには、先端を瓦当裏面にややくい込ませる例がある(Ph.88-4)。その後、支持ナデをして丸瓦を立て、内面に薄く接合粘土を付加する(Ph.88-2)。

丸瓦は、玉縁丸瓦と行基丸瓦の両種を用いている(Ph.86-17~20)。前者は後述する丸瓦B I a・II a・IV aで、後者は丸瓦A I a・II a・IV aのいずれかである。いずれも筒部中央に凸面側から正方形の釘孔をあけている。A・B種と同様に、硬質で、灰色や暗灰色を呈するものが主体である。

行基・玉縁
2種併用

E 種 (Ph.84・88, Fig.86) 文様構成はD種に近く、突出した中房に1+5の蓮子を置くが、瓦当径はD種より小さい。外縁に圏線を四重にめぐらし、外から二重目が太い。瓦当外縁端には範端の存在を示す粘土の段があり、瓦当側面に範端痕を残す例がないので、範型は瓦当外縁端で終了し、瓦当側縁に被らないタイプである(Ph.88-7)。

丸瓦先端は片柄形II型に加工する。すなわち、a面が瓦当外縁端に達し、b面が広い(Ph.88-8)。色調は灰色を呈する。出土点数は僅少である。

F 種 (Ph.87・89, Fig.87) 瓦当径は山田寺式軒丸瓦のなかで最小である。弁はC種のように盛り上がり弱い。突出した中房に1+4の蓮子を置く。外縁に圏線を四重めぐらす、外側から三重目が太い点は、A~E種と異なる。

瓦当に接合する丸瓦広端を楔形に加工し、瓦当側や丸瓦側の接合面に斜格子刻みを施すのが通常だが(Ph.89-14・15)、a面が瓦当外縁端まで達するタイプの片柄形II型に加工を施した例が1点ある(Ph.89-13)。瓦当裏面を支持指押さえするのは、楔形加工段階のC種と共通する(Ph.89-16)。瓦当裏面や側面

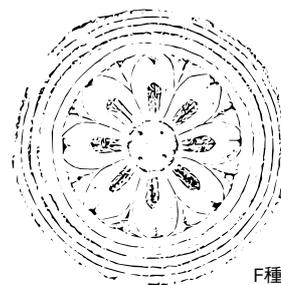
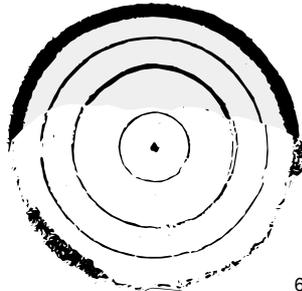
山田寺式で
径が最小

Fig.87 山田寺式
軒丸瓦II 1:4

に斜格子叩き目を施し、ナデ残す特徴は、楔形加工段階のA・C種と共通する(Ph.89-17・18)。硬質の度合いはA・B・D種よりやや劣る。色調は暗灰色や灰白色などを帯びる。

ii 大官大寺式・平城宮式軒丸瓦(Ph.87・89、Fig.88、別表1)

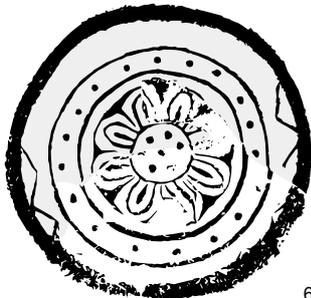
三重圏文 6012Aa (Fig.88) 中心に珠点をもつ三重圏文軒丸瓦で、1点出土。瓦当裏面には範詰め時に布を押圧した痕跡を残す(Ph.89-19)。6012型式は、A~K・Mの12種に細分している。Aa種



6012Aa

は、平城宮他から出土。重郭文軒平瓦6572Dと組む。比較的硬質で、灰白色を帯びる。

6143A (Fig.88) 単弁八弁蓮華文を施す小型軒丸瓦で、7点出土。くぼんだ中房に1+6の蓮子を置く。外区には珠文と線鋸齒文をめぐらす。

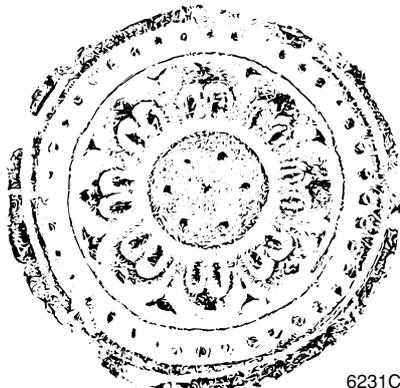


6143A

積み上げ技法成形台一本作りを採用しているので、丸瓦凹面の布目痕と瓦当裏面の布目痕が連続する、瓦当裏面に成形台の圧痕を留める、丸瓦部の先端が瓦当部をなすなど、通常の丸瓦と異なる特徴をもつ。さらに瓦当裏面中央はケズリ調整でくぼむ(Ph.89-20)。やや軟質で、黄灰色を呈する。

平城薬師寺
と同範品

薬師寺25型式²⁾と同範で、軒平瓦6703Aと組む。平城薬師寺、本薬師寺のほか、川原寺からも出土。



6231C

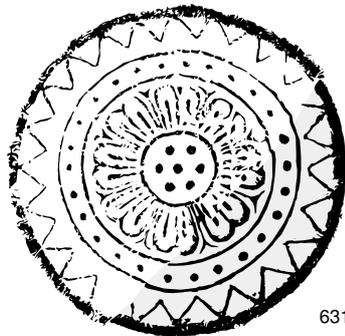
6231C (Fig.88) 複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、突出した大型の中房に1+6の蓮子を置く。外区内縁は傾斜し、珠文38個をめぐらす。6231型式は、A~Cの3種がある。本例はC種。

大官大寺式

瓦当裏面に指で丸瓦接合溝を設け、丸瓦を立て、その内外に接合粘土を厚く付加する(Ph.89-21)。瓦当裏面周囲は、縁に沿って弧状のナデを強く施すため、溝状にくぼむ。

文武朝大官大寺(明日香村小山)の塔、あるいは中門・回廊所用で、軒平瓦6661Bと組む。硬質で、暗黒色や暗灰色を呈する。

平城宮式



6311Aa

6311Aa (Fig.88) 平城宮の主要な軒丸瓦の一つである。複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、くぼんだ中房に1+6の蓮子を置く。外区には珠文26個と線鋸齒文23をめぐらす。珠文には範傷がある。6311型式は、A~Hの8種に細分している。

瓦当裏面に指で接合溝を設け、丸瓦を立て、その内外に厚く接合粘土を付加する(Ph.89-22)。やや軟質で、表面は黒色、芯は灰白色を呈する。

Fig.88 大官大寺式・平城宮式
軒丸瓦 1:4

iii 巴文・菊花文・文字文軒丸瓦など (Ph.90、Fig.89、別表1)

左三巴文A (Fig.89) 巴文の頭部は丸みをもち始めるが、尾部から独立していない。中央に珠点を置き、各巴文の頭部に接する。巴文の尾部は外区内縁の内圏線に接する。内圏線外側の外区内縁には、30個以上の珠文をめぐらし、さらにその外側に外圏線をめぐらす。外縁は素文である。

外縁端にはつぶれた凸線があり、これは範端を示す可能性が高い。瓦当面には範型からの剥離剤として離れ砂を付着させている。

瓦当の製作は粘土を薄く範に詰め、浅い丸瓦接合溝を指先で設けたのち、広端未加工の丸瓦を立てる。丸瓦の凹凸面に接合粘土を付加し、さらに顎寄りにも瓦当成形粘土を追加し、最後には瓦当裏面をヨコナデして平坦にする。比較的硬質で、色調は暗灰色や茶褐色を呈する。

出土点数は5点で、うち2点は北面回廊廃絶後に掘られた区画溝のSD222から出土。他は、講堂の東で2点、金堂の北東で1点出土した。

左三巴文B (Fig.89) 巴文の頭部は直径15mmほどで、尾部から明確に独立する。外区内縁には直径11mmほどの珠文を推定15個めぐらす。外縁は低く、素文である。

瓦範からの剥離剤として、キラコを付着させている。やや軟質で、色調は灰色を呈する。

出土点数は4点で、うち3点は講堂東から出土。他の1点は塔東の表土で採集。

左三巴文C (Fig.89) 全体の特徴から考えて、左三巴文Bと類似した巴文であろうが、外縁幅がBより広く、外縁端に幅3mmの面取りがある。

丸瓦凹面の広端寄りにカキヤブリをつけて瓦当裏面に立て、凹面側に薄く接合粘土を施して接合する。丸瓦凸面は篋でタテナデする。硬質で、瓦当面と丸瓦凸面の色調がいぶし銀になるように仕上げ、丸瓦凹面と芯は黒色を呈する。講堂東から1点出土。

右三巴文A (Fig.89) 巴文の頭部は先端がややとがり気味のものと丸みをもち始めたものがあり、尾部から

古い左巴文



左三巴文A種

離れ砂用



左三巴文B種



左三巴文C種



右三巴文A種

キラコ使用



右三巴文B種



右三巴文C種



菊花文A種



菊花文C種



菊花文B種



文字文

古い右巴文

Fig.89 巴文軒丸瓦ほか 1:4

独立していない。巴頭部の中央には外区の珠文より大きい珠点を置く。外区内縁に30個以上の珠文をめぐらし、その内外に接するように圏線をおく。巴の尾は内圏線につかない。

瓦当面には離れ砂を付着させている。瓦当を薄く範に詰め、浅い丸瓦接合溝を指先で設け、広端未加工の丸瓦を立てる。丸瓦の凹凸面に接合粘土を付加し、さらに顎寄りにも瓦当成形粘土を追加し、瓦当裏面をヨコナデして平坦にする。比較的硬質であり、色調は暗灰色や茶褐色を呈する。

出土点数は17点で、うち8点は北面回廊廃絶後の区画溝SD221～223出土。これらの周辺の床土などからも5点出土。他に北面回廊廃絶後の井戸SE480から1点、金堂を巡る溝SD211の東寄りで1点、北面回廊北と講堂東で各1点出土している。

右三巴文B (Fig.89) 全体の特徴からみて、巴の頭が半球形で、尾部から独立するタイプであろう。外区内縁には直径10mmに達しない珠文をやや間隔をおいてめぐらす。圏線はすでにない。外縁は低く、素文である。軟質で、外面は黒色、芯は灰白色を呈する。講堂東で1点出土している。

右三巴文C (Fig.89) 巴の頭が半球形で、尾部から独立するタイプである。外区内縁には直径10mmをこえる推定16個の珠文をめぐらす。圏線はない。外縁高は低く、外縁幅はBより広い。外縁端に2mmの面取りを施す。比較的硬質で、燻し焼きをしている。金堂東の表土から1点出土している。

菊花文A (Fig.89) 菊花文のなかでは最大の瓦当径をもち、その大きさからみて、軒丸瓦と考えられる。推定12弁。外区内縁に珠文はない。外縁は低く、素文である。比較的硬質で、燻し焼きをしている。金堂北の表土から1点出土。

菊花文B：軒棧瓦 (Fig.89) 軒棧瓦の巴部である。推定16弁で、中心に珠点をおく。硬質で、燻し焼きをしている。金堂基壇土の表土から3点出土。講堂東で2点出土。

菊花文C：棟飾瓦 (Fig.89) 菊花文のなかでは瓦当径が最小である。推定16弁で、外縁は低い。燻し焼きをしている。瓦当裏面には棟に固定するための差し込みを付けている。講堂東で2点出土している。

文字文は「興福寺」か

文字文軒丸瓦 (Fig.89) 内区に蓮華文や巴文がないので、空白部を広くとる文字文が施されていた可能性が高い。山田寺では「興福寺」銘の軒平瓦が出土している。本軒丸瓦の文様としては、「興福寺」銘が候補にあげられる。外区内縁には左・右三巴文Aより間隔の広い珠文をめぐらし、その内外に圏線をおく。外縁は素文。端縁の面取りはない。硬質で、灰色を呈する。北面回廊北（第3次東区）で1点出土。

なお、この他に瓦当面が剥離するが、製作技法からみて室町時代に比定できる軒丸瓦が講堂周辺で1点出土している。

1) 奈文研・奈良市教育委員会『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年。
2) 『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊、1987年、pp.82・83、PL.69。

B 軒平瓦 (Ph.91~127、Fig.90~105、別図7~15)

山田寺から出土した軒平瓦には、重弧文、重郭文、唐草文、連珠文、文字文の各種がある。11次に及ぶ調査で出土した軒平瓦の点数は1645.5個体¹⁾にのぼる。

山田寺創建軒平瓦は重弧文軒平瓦である。以後も各種の重弧文が作り続けられたため、山田寺から出土した軒平瓦の9割以上を重弧文軒平瓦が占める。重弧文の「弧の数」は、凹んだ部分（凹線）の条数を数える場合²⁾と、凸部分（弧線）の条数を数える場合³⁾とがある。山田寺の重弧文軒平瓦をみると、特に創建期のそれは、弧線に強い丸みがあり、明瞭に文様として意識されている。創建期の四重弧文軒平瓦は、1本の弧線が他より太いが、これも弧線を太くしたのであり、その上下の凹線の間隔を広くしたものではない。また、これらのいずれも瓦当面には挽き型が完全にあたっており、挽き型に表現された弧線の断面形を忠実に写し取ることを意図している。

このようなことから、本報告では、重弧文軒平瓦の「弧の数」を凸部分（弧線）の数で数え、上から順に第1、第2というようによぶ。山田寺から出土した重弧文軒平瓦は、弧線の条数によって四重弧文と三重弧文に二分される。初めに軒平瓦型式分類の概要を示す。

i 山田寺出土軒平瓦の型式分類 (Fig.90、Tab.17)

四重弧文軒平瓦 山田寺出土例に限らず重弧文軒平瓦の多くは型挽きで施文するため、唐草文軒平瓦と違って瓦範の異同による分類ができない。また、瓦当文様のみを基準とすると、異同の判定がきわめて難しくなる。そこで、ここでは、成形技法と瓦当文様および施文手法とを組み合わせる型式設定を行う。

成形技法には粘土板桶巻き作り技法と一枚作り技法⁴⁾がある。さらに、両技法は叩き板の種類、つまり刻線叩き板か縄巻き叩き板かで各々二つに分類できる。

桶巻き作り
と一枚作り

刻線叩き板とは叩き板自体に彫り込みを行った叩き板をいい、縄巻き叩き板とは縄を巻き付けた叩き板をさす。刻線叩き板は、瓦の凸面に平行・格子・斜格子叩き目などを残し、縄巻き叩き板はいわゆる縄目を残す。出土した軒平瓦を、成形技法と叩き板の違いによってつぎの4種に大別する。

- a：刻線叩き板の粘土板桶巻き作り技法。
- b：縄巻き叩き板の粘土板桶巻き作り技法。
- c：刻線叩き板の一枚作り技法。
- d：縄巻き叩き板の一枚作り技法

瓦当文様は、「櫛歯状」の施文具（挽き型・型）を瓦当面にあてて文様を描く、いわゆる「型挽き」のほか、瓦範を押捺するものがある。型挽き重弧文軒平瓦では、瓦当面を挽き型が動いた時についた擦痕や砂粒の動きが観察され、瓦範を押捺する重弧文軒平瓦の場合は木製瓦範の木目や範割れが認められる。

型挽きと
瓦範押捺

型挽きの桶巻き作り四重弧文軒平瓦は、大半が粘土円筒分割以前に施文を行うが、一部に粘土円筒分割後に1枚ずつ施文するものがある。一枚作りのものは、当然1枚ずつに施文する。

以上の分類を総合して、山田寺の四重弧文軒平瓦を型式分類した (Fig.90、Tab.17)。

出土した四重弧文軒平瓦の9割強は、刻線叩き板の粘土板桶巻き作り技法。施文手法はすべて型挽きだが、文様の特徴や叩き板の違いなどによってA～Dの4型式に分けた。

縄巻き叩き板の粘土板桶巻き作り四重弧文軒平瓦も型挽き施文。これをE型式とする。

一枚作り四重弧文軒平瓦は、F～Hの3型式に分類した。刻線叩き板成形と縄巻き叩き板成形の2種がある。前者の施文はすべて型挽き。これをF型式とする。後者の施文手法には、型挽きと瓦範押捺の2種があるので、型挽き施文をG型式、瓦範押捺施文をH型式とする。

四重弧文を
8型式分類

以上のように、山田寺出土四重弧文軒平瓦をA～Hの8型式に分類する。各型式の内容を簡略に述べる。

四重弧文軒平瓦A型式 粘土板桶巻き作りで、粘土円筒分割以前に瓦当面の施文をおこなう。文様は弧線が太く凹線が細い。第2弧線が他よりも幅広いことが特徴。文様と瓦の平面形・側面形などを基準にA IとA IIにわけける。四重弧文A Iは、瓦当幅と狭端幅の差が小さく、瓦の平面形が長方形である。また、左右の側面が互いにほぼ平行する。四重弧文A IIは第2弧線が幅広く、しかも凹線が狭くかつ浅い。側面は分割截面を残す。瓦の平面形は台形である。

四重弧文軒平瓦B型式 粘土板桶巻き作りで、粘土円筒分割以前に瓦当面の施文をおこなう。A型式に較べると基本的に弧線が低く、凹線は底面が平坦かつ幅広い。弧線と凹線がほぼ同じ太さ

か弧線の方がやや太く弧線の上面が平坦なB Iと、凹線が弧線より太く弧線の断面形が丸みをもつB IIに区分する。

四重弧文軒平瓦C型式 粘土板桶巻き作りで、弧線の幅が4条ともほぼ等しいもの。粘土円筒分割以前に施文をおこなうC Iと、粘土円筒分割後に1枚ずつ施文するC IIにわけける。

四重弧文軒平瓦D型式 粘土板桶巻き作りで、文様が浅くかつ弧線の上面が平坦なもの。

四重弧文軒平瓦E型式 縄巻き叩き板の粘土板桶巻き作り。文様は四重弧文C型式に似て、4条の弧線がほぼ等しい。

四重弧文軒平瓦F型式 斜格子刻線叩き板の一枚作り四重弧文軒平瓦。4条の弧線はほぼ同じ太さで、型挽き施文。叩き目の大小で二分し、刻線の間隔が粗い斜格子叩き目のものをF I、刻線の間隔が狭く細かい斜格子叩き目のものをF IIとする。

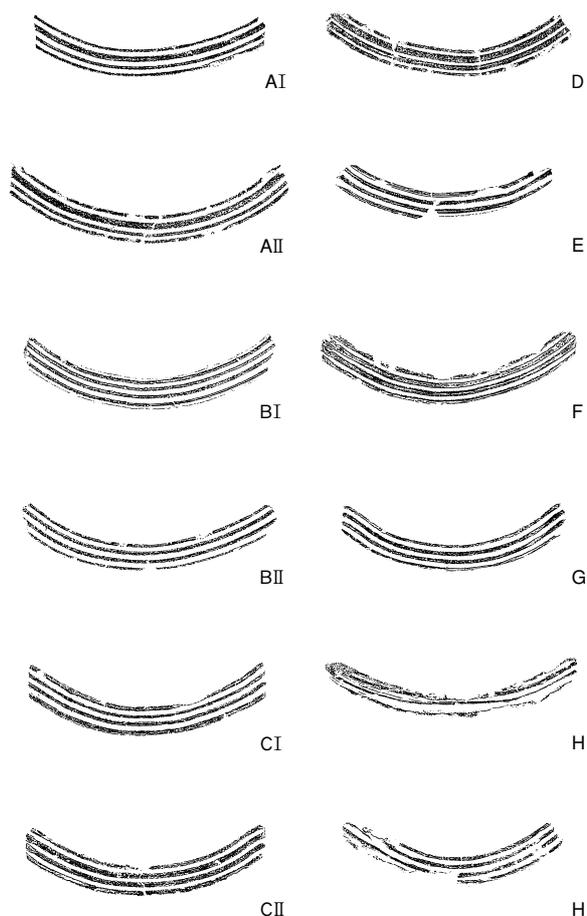


Fig.90 四重弧文軒平瓦の型式分類 1:10

四重弧文軒平瓦G型式 型挽き施文の縄叩き一枚作り四重弧文軒平瓦。弧線の太さは4条ともほぼ同じ。文様が深くかつ顎が短いG I と、文様が浅く顎の長いG II に分ける。

四重弧文軒平瓦H型式 瓦範による施文をおこなう縄叩き一枚作り四重弧文軒平瓦。瓦範の形態によって細分した。瓦当面全体をおおう弧線4条分の瓦範を押捺するH I、弧線3条分の瓦範を押捺するH II、弧線2条分の瓦範を押捺するH III、の3種がある。

三重弧文軒平瓦の分類 三重弧文軒平瓦には、桶巻き作り技法と一枚作り技法があり、後者は施文方法によって、型挽き施文と瓦範押捺施文に分類できる。ここでは、桶巻き作り三重弧文軒平瓦を三重弧文A型式、一枚作り型挽き施文の三重弧文軒平瓦を三重弧文B型式、一枚作り瓦範押捺施文の三重弧文軒平瓦を三重弧文C型式に分類する。A型式は型挽き施文。

三重弧文を
3型式分類

重弧文以外の軒平瓦 重弧文以外の軒平瓦には、重郭文、連珠文、偏行唐草文、均整唐草文、文字文がある。重郭文、連珠文、偏行唐草文、文字文はいずれも1種類。均整唐草文は5種類あり、これを均整唐草文I～V型式とする。

ii 四重弧文軒平瓦

a 四重弧文軒平瓦A型式 (Ph.91～100・Fig.91・92)

四重弧文軒平瓦A型式(以下、四重弧文A)は、粘土板桶巻き作りで粘土円筒分割以前に型挽き施文をおこなう四重弧文軒平瓦のうち、第2弧線が他の弧線よりも太いことを特徴とする。山田寺創建軒平瓦の主要な型式。四重弧文A I と四重弧文A II に二分し、さらに各々を瓦当文様で細分した。

四重弧文軒平瓦A I 四重弧文A I は、左右の側面がほぼ平行することと、瓦当幅と狭端幅の差が小さく瓦の平面形が長方形であること、などによって四重弧文A II と区別できる。瓦当幅は29～31cmの範囲に収まるので、30.6cm(高麗尺8寸5分)⁵⁾を企図したものであろう。出土個体数は741.5点。中門・回廊創建軒平瓦で、塔創建に際しても使用された。

中門・回廊
創建瓦

四重弧文A I を、主に瓦当文様の断面形により10種に細分した(Ph.91・92、Fig.91)。

A I 1 は、凹線がやや太めで弧線と凹線がなめらかに連続する。弧線は丸みが強いが、第2弧線はかすかな平坦面をもつ。168.5点出土(出土個体数、以下同じ)。

A I 2 は、A I の各種のなかでは第2弧線がもっとも太く、凹線は細くかつ鋭い。弧線は特に第2弧線の丸みが強い。185.5点出土。

A I 3 は、A I 1 に似るが、凹線が幅広く、弧線はすべて断面形が丸い。37点出土。

A I 4 は、弧線上面が平坦で、凹線も底が明瞭な平坦面となる。36点出土。

A I 5 は、A I 4 に似るが、凹線が浅く、文様の凹凸に乏しい。第2弧線はA I 4 より幅が広く、逆に第3弧線が細い。107点出土。

A I 6 は、弧線がA I のなかでもっとも強い丸みを持ち、しかも凹線が細く鋭いので文様の凹凸が著しい。43点出土。

A I 7 は、第2弧線上面に明瞭な平坦面をもち、その上下にある凹線が太い。44.5点出土。

A I 8 は、A I 4 に似るが、凹線がさらに太い。第3弧線の断面形が丸い。26点出土。

A I 9 は、A I 2 やA I 5 に似るが、A I 2 よりも第2弧線は平坦で、またA I 5 よりも凹線が細く底面も丸い。49点出土。

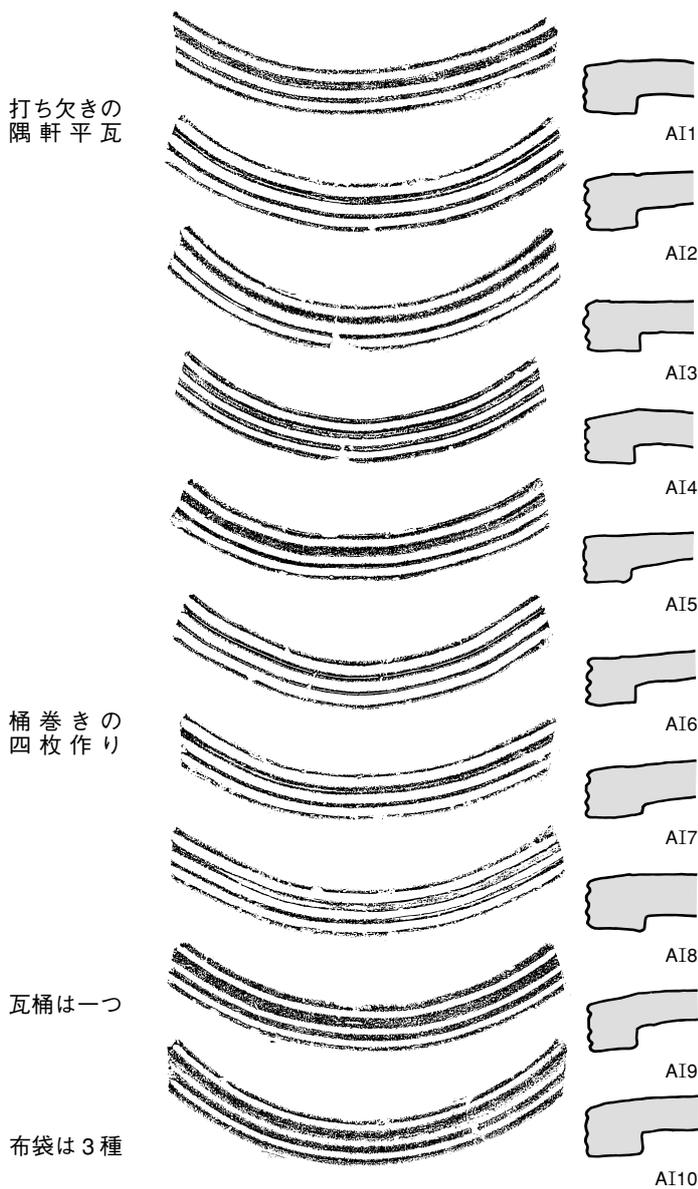


Fig.91 四重弧文軒平瓦AIの種類 1:6

粘土板合わせ目はS型とZ型があり、その出現頻度はほぼ1:1。また、布綴じ合わせ目1に対して粘土板合わせ目2の頻度で出現するから、桶には1枚の粘土板ではなく、2枚の粘土板を巻き付けたことがわかる。顎は所定の幅の粘土板を貼り付けた段階。顎粘土板の接合面には、桶の側板圧痕や布圧痕がある。キザミは入れない。

凹面とは逆に凸面はかなり丁寧にヨコナデ調整するため叩き目はほとんど残らないが、痕跡から判断すると、叩き板は軸に直交または斜交する平行刻線の叩き板と、軸に斜交する刻線を重ねた斜格子叩き板がある。叩き目は叩き締め⁶⁾の円弧を描く。凸面のヨコナデは瓦当を下にして時計回り方向。瓦当面に施文する挽き型は瓦当面を正面からみたとき右から左に動く⁶⁾。

側面調整は、ヘラケズリして分割断面と分割破面をほとんど残さない手法である。凸面側を深く削るため両側面は互いにはほぼ平行し、瓦を置いた状態でほぼ垂直となるが、AI10だけは分割断面を残す手法をとるため側面は平行しない。ヘラケズリは両側面とも瓦当から狭端方向

AI10は、AI3に似るが、施文が全体に浅い。14点出土。

AIには、焼成後、平瓦部を打ち欠いて製作した隅軒平瓦がある(AI2、Ph.99-6)。

このほか、四重弧文AIの型を上下逆に用いたため、第2弧線ではなく第3弧線が太くなってしまった失敗作が3点ある。

以上細分した四重弧文AI1~10は基本的な製作技法は共通する(Ph.97~99)。

凹面は四周にヘラケズリをおこなう以外はほとんど調整しない。このため、粘土板の糸切り痕と合わせ目、桶の側板圧痕、布袋の綴じ合わせ目を残す。桶の側板圧痕は軒平瓦1枚あたり9~11枚分あり、1枚の側板幅は2~4cmある。桶巻き四枚作りだから、桶は約40枚の側板を綴じ合わせた計算になる。側板を綴りあわせた紐の痕跡は凹面に残らない。瓦の分割指標は紐の分割凸帯による分割界線。この分割界線を基準にして4種類の側板圧痕(側板痕①~④)を識別し、使用した桶が1個だったことを明らかにした(第VI章3B参照)。

布袋の綴じ合わせ目は3種類(布袋a~c)ある。四重弧文AI各種との対応は、

布aがAI1~3・8、布bがAI4~7・9、布cがAI10となる。

に向かうものが圧倒的に多い。狭端面もヘラケズリ。両側辺と狭端の凹面側にヘラケズリで面取りする。

四重弧文A Iの規格は、瓦当幅29～31cm前後、全長37～39cm前後。全長はややばらつきが大きく、種別ごとでもまとまりはない。花崗岩を砕いた角張った砂粒を含む緻密な胎土をもつ。比較的よく焼き締まったものが多いが、軟質のものまで様々。色も明るい灰色から暗い灰色、灰褐色などがある。

倒壊した東面回廊周辺から完形品が多量に出土し、これらは凹面に風蝕の跡を、凸面には朱線や朱書、墨線や墨書を残すものが多い。また、凸面と凹面の瓦当部以外の三方、瓦当面の両端に葺き土の痕跡をとどめる。風蝕部の長さ（葺き足の長さ）は、16～20cmである。

凹面風蝕痕
と葺き足

特殊な例として、初め軒平瓦として使用されたが、後に顎部を叩き落として、狭端と広端を逆転させ、普通の平瓦として葺いた例がある。凹面の瓦当側と狭端側の両方に風蝕痕跡が残っている（Ph.99-5）。

四重弧文軒平瓦A II 四重弧文A IIは第2弧線が特に太く、しかもおおむね凹線が狭い。瓦当幅が狭端幅より大きく、瓦の平面形は台形である。側面は分割断面を残す。瓦当幅は、35～36cm前後で、高麗尺1尺を企図する。金堂周辺を中心に、168.5個体が出土した。金堂の創建軒平瓦。文様によって13種に細分した（Ph.92～96・100、Fig.92）。

金堂創建瓦

A II 1は、第2弧線が太い。その断面形はやや扁平だが丸味がある。凹線は細く鋭い。瓦当幅34.7～35.6cm。顎の長さ3.3～3.8cm。隅軒平瓦が1点ある。21.5点出土。

A II 2は、第2弧線が太く、その断面形は丸味をもつ。第3弧線がA II 1に比べて細い。凹線はやや太めで底が丸い。瓦当幅35cm以上。顎の長さ3.5～3.8cm。全長40.5cm。23.5点出土。

A II 3は、弧線すべての断面形が強い丸味をもつ。凹線は細く、底に面をもたない。瓦当幅36.1cm。顎の長さ3.5～3.8cm、1点のみ4.9cmある。12.5点出土。

A II 4は、A II 3に似て弧線の断面形は丸く、凹凸が著しい。凹線にはやや幅があり、底に若干面をもつ。顎の長さ3.3～3.5cm。隅軒平瓦が2点ある。瓦当幅35cm以上。7.5点出土。

A II 5は、A II 1に似るが、第3弧線に丸味が乏しく、わずかに平坦面がある。凹線もやや太め。瓦当幅35cm以上。顎の長さ3.7～4.1cm。隅軒平瓦が1点ある。15点出土。

A II 6は、A II 2に似るが、第2・3弧線がやや扁平で、かつ細い。瓦当幅37.9～40.8cm。顎の長さ4.0～4.5cm。隅軒平瓦が1点ある。24点出土。

A II 7は、A II 4に似て弧線断面に丸味が強いが、やや低い。瓦当幅35.2cm以上、顎の長さ3.6cm。2点出土。

A II 8は、A II 6に似て弧線はやや扁平だが、第3・4弧線がやや太い。瓦当幅36cm以上。顎の長さ4.0～4.3cm。11.5点出土。

A II 9は、A II 8に似るが、凹線が太い。そのため、第2・3弧線がやや細い。また、第3弧線に平坦面がない。瓦当幅不明。顎の長さ4.1cm。4点出土。

A II 10は、A II 7に似るが弧線は細めでかつ低い。瓦当幅31.8cm。顎の長さ3.9cm。1点出土。

A II 11は、A II 1に似て凹線は細く鋭いが、弧線の盛り上がり欠ける。瓦当幅不明。顎の長さ4.1cm。1.5点出土。

A II 12は、瓦当厚が小さく、第2弧線は平坦。第3弧線は三角形に尖る。顎は短く浅い。瓦

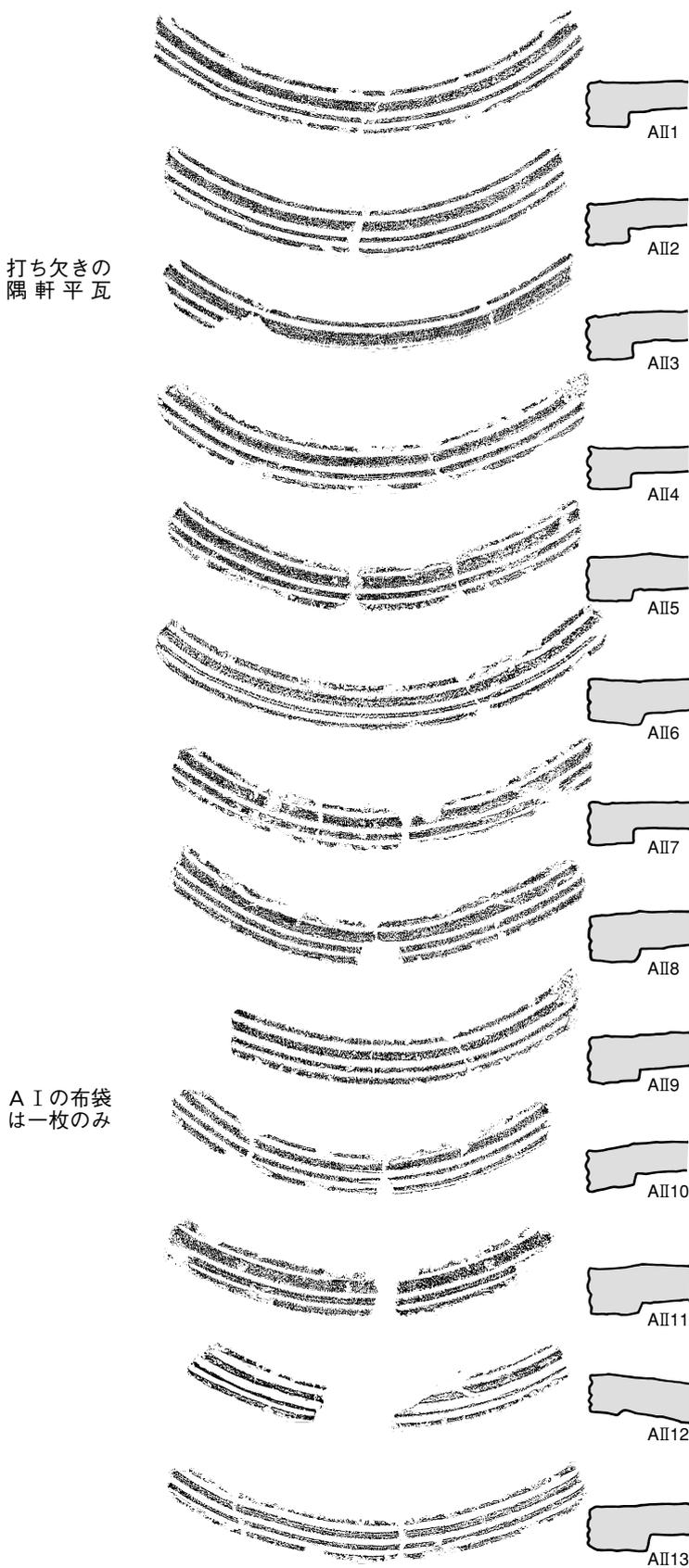


Fig.92 四重弧文軒平瓦A IIの種別 1:6

当幅不明。顎の長さ2.9cm。1点出土。

A II 13は、弧線が平坦な点はA II 8に似るが、施文が粗雑。瓦当幅36cm以上。顎の長さ5.1cm。2.5点出土。

四重弧文A II 1・3～6には、焼成後に打ち欠いて製作された隅軒平瓦がある(Ph.93-1・2、96-1・2)。また、打ち欠きで側辺に抉りを作った例が、A II 1・12とA II 種別不明に各1点ずつある(Ph.95-1・2)。種別不明の例は、抉りに接した平瓦部にやはり、焼成後に孔をあけている。全長41.1cm。用途は明らかでない。

四重弧文A IIも四重弧文A I同様に凹面はほとんど調整しない。そのため、糸切り痕、桶の側板圧痕、布綴じ合わせ目、粘土板合わせ目が残る(Ph.100-1～3)。

四重弧文A IIは瓦の平面形が台形だから、桶はバケツを伏せたような截頭円錐形だった。残念ながら、側板痕を四重弧文A Iのように識別することはできなかった。布綴じ合わせ目は2条あるが、布袋は一つ(布d)。顎は粘土板を貼り付けているが、キザミ目はない。

凸面は全面をヨコナデ調整するため、叩き目はあまり残らない。叩き板の軸に斜交する刻線の平行叩き目、目の細かい斜格子と正格子叩き目を確認した(Ph.100-4～6)。叩き目は叩き締め円弧を描く。顎は粘土板貼り付けで、キザミ目はない。顎の粘土板は桶巻き痕跡を残す。

側面調整は、分割破面だけをヘラケズりするb手法。ヘラケズリ方向は

四重弧文A Iと逆で、狭端から瓦当に向かうものが多い。側辺の凹凸両面側にヘラケズリで面取りする。凸面側の面取りは瓦当部で深く、四重弧文A Iとの見た目の上での大きな違いである。四重弧文A II 1には凹面側のヘラケズリを省略するものが多い。

瓦当幅は、ほとんどが35～36cm前後におさまるが、四重弧文A II 6はやや大きく38～40cmほど、逆に四重弧文A II 10は幅が小さく32cmに満たない。胎土はA Iよりやや粗く、花崗岩起源の砂粒を含む。焼成は硬質で、暗灰色ないし暗青灰色あるいは明灰色。

b 四重弧文軒平瓦B型式 (Ph.100～106, Fig.93・94)

四重弧文軒平瓦B型式（以下、四重弧文B）は、桶巻き作り四重弧文軒平瓦の1型式で、凹線の底面が平坦なことを特徴とする。

文様の違いにより、弧線が幅広くその上面が平坦な四重弧文B Iと、弧線の断面形が丸味をもち凹線の幅がより広い四重弧文B IIにわける。四重弧文B Iは顎が長めで段はやや浅い。これに対して、四重弧文B IIは顎が短く段は深い。

四重弧文軒平瓦B I 四重弧文B Iは、主に瓦当文様により6種に細分した (Ph.100, Fig.93)。出土個体数は181点。

B I 1は、弧線がすべてほぼ同じ幅をもち、凹線がやや太い。61点出土。

B I 2は、4条の弧線のうち、第2弧線が他より太い。弧線は断面がやや丸味をもつ。凹線はB I 1よりやや細い。49点出土。

B I 3は、第2・3弧線が他の弧線より太い。凹線は細い。20.5点出土。

B I 4は、弧線がごく細く、凹線はB Iでは最も幅が広い。一見、B IIに近い文様だが顎の特徴や製作技法からB Iに含める。21点出土。

B I 5は、弧線はすべてほぼ同じ幅だが、弧線が太く逆に凹線が細い。10.5点出土。

B I 6は、凹線が細い点からするとB I 3に似るが、第3弧線がほかより太いことでB I 3と区別した。10.5点出土。

四重弧文B Iは、凹面をほぼ全面ナデ調整するものと、瓦当近くをヘラケズリ調整するだけでそれ以外の大半の部分は調整しないものとの2種がある。凹面不調整の個体はもちろん、ナデ調整した個体でも、凹面に粘土板の糸切り痕、桶の側板圧痕、布袋の綴じ合わせ目、粘土板の合わせ目がある (Ph.105・106)。また、平瓦部を打ち欠いて作った隅軒平瓦がある (Ph.105-1・2)。

布袋の綴じ合わせ目は、B I 1に布綴じe・f (Ph.105-3～5)、B I 2に布綴じg (Ph.105-6)、B I 4に布綴じh (Ph.106-1～3)、を確認した。ナデ調整された個体ではその有無や異同の

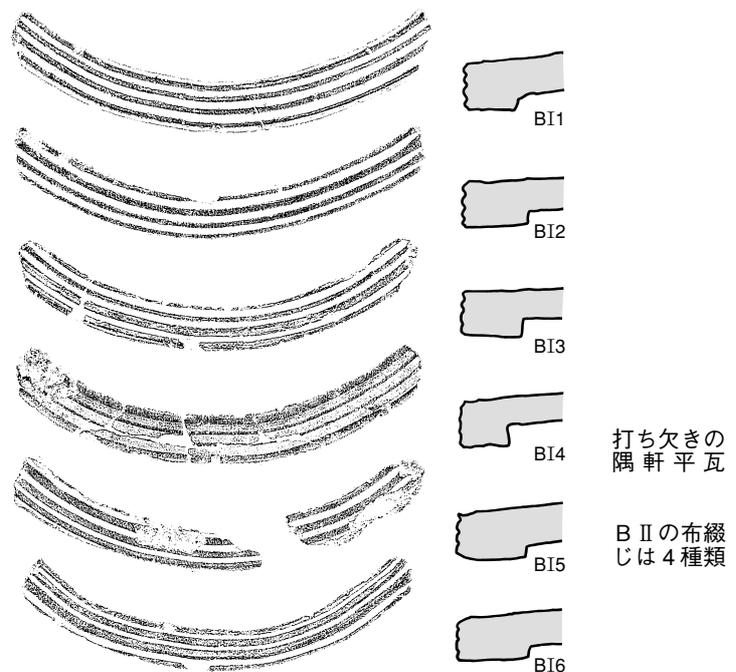


Fig.93 四重弧文軒平瓦B Iの種別 1:6

瓦当幅がA Iより大

Bは重弧文の凹凸浅い

打ち欠きの隅軒平瓦

B IIの布綴じは4種類

判定が困難だったため、これらが四重弧文BIの布綴じ痕すべてではなかろう。

粘土板合わせ目はS型とZ型がある。粘土板が足らず、幅の狭い粘土板を補ったため、1枚の軒平瓦にS型とZ型が共存する例もある(BI 2・BI 4)。凸面は格子ないし斜格子刻線叩き板で叩き締めたのちヨコナデ調整する。顎は粘土板貼り付けで、キザミはない。側面調整は分割断面を残すb手法。凹凸両側を面取りする。ヘラケズリの方向は、左側辺が瓦当→狭端方向、右側辺は狭端→瓦当方向で、左右逆向きとなる。

四重弧文軒平瓦BII 四重弧文BIIは8種に細分した(Ph.102~104, Fig.94)。147点出土。

BII 1は、底が平坦な凹線と断面の丸い弧線の特徴とする。凹線・弧線とも幅がほぼ同じ。瓦当幅は28.6~32.2cm。全長は37.8~38.7cmのもの、41.9cmと長いものがある。88点出土。

BII 2は、弧線が細く、凹線が太い。弧線の幅はほぼ同一。瓦当幅31.8cm。22.5点出土。

BII 3は、BII 1に似るが、弧線は断面が角張る。瓦当幅28.6cm。9点出土。

BII 4は、BII 3に似るが、弧線がやや太く、凹線が細い。瓦当幅29.6cm。4点出土。

BII 5は、BII 1に似るが、第2弧線が他より太い。瓦当幅不明。1.5点出土。

BII 6は、BII 1に似るが、第3弧線が他より太い。BII 5と同じ挽き型を上下逆転させて施工した可能性がある。瓦当幅不明。1.5点出土。

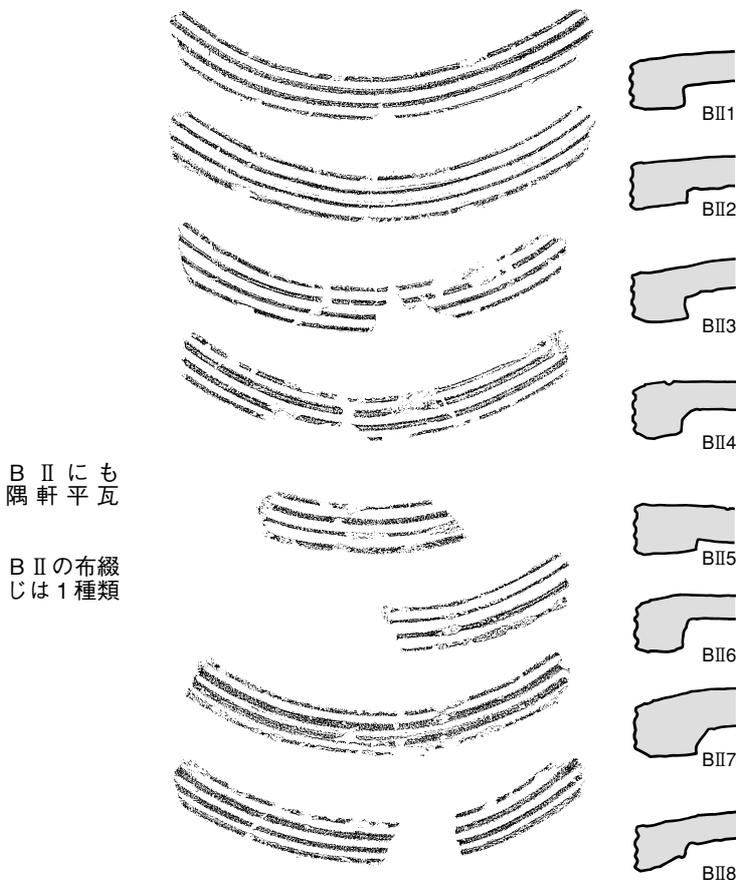
BII 7は、弧線が太く、凹線が細い。凹凸に乏しい文様はBIに近いが、顎の形態や製作技法からBIIに分類した。瓦当幅30.7cm、全長41.8cm。6点出土。

BII 8は、BII 4やBII 7に似るが、第2弧線がほかより太い。瓦当幅30.9cmと33.8cmの個体があり、全長38.0cmの例がある。10.5点出土。

四重弧文BIIは、凹面は瓦当近くに幅の広いヘラケズリをするだけで大半は調整しない。このため凹面には粘土板の糸切り痕、桶の側板圧痕、布袋の綴じ合わせ目、粘土板の合わせ目を認めることができる(Ph.103・104)。また、平瓦部を打ち欠いた隅軒平瓦がある(Ph.103-1)。

布袋の綴じ合わせ目は、四重弧文BII 1・4・7・8に布綴じ(Ph.103-1・3)を確認した。四重弧文BII 2・3・5・6は個体数がわずかで、布綴じ合わせ目が残るものがない。違う布綴じを確認できなかったため、四重弧文BIIは基本的に一つの布袋(布j)で作られたとみてよい。

布袋が1枚であれば、桶も同じく1



B IIにも
隅軒平瓦

B IIの布綴
じは1種類

Fig.94 四重弧文軒平瓦BIIの種別 1:6

個だ。分割凸帯は紐。四重弧文A Iほど明瞭ではないが、側板の圧痕のパターンは4種類に限られるようだ。ただし、判別できた個体数が少ないため、布綴じ合わせ目や粘土板合わせ目との対応関係は明らかにできなかった。粘土板合わせ目はS型とZ型があり、1個体に両者が共存する例もある。

凸面は、顎面も含め全面をヨコナデ調整。顎面と平瓦部にはかすかに斜格子刻線叩き目が残る。また、顎部の剥離したものは、剥離面に叩き目が明瞭にみえる。顎部接合用のキザミ目はない。側面調整は、分割破面だけをヘラケズリするb手法で、凹凸両面側に面取りをおこなう。

c 四重弧文軒平瓦C型式 (Ph.107~114, Fig.95・96)

四重弧文軒平瓦C型式(以下、四重弧文C)は、桶巻き作り四重弧文軒平瓦の1型式。弧線の幅が4条ともほぼ同じで、凹線は幅が狭く鋭い。成形に、木目斜行の斜格子目刻線叩き板を用い、凸面調整が不十分なため、叩き目が明瞭に残る。

四重弧文Cは、施文手法の違いによって、施文後に粘土円筒を分割する四重弧文C Iと、粘土円筒分割後に1枚ずつ施文する四重弧文C IIとに区分する。粘土円筒分割後に施文する型式は、山田寺では、四重弧文C IIのみ。

施文法で
Cを2分類

四重弧文軒平瓦C I 文様や製作手法を基準に、C I 1~C I 10の10種に細分した(Ph.107~109, Fig.95)。

C I 1は、弧線の断面形が丸くほぼ均一で、凹線は細く深い。顎は長さ4~5cm。平瓦部広端部凸面と顎の粘土板の双方に太く粗い斜格子キザミ目を入れて接合する。まれに、後者を欠いて、平瓦部凸面だけにキザミ目を入れて接合する例もある。瓦当幅30.3~31.3cm、狭端幅25.6cm、全長40.5cm。砂粒の少ない緻密な胎土をもち、焼成はやや軟質のものから硬質のものまでであるが、軟質のものが多い。暗灰色ないし暗茶褐色。平瓦部を打ち欠いた隅軒平瓦を2点確認した(Ph.107-1)。また、やはり打ち欠きで瓦当幅を26.5cmほどに縮めたものもある。36点出土。大半が宝蔵SB660周辺から出土した。

顎の接合に
キザミ目

宝蔵所用瓦

C I 2は、C I 1より弧線が太く凹線は浅い。顎は5~5.5cm。顎の接合面にはキザミ目も叩き目もない。瓦当幅29cm。砂粒は少ないが赤褐色のクサリ礫を多く含んだ胎土で、やや軟質の焼成。断面明赤褐色、表面灰白色。4.5点出土。

C I 3は、凹線が浅い点でC I 2に似るが、顎が4cm前後と短い。顎接合面にはキザミ目も叩き目もない。凹面は大半の個体でほぼ全面をタテにヘラケズリする。瓦当幅30.2cm。花崗岩を砕いた砂粒を含むが胎土は緻密。比較的堅い焼きで灰茶色。9.5点出土。

C I 4は、C I 1に似るが凹線がより細く鋭い。顎の長さは4cm弱と短い。顎の接合は、平瓦部凸面と顎の粘土板の両方に粗い斜格子キザミ目を入れる。瓦当幅29.7cm。砂粒を含むが量は少なくクサリ礫の量が目立つ。堅い焼きで灰色。1点出土。

C I 5は、C I 1やC I 4に似るが、顎の接合面にキザミ目も叩き目もない。顎接合面の平瓦部凸面には糸切り痕、顎の粘土板に布目を残すものがある。瓦当幅27cm。胎土は砂粒が少なく緻密。比較的堅い焼きで暗灰色または灰色。7.5点出土。

C I 6は、C I 5に似るが凹線が特に深い。顎の長さは5cm前後。顎貼り付け前に叩きをおこなうものとこれのないものがあるが、キザミ目は入れない。瓦当幅は不明。胎土は砂粒が少なくクサリ礫の粒が目立つ。堅い焼きで、表面は明灰色、断面は淡褐色。2.5点出土。

CI 7は、CI 6に似て凹線は深い。顎は短くかつ深い。顎長は約4cm。顎接合面に叩き目はあるが、キザミ目はない。凸面に残る斜格子叩き目は、刻線の間隔が狭い細かな斜格子叩き目。瓦当幅31.4cm。細かい砂粒を含みやや粗い胎土。堅い焼きで、灰色ないし銀灰色。3点出土。

CI 8は、文様や顎の接合手法はCI 5に似る。瓦当厚が大きいことと叩き板の違いでCI 5と区別した。0.5点出土。

CI 9は、CI 3に似て文様が浅い。顎の長さは6cm以上。瓦当面の挽き型が完全にあたらない部分に藁座状⁸⁾圧痕が観察できる。砂粒を多く含む胎土。淡褐灰色。0.5点出土。

CI 10は、凹線が細く深い点ではCI 6やCI 7に類似するが、弧線の上面が平坦。顎の接合面にキザミ目はない。凹面のほぼ全面をナデ調整するのはこれのみ。瓦当幅は不明。砂粒を含みやや粗い胎土。堅い焼きで、暗灰褐色。2点出土。

四重弧文CIは、種別により調整手法に違いはあるものの、基本的な製作技法はよく似ている。最も出土量の多い四重弧文CI 1を例に製作技法の特徴を述べる(Ph.111・112)。

CIの布綴
じは3種類

凹面は瓦当縁と狭端側縁にヘラケズリする以外調整をくわえない。そのため、糸切り痕、桶の側板痕、布圧痕はどの個体にもある。粘土板合わせ目はS型とZ型がある。粘土板合わせ目が平瓦部側辺に近いところに位置するのは、四重弧文A・Bになかった特徴。布袋綴じ合わせ目は布綴じk・m・nの3種がある(Ph.111-1・2)が、平瓦6類Aとの比較によると、布綴じnは布綴じmのほどけた状態とみてよい。分割凸帯は撚り紐。また、凹面の瓦当に近い側辺部分に棒状の叩き板で内叩きをおこなうものが多い。

平瓦と同じ
布袋

桶に粘土板を巻き付けた後、凸面を斜格子刻線叩き板で叩き締める。その後、凸面をヨコナデ調整するが、叩き目は大半が消えずに残る。叩き目は叩き締めの円弧を描く。凹面の大半は不調整で、布袋の布圧痕、糸切り痕跡、粘土板合わせ目、桶の側板圧痕をとどめる。凸面の顎段部にはヨコナデの後についた凹型台の圧痕がある。これは、瓦分割後の凹面や側面調整時の調整台の痕跡。側面調整は分割截面と分割破面を同時にヘラケズリするc手法。この側面調整との前後関係から、施文後に粘土円筒を分割したことは明瞭だ。

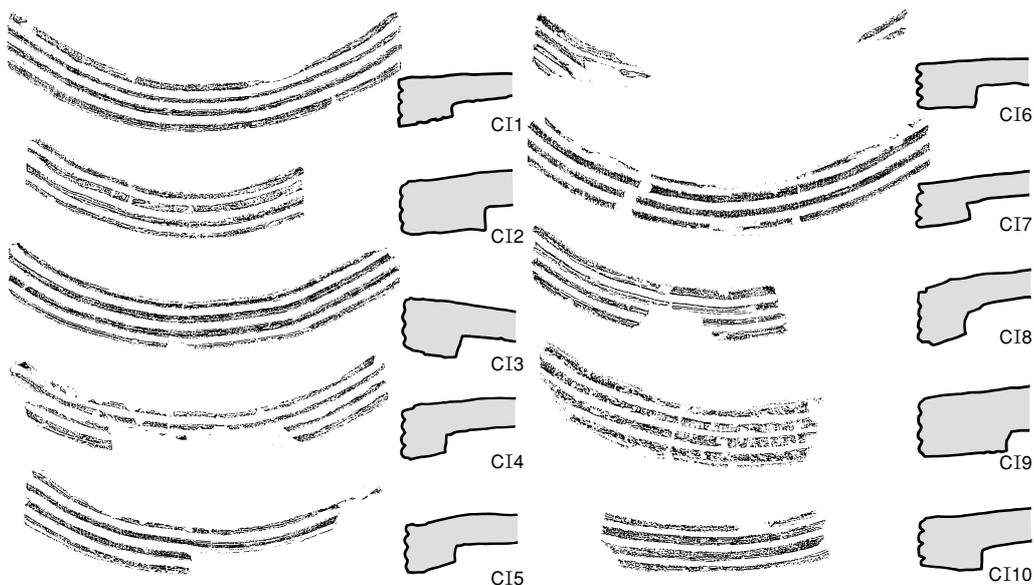


Fig.95 四重弧文軒平瓦CIの種別 1:6

以上の四重弧文C I 1と違った調整手法などについて簡単に述べる。凹面に調整を加えるのは、四重弧文C I 3・5・9・10の4種。前三者がヘラケズリ、後者はナデ調整 (Ph.112)。

四重弧文C I 2の凹面には、凸面と同じ叩き板でついた叩き目を残す例がある (Ph.112-3)。叩き目の凸部に布圧痕がつくこと、逆に凹部に布の痕跡が全くないこと、桶側板の窪んだところ、つまり平瓦部凹面では凸部分に叩き目が残ることなどからみて、これは補足の叩き締めではなく、粘土板製作時の叩きと推定する。布綴じ合わせ目は、四重弧文C I 4 (布綴じo, Ph.111-5)と四重弧文C I 7、四重弧文C I 10 (布綴じp) に確認した。

四重弧文軒平瓦C II 四重弧文C IIは9種に細分する (Ph.109・110, Fig.96)。

C II 1は、凹線がやや太く、断面形は丸い。顎の長さは4 cmから6 cmの幅があるが、4.5~5 cm未満の長さが一般的。平瓦部凸面と顎の粘土板の両方に粗いキザミ目を入れて顎を接合する。キザミ目はX字形とN字形の2種 (Ph.114-7)。瓦当幅30.3~31.4cm、全長37.8~40.5cm。砂粒はやや多いが緻密な胎土、焼成はやや軟質。断面は灰褐色ないし明黄褐色で芯が黒色、表面は黒褐色ないし黒灰色。33.5点出土。

C II 2は、C II 1に似るが、第1・4弧線が細く凹線はやや細い。顎は長さ4 cm台で短く、接合面にキザミ目はない。瓦当幅30~31.5 cm、全長38.8cm。胎土に細かい砂粒をやや多く含む。堅い焼きで灰色か明灰色。凹面に焼成後「南十二」とヘラ書した例がある (Ph.114-9)。7点出土。

C II 3は、瓦当厚が小さいため上下の第1・4弧線が型通り表出されない。凹線はやや深い。顎の長さは4 cm前後でC II 2よりさらに短い。顎の接合面にキザミ目はない。瓦当幅29.3cm。胎土は砂粒を少量しか含まず緻密。堅い焼きで断面は明橙色、表面は茶褐色。3点出土。

C II 4は、凹線が浅く施文は粗雑。顎の長さは約5 cm。顎の接合面にキザミ目はない。瓦当幅30.4cm。胎土は砂粒を多く含む粗い。軟質の焼きで淡褐色。隅軒平瓦が1点ある。13.5点出土。

C II 5は、C II 2に似た文様だが顎の接合面にキザミ目を入れる点で区別した。平瓦部凸面と顎の粘土板の両方に斜格子キザミ目を入れる。顎の長さ4.5cm。瓦当幅30.7cm、全長39.1cm。砂粒の多いやや粗い胎土。堅い焼きで断面淡褐色、表面は灰褐色ないし暗灰色。1.5点出土。

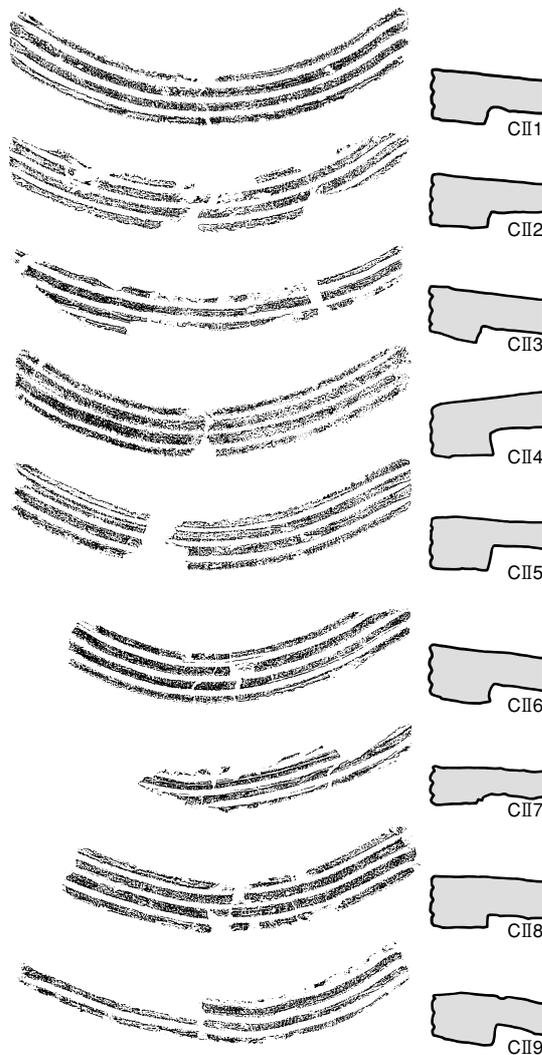


Fig.96 四重弧文軒平瓦C IIの種別 1:6

CII 6は、CIIでは断面に丸味のある弧線をもつ。キザミ目を入れて顎を接合。顎の長さ5~6cm。瓦当幅不明。砂粒の少ない胎土で、やや軟質。断面明灰色、表面暗灰色。15点出土。

CII 7は、CII 3に似るが、顎の接合面両方に粗い斜格子キザミ目を入れることと、叩き板の斜格子刻線が細かい点で区別した。瓦当幅不明。胎土は砂粒が少なく緻密。軟質の焼きで、断面橙褐色、表面暗茶褐色ないし褐灰色。2.5点出土。

CII 8は、CII 1に似るが、平瓦部が厚いため段部が低い。顎の接合面にキザミ目はない。瓦当幅不明。砂粒の少ない緻密な胎土。堅い焼きで、灰色。1点出土。

CII 9は、CII 1に似るが、弧線の丸味が強い。顎の接合面にキザミ目はない。瓦当幅不明。砂粒を多量に含む粗い胎土。焼きは堅く、暗灰色。2点出土。

出土点数の多い四重弧文CII 1によって製作技法を記述する (Ph.113・114)。

凹面は四周をヘラケズリする以外は調整しない。糸切り痕、桶の側板圧痕、布圧痕があり、なかに粘土板合わせ目や布綴じ合わせ、分割界線を残す例がある。

CIIの布綴じは4種類

四重弧文CII 1には布綴じr・sの2種類を確認したが、これが布袋の違いに対応するかどうかは確証がない。四重弧文CII 1以外では、四重弧文CII 2に布綴じt (Ph.114-5) を、CII 4に布綴じu (Ph.114-6) を確認した。粘土板の合わせ目は、四重弧文CIと同じように、平瓦部側辺にごく近接した位置にあり、たとえ粘土板合わせ目で剥離しても瓦が機能するように作ってある。

顎は粘土板貼り付け。粘土板合わせ目があり、顎の成形も桶巻きの段階におこなう。顎の接合面に四重弧文CII 1のようにキザミを入れるものとなないものがある。凸面には叩き締め円弧を描く叩き目が確認できる。以上の特徴は四重弧文CII 1が桶巻き作り技法だったことを示す。

分割後施文の手がかり

ところが、瓦当文様をみると、重弧文、特に凹線が瓦当面の左右で浅くなったり、両端は不規則に垂れ下がったりする。しかも凹線の先端が側面からはみ出して、施文が側面調整の後だと物語っている。これらの特徴から、四重弧文CII 1は粘土円筒を分割し各部を調整した後、重弧文を施文したことは明らかだ。凸面の段部に凹型台の圧痕が明瞭に残る例が多いのは、これが調整台として機能しただけでなく、施文にも関連したためだろう。

d 四重弧文軒平瓦D型式 (Ph.115~117, Fig.97)

四重弧文軒平瓦D型式 (以下、四重弧文D) は、弧線が平坦で凹線の浅い四重弧文をもつ、粘

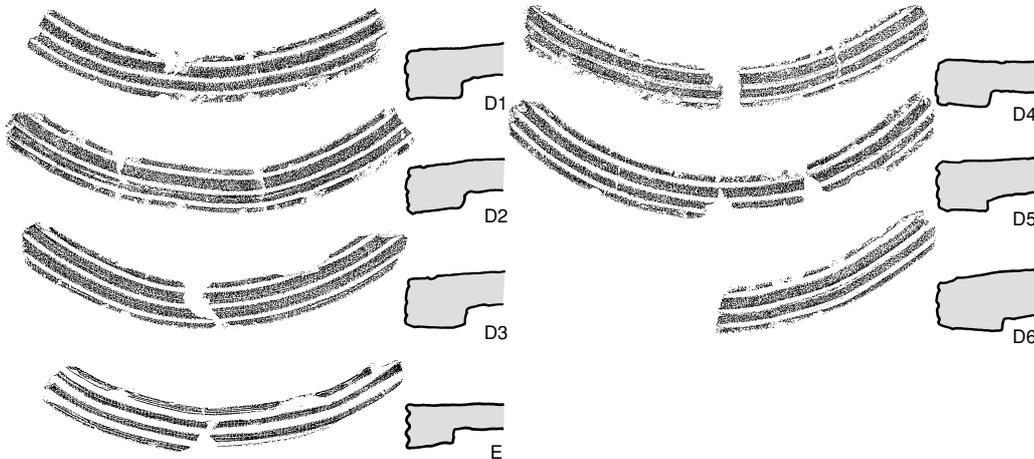


Fig.97 四重弧文軒平瓦D・Eの種別 1:6

土板桶巻き作り軒平瓦。91個体が出土した。文様を基準にD1～D6に細分した。

D1は、第2弧線が太く、第3弧線がやや太いもの。瓦当幅32.3～32.7cmのものと、38.1cmの個体が1例ある。19点出土。

D2は、D1に似て第2弧線がもっとも太く、第3弧線がD1より細い。瓦当幅30.4～32.6cm。瓦当幅31.4cmで、全長40.7cm、狭端幅27.0cmの例がある。25点出土。

D3は、第2・3弧線がほぼ同じくらい太い。瓦当幅30～31cm。全長41.1cm、狭端幅28.9cm。3点出土。

D4は、D1に似るが、凹線が太くかつ浅い。瓦当幅、30.5～31.3cm。6.5点出土。

D5は、D2に似るが、凹線が太くかつ浅い。瓦当幅、32.5cm。10点出土。

D6は、D3に似るが、凹線が太くかつ浅い。瓦当幅は不明。3点出土。

瓦当幅は30～38cmと幅があるが、大半は31～33cmの間に収まり、38cmの例は1例しかない。

四重弧文Dは各種とも、それぞれの形態や製作技法はほぼ共通する(Ph.116)。

凹面は、四周をヘラケズリ調整する以外、ほとんど調整しない。このため、凹面には、桶の側板痕、布圧痕、糸切痕が残り、紐の分割界線や粘土板合わせ目も観察できる。また、凹面の瓦当から3～4cmほどのところに布袋の端がみえ、そこから瓦当までの間は桶が粘土板に直接あたっている例がある(Ph.116-1)。

凸面は、顎面を含め、丁寧なヨコナデ調整で仕上げるが、叩き目がかすかに残るものがある。叩き板は、木目斜交の斜格子あるいは正格子刻線を刻んだもの。

側面調整は、分割破面だけをヘラケズリする手法。ヘラケズリの方向は、広端から狭端に向かうものとその逆とがあるが、ほとんどは両方の側面を同じ方向にヘラケズリ調整する。側面調整の後、凸面の側縁を面取りする。

顎は、長さ4cm台の段顎。4cm未満のものや5cmを越えるものはほとんどない。接合面には刻み目はなく、平瓦部凸面を叩いたのち、軽くヨコナデして粘土板を貼り付ける。まれに、顎の接合面が瓦当側で大きく外反する例がある。顎接合前の粘土円筒が、その下端でつぶれていた状況を伺うことのできる資料とみたい。

四重弧文D2とD6には、布綴じ合わせ目がある。左側に布綴じ目、右側に縫い目が走る布綴じ。やや消極的ではあるが、ほかの布綴じ合わせ目を確認しなかったので、四重弧文Dの布袋は、布綴じの「布j」とみてよからう。

さて、布綴じjは四重弧BIIでも確認した(Ph.116-3)。四重弧文BIIと四重弧文Dとは瓦当文様はかなり違うが、一つの布袋を共有する。さらに、平瓦部が比較的残っている個体を観察すると、四重弧文Dの側板圧痕も四重弧文BIIと一致するものがある(Ph.104-1、116-2)。従って、この二つの型式は共通の桶と布袋を使って生産されたと考えて、ほぼあやまりないだろう。

この二つの型式を比較すると、凹面の瓦当近くを幅広くヘラケズリする手法や、砂粒が少なく緻密な胎土、あるいは比較的堅い焼きなど共通点が多いので、瓦製作道具だけでなく、瓦工も共通していた可能性が高い。

e 四重弧文軒平瓦E型式(Ph.116・117、Fig.97)

四重弧文軒平瓦E型式(以下、四重弧文E)は、縄巻き叩き板を用いる粘土板桶巻き作りの型挽き四重弧文軒平瓦。文様および叩き板の違いによる細分はできなかった。出土個体数は7点。

Dの布袋は
BIIと同じ

桶巻き作り
で縄叩き

隅軒平瓦が1点ある(Ph.117-1)。文様は、弧線がすべて同じ太さで断面形に丸味があり、凹線は細く深い。これらの特徴は四重弧文C Iに近い。

凸面には叩き締め円弧を描く縄叩き目があり、これをヨコナデ調整する。ヨコナデは、瓦当を下向きにした状態で、右→左方向に動く。凹面には、糸切り痕、桶の側板痕、布圧痕がある。粘土板合わせ目と布袋の綴じ合わせ目(布綴じw)を残す個体もある。顎の接合面に叩き目やキザミ目がなく、顎面にかすかな縄叩き目を残すことがある。文様の施文方向は瓦当面を正面からみて右→左。これは凸面のヨコナデの方向とは逆転する。側面調整は、瓦当→狭端の方向に深くヘラケズりするc手法。凹面縁にのみヘラケズリで面取りする。瓦当幅28.5cm、全長41.0cm。砂粒は少ないがクサリ礫粒を多く含む緻密な胎土で、焼成は良好。明灰色。

f 四重弧文軒平瓦F型式 (Ph.118・121・123・124、Fig.98)

一枚作りで
格子叩き

四重弧文軒平瓦F型式(以下、四重弧文F)は、木目斜交の斜格子刻線叩き板(斜格子目)の一枚作り軒平瓦。凹面に側板痕がない、側面および狭端面に凹面から連続する布圧痕をとどめる例がある、糸切り痕、以上から粘土板一枚作りと判断した。施文は型挽き。文様の両端が凸面側に流れており、1枚ずつの施文を物語る。

瓦当幅および瓦の大きさと文様の違いで四重弧文F Iと四重弧文F IIにわけ(Fig.98)。

F Iは瓦当
の幅が大

四重弧文軒平瓦F I 四重弧文F Iは、瓦当幅が35cm前後と大きい。瓦当文様は凹線が太めで、弧線は平坦。凸面全面に残る叩き目は粗い(菱形の対角線で1.2×2cm)。金堂周辺を中心に、35.5個体が出土した。文様の違いで、F I 1とF I 2に細分する。

F I 1は、凹線が浅くやや太いため、文様の凹凸に乏しい。また、弧線の上面にきちんと挽き型があたっていないものが多い。瓦当幅32.5~35cm、全長38.3~40.3cm。

F I 2は、F I 1よりも弧線が細く凹線は深く太い。瓦当幅35.2cm、全長は不明。

細部調整に
4タイプ

四重弧文F Iは、瓦当面をヘラケズリして整えた後、正面(瓦当面)からみて右→左に挽き型を動かして施文する。右利き瓦工の凹型台上での作業だろう。凸面に凹型台の圧痕がある。その後、顎面と段部近くを調整する。個体数の多い四重弧文F I 1には次の4タイプがある。

- a: 顎面全面を右から左にヘラケズリし、叩き目をほとんど残さない。平瓦部凸面は未調整。
- b: 顎面は右から左にヘラケズリ。平瓦部凸面の段部近くをタテ(狭端→段部)にヘラケズリ。
- c: 顎面は左から右にヘラケズリ。方向がa・bとは逆。平瓦部凸面はヨコナデ。
- d: 顎面は中央部の瓦当よりの狭い範囲をヘラケズリし、他は未調整。平瓦部凸面も未調整。

a・b・dは凹面を調整しないが、cにはナデ調整をおこなう例がある。一方、四重弧文F I 2はcタイプに限られるが、これは個体数の問題かも知れない。

四重弧文F Iは、砂粒を多く含んだ粗い胎土。焼成はおおむね良好で、灰色から銀灰色。凸面に濃い赤色の朱線を残す例があり、瓦の出は約12cmとわかる。朱書や墨書の例はない。

四重弧文軒平瓦F II 四重弧文F IIは、瓦当幅27~30cmほどしかなく、

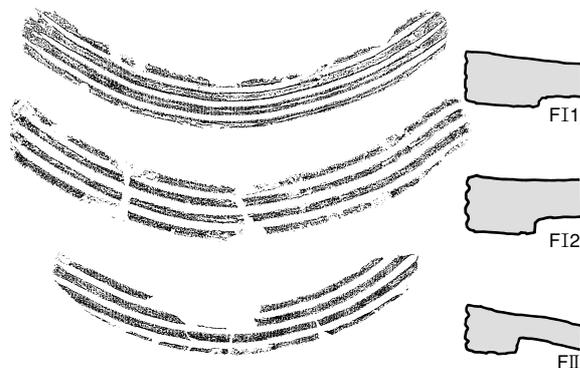


Fig.98 四重弧文軒平瓦Fの種別 1:6

FIより小さい。瓦当文様は、弧線の断面形に強い丸味があって凹線が細く、凸面の斜格子叩き目もかなり細かい（菱形の対角線で0.5×0.8cm）。顎は、長さ4.5cmほどと短いものの、段は深い。顎の接合面にN字形のキザミ目を入れるものと、これのないものがあり、顎面調整手法との組み合わせは、FI1で設定した4タイプすべてに両者が存在する。顎面にも叩き目があり、これは凸面のそれとは方向が直交する。砂粒の少ない緻密な胎土。焼きはやや甘い。断面黒色、表面は黄褐色ないし明黄褐色。出土個体数11点。

g 四重弧文軒平瓦G型式 (Ph.118~121・123・124, Fig.99)

四重弧文軒平瓦G型式（以下、四重弧文G）は、型挽き施文の縄叩き一枚作り四重弧文軒平瓦。文様が深く顎の短い四重弧文GIと、文様が浅く顎の長い四重弧文GIIにわたる (Fig.99)。

一枚作りで
縄叩き

四重弧文軒平瓦GI 四重弧文GIは、GI1~3の3種に細分する。31点出土。

GI1は、4条の弧線が同じ太さで、凹線が細く深い。段顎。胎土は砂粒少なく緻密。多くは軟質で、表面黄褐色、断面黒灰色。側縁をヘラケズリする以外、凹面は不調整。瓦当幅28.3~30.3cm、全長39.8cm。平瓦部を斜めに打ち欠いた隅軒平瓦が1点ある (Ph.120-2)。

GI2は、GI1に似るが、瓦当幅が狭く(26.7cm)、瓦当厚、凹線間距離も小さい。段顎で、顎は深い。砂粒の少ない緻密な胎土で、焼きは軟質で黒褐色。

GI3は、文様が浅く凹線間距離が広い。砂粒とクサリ礫を含む。軟質の焼きで灰色。

以上、3種とも凹面は四周をヘラケズリ調整するだけで、ほかは不調整。糸切り痕と布圧痕が残る。凸面も調整はせず、全面にタテ縄叩き目が残る。顎面は叩きを行った後、ヘラケズリを加える。側面はヘラケズリ調整するが、凹面から連続する布圧痕をとどめる例がある。

四重弧文軒平瓦GII 四重弧文GIIはGII1~5の5種に細分した。6点出土。

GII1は、凹線がやや太くかつ底面が丸い。弧線の上面には挽き型が十分に当たっていない。瓦当幅31.3cm。砂粒を含んだ粗い胎土。暗灰色の硬質の焼きである。

GII2は、凹線がやや鋭い。顎面は剥離して叩きの有無や調整が不明。顎の接合面にキザミ目や叩き目は無い。側面のヘラケズリは、左が狭端→瓦当、右がその逆方向。砂粒の少ない緻密な胎土。火を受けて淡赤褐色に変色する。

GII3は、凹線が最も浅く、かつ第1・4弧線が細い。顎面はナデやヨコヘラケズリで調整する。側面はヘラケズリで、凹面側に面取り。ヘラケズリの方向は左が瓦当→狭端、右はその逆。

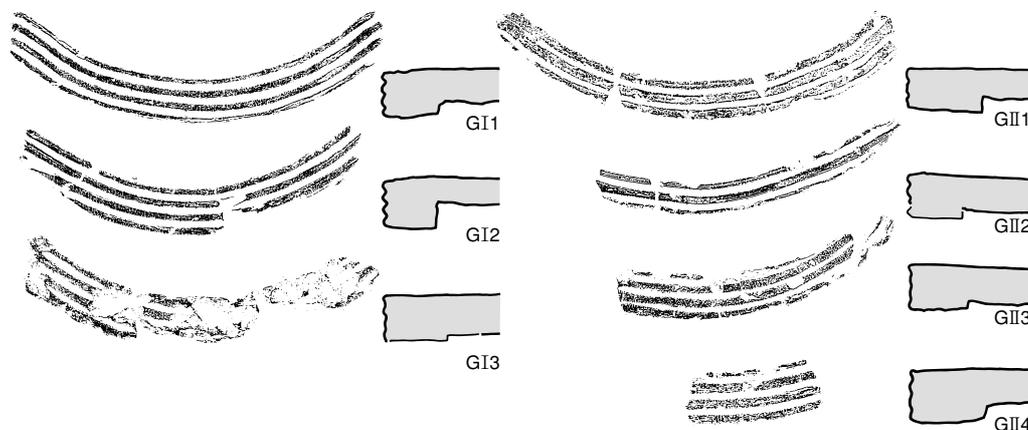


Fig.99 四重弧文軒平瓦Gの種別 1:6

凸面に凹型台の圧迫痕がある。瓦当面の施文は右→左に挽き型が動く。瓦当幅不明。胎土には花崗岩を砕いた砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で黒灰色ないし黒褐色。

G II 4は、G II 3に似て第1・4弧線が細いが、凹線は丸味がありやや太い。凸面の縄叩き目は細い(11本/3cm)。顎は平瓦部凸面に粗い斜格子キザミ目を入れて接合する。側面は左が瓦当→狭端、右はその逆方向にヘラケズリ。花崗岩粒を多量に含んだ粗い胎土で、焼きは甘い。黄灰色ないし暗黄褐色。

h 四重弧文軒平瓦H型式 (Ph.120・122~124、Fig.100)

一枚作りで
瓦 範 施 文

四重弧文軒平瓦H型式(以下、四重弧文H)は、瓦範を使って施文するタテ縄叩き一枚作り四重弧文軒平瓦。凹面に桶側板の圧痕がないこと、凹面から瓦当面あるいは側面に続く布圧痕、糸切り痕、以上の特徴から、凸型台による一枚作りとわかる。瓦範の特徴により、四重弧文H I：弧線4条分の瓦範を押捺、四重弧文H II：弧線3条分の瓦範を押捺、四重弧文H III：弧線2条分の瓦範を押捺、にわけられる (Fig.100)。

瓦 範 の 木 目

四重弧文軒平瓦H I 1種のみ。26点が出土した。各弧線はほぼ同じ太さであり、断面形は三角形に近い。瓦範の木目を瓦当面のほぼ全面に観察できる。

凹面は周囲をヘラケズリする以外不調整。中央に粘土板合わせ目S型を観察できる例があるが、素材とした粘土の幅が偶々不足したのだろう。基本的には1枚の粘土板で成形する。側面には凸型台に備わっていた棧の圧痕をとどめる例がある。凹面側縁と側面のヘラケズリは、右側が狭端→瓦当、左側はその逆方向をとることが多い。

凸面全面にはタテ縄叩き目(7~8本/3cm)が残る。なかに顎近くを横にヘラケズリないしヨコナデ調整するものがある。顎は貼りつけ段顎。粘土板貼り付け前にユビオサエで面を整え、叩き目やキザミ目はない。顎面は横方向にヘラケズリする。瓦当幅は約30cm。

打ち欠きの
隅 軒 平 瓦

胎土に砂粒とクサリ礫を含む。焼成軟質で茶褐色ないし褐色のものと、硬質で灰色ないし暗灰色に発色する例がある。前者が多い。平瓦部を打ち欠いた隅軒平瓦が1点ある。

四重弧文軒平瓦H II 1種のみ。12.5点が出土した。弧線上面と凹線の底面はともに平坦。瓦範が瓦当幅に足りなかったためか、左右2回押捺する。瓦当両端には明瞭な木目圧痕がある。瓦範押捺前にヘラケズリして面を整えるが、それのおよばない部分には凹面と連続する布圧痕を残す例がある。顎は貼り付け段顎。顎貼り付け面に縄叩き目はなく、ユビオサエ痕がある。

瓦 当 面 に
布 目 痕

凸面と顎面には細いタテ縄叩き目(16本/3cm)が残る。稀に顎面をヨコにヘラケズリする。凹面四周のヘラケズリは、右側辺が狭端→瓦当、瓦当沿いが右→左、左側辺は瓦当→狭端。凹型台の圧痕が顎段部や顎面にあるので、その上で時計回りにヘラケズリした結果だろう。側面は凸面側に深くヘラケズリして側辺を尖らせる。瓦当幅28.1~28.7cm、全長29cm。

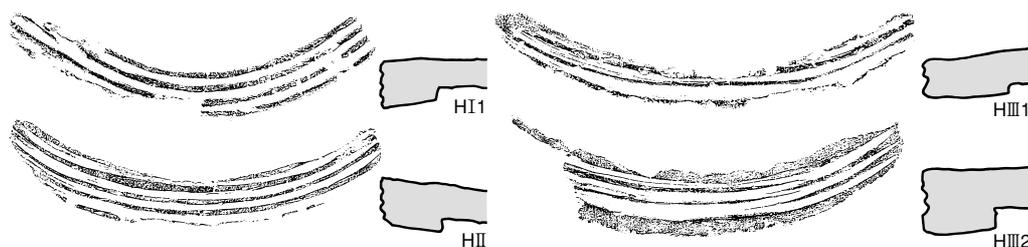


Fig.100 四重弧文軒平瓦Hの種別 1:6

胎土は、石英や長石などの砂粒を少量含むが、素地は緻密。焼成と色調に、硬質で灰白色、断面芯が黒色の一群と、軟質で黒色ないし灰黒色の一群の2種がある。硬質の一群が量が多い。
四重弧文軒平瓦HⅢ 四重弧文HⅢには同範だが、叩き板や側面調整の違う2種がある。四重弧文HⅢ 1・2とした。ともに第2・第3弧線だけを瓦範で表出する。この2条は丸味があり、両端には瓦範の木目がある。逆に第1・第4弧線は瓦範押捺前のヘラケズリの面を残すため上面が平坦となる。また、ヘラケズリの及ばない部分に凹面から連続する布圧痕のつく例がある。瓦当面両端には瓦範の木目がある。顎は貼り付け段顎。出土個体数は12点。

瓦範は木製

HⅢ 1は、顎の深さが1cm未満と浅い。凸面全面に縄叩き目(10~11本/3cm)を残す。平瓦部の叩き目はタテ、顎面のそれは瓦当中央を中心とする放射状をしている。凹型台に載せた際に一部の叩き目が潰れている。顎を貼り付ける前、ごく稀に一部を縄叩きする例がある。

凹面は四周を時計回りにヘラケズりする。両側面は凹凸両側から計4面のヘラケズリをおこなう。瓦当幅32.5cm、全長42.1cm。胎土には細砂を含む。茶褐色で表面黒色の軟質の一群と、灰色ないし暗灰色で硬質の一群がある。前者が多い。

HⅢ 2は、HⅢ 1と同範だが、瓦当厚が大きく、顎の深さが1.5cmある。凸面と顎面をともにタテ縄叩きし、叩き目はHⅢ 1より粗い(7本/3cm)。顎の接合面には叩き目もキザミ目もない。顎の段部や凸面に凹型台の圧痕を残す。側面は凸面側に深くヘラケズリし、凹面縁のヘラケズリとで側辺を尖らせる。瓦当幅30.7cm。砂粒の多い粗い胎土でもろい。黒灰色ないし灰色。

iii 三重弧文軒平瓦 (Ph.125・126、Fig.101)

三重弧文軒平瓦は、A型式：桶巻き作り型挽き施文、B型式：一枚作り型挽き施文、C型式：一枚作り瓦範押捺施文、の3型式に分類する (Fig.101)。

三重弧文軒平瓦A型式 三重弧文AはA1とA2に分ける。出土個体数は1点。

三重弧文A1は、凹線が細く、弧線の断面形が強い丸みをもつことを特徴とする。施文は瓦分割前。木目に斜交する細かい正格子刻線の叩き板を使い、顎貼り付け前に凸面全体を叩き締める。顎を貼り付けた後、さらに顎面だけに叩きをおこなう。その後、全面を丁寧にヨコナデ調整する。このため、叩き目はほとんど残らない。顎は長さ約4cm、深さ約1.2cmの短い段顎。凹面に側板痕と布圧痕が残り、粘土板合わせ目S型の例がある。側面は分割断面、破面とともに大きくヘラケズりするc手法。瓦当幅は不明。

桶巻きで
格子叩き

三重弧文A2は、凹線が太く弧線は平坦。顎は段顎で、長さ4.5cm、深さ1.4cm。凹面は一部をヘラケズリ調整するが、布圧痕と側板痕が残る。粘土板合わせ目を観察できる例はない。凸面は縄叩きのあとヨコナデ調整。瓦当幅は不明。

三重弧文軒平瓦B型式 施文の型は同じだが、瓦当部の作りが違う2種がある。これを、三重弧文B1・B2とする。出土個体数は11.5点。

三重弧文B1は、顎を幅広く作り、瓦当厚も

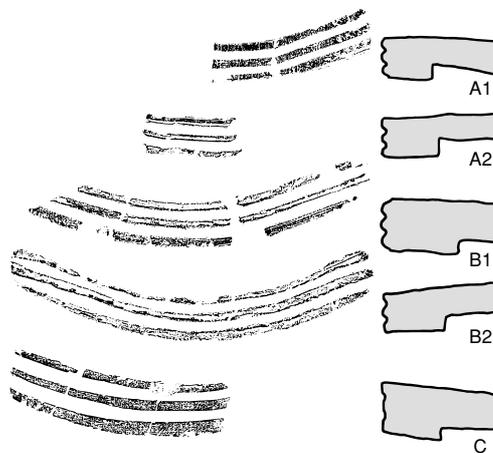
桶巻き作り
で縄叩き

Fig.101 三重弧文軒平瓦の型式分類 1:6

大きい。施文は深い。瓦当幅29.3cm。

三重弧文B2は、顎が短く瓦当厚は小さい。施文も浅い。瓦当幅27.2～27.8cm。

三重弧文B1・B2とも、凸面はユビオサエののちタテ縄叩き。顎の段部にヨコナデ調整をおこなう以外はほとんど調整をしない。凹面には糸切り痕と布圧痕が明瞭に残る。三重弧文B1には凹面瓦当近くに縄叩きを行ったものや、凹面の瓦当と狭端近くを細い板で叩く例がある。瓦の曲率を調整した仕事だろう。側面と狭端面、および凹面の両側縁はヘラケズリ。このヘラケズリは凹面からみて時計回り方向に回る。

三重弧文軒平瓦C型式 范型施文の三重弧文。出土個体数は10点。

瓦範の木目

三重弧文Cは、瓦当文様の凹線のなかに、木製瓦範の細かな木目が観察できる。弧線と凹線は同じくらい太いが、凹線の底面が丸いのに対し弧線の上面は平坦。弧線の上面には范型を押捺する前におこなったヘラケズリ調整の痕跡が残るので、范型が密着していないのだろう。

平瓦部凸面はユビオサエののち、タテ縄叩きを行い、斜格子状にキザミを入れて顎を貼り付ける。顎面は再度、タテ縄叩きを行い、その後、顎段部と狭端部をタテにヘラケズリする。凹面は不調整で、布圧痕と糸切り痕が明瞭に残る。瓦の曲率を整えるために、無文の細い叩き板を使って凹面を叩いた例がある。側面はタテにヘラケズリ調整する。瓦当幅32cm。砂粒の少ない緻密な胎土で、焼成は軟質、明茶褐色。

三重弧文軒平瓦の時期と使われ方 三重弧文Aは、技法と文様からみて四重弧文C I・Eとほぼ同時期の7世紀第4半期後半だろう。一枚作りの三重弧文B・Cは奈良時代に降る。よって、山田寺では創建時には三重弧文軒平瓦を採用していない。この点は、当初から少数ながら三重弧文軒平瓦がある川原寺との大きな違いといえよう。

川原寺との相違点

一枚作りが主体

出土した三重弧文軒平瓦の95%は三重弧文B・Cで、約80%が回廊内から出土した。三重弧文Aは回廊内と南門周辺で微量が出土したにとどまる。技法と施文方法からすると、三重弧文Bが四重弧文Gに、三重弧文Cは四重弧文Hに対応する。出土個体数は、各々四重弧文の約25%と約20%あり、凸面に朱線をとどめた例もあるので、同じように使われたとみてよい。三重弧文と四重弧文が明確に使い分けられていなかったのは、奈良時代に重弧文軒平瓦を使用した寺は山田寺以外になく、重弧文であること以外は余り意識されなかったからだろう。

iv 重弧文以外の軒平瓦 (Ph.127, Fig.102・103)

重弧文軒平瓦以外に、重郭文軒平瓦、連珠文軒平瓦、偏行唐草文軒平瓦、均整唐草文軒平瓦、文字文軒平瓦が出土した。

a 重郭文軒平瓦 (Fig.102-1)

平城宮と范

凸線を二重に巡らす重郭文の平城宮6572型式⁹⁾が1種ある。6572型式はA～H種に細分する(以下、型式・種を適宜略す)。本例はD種。直線顎で、凸面の瓦当近くと側面をタテにヘラケズリする。凹面は瓦当近くをヨコにヘラケズリし、以下は調整しない。平城京右京一条二坊・同七条二坊と同範。第4次調査区の東面大垣東から1点(0.5個体)¹⁰⁾出土した。

b 連珠文軒平瓦 (Fig.102-2)

珠文を横一列に並べた連珠文で、内区と外区を細い界線で区画する。顎は刳り顎。平瓦部凸面に凹型台の圧痕がある。第3次調査区の講堂北から1点(0.5個体)出土した。

c 偏行唐草文軒平瓦 (Fig.102
- 3)

左から右に流れる偏行唐草文が1種ある。上下外区と脇区すべてに珠文を並べる6642型式。6642型式はA~Dの4種に細分。D種が出土した。D種は単位文が3葉構成で本薬師寺式の6641Hに似るが、唐草の茎が連続せず各单位が分離する。単位数7だが、左右の脇区で唐草文が断ち切られている。粘土紐桶巻き作り。顎は長く浅い貼り付け削り出し段顎¹¹⁾。長さ7.7cm。顎面と凹面をヨコにナデ調整し、側面はタテにヘラケズリする。第2次調査区の金堂北東から左1/3ほどの破片が1点(0.5個体)出土した。

6642型式はA~C種が藤原宮所用。D種は藤原宮では出土せず、平城京右京四条四坊五・十二坪¹²⁾で出土。片岡王寺に採集品がある。平城京右京四条四坊十二坪では、唐草文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦6345Aと組む。平松廃寺(奈良市平松町)¹⁴⁾の所用瓦か。

d 均整唐草文軒平瓦 (Fig.102
- 4~9)

均整唐草文は6型式15個体ある(近世以降を除く)。均整唐草文軒平瓦I~VIとする。

均整唐草文軒平瓦 I (Fig.102-
4)

上外区に杏仁形珠文を、下外区と脇区には粗い線鋸歯文をおいた3回反転の均整唐草文軒平瓦。6661型式はA~Dの4種に細分。そのうちのB種が出土した。大ぶり

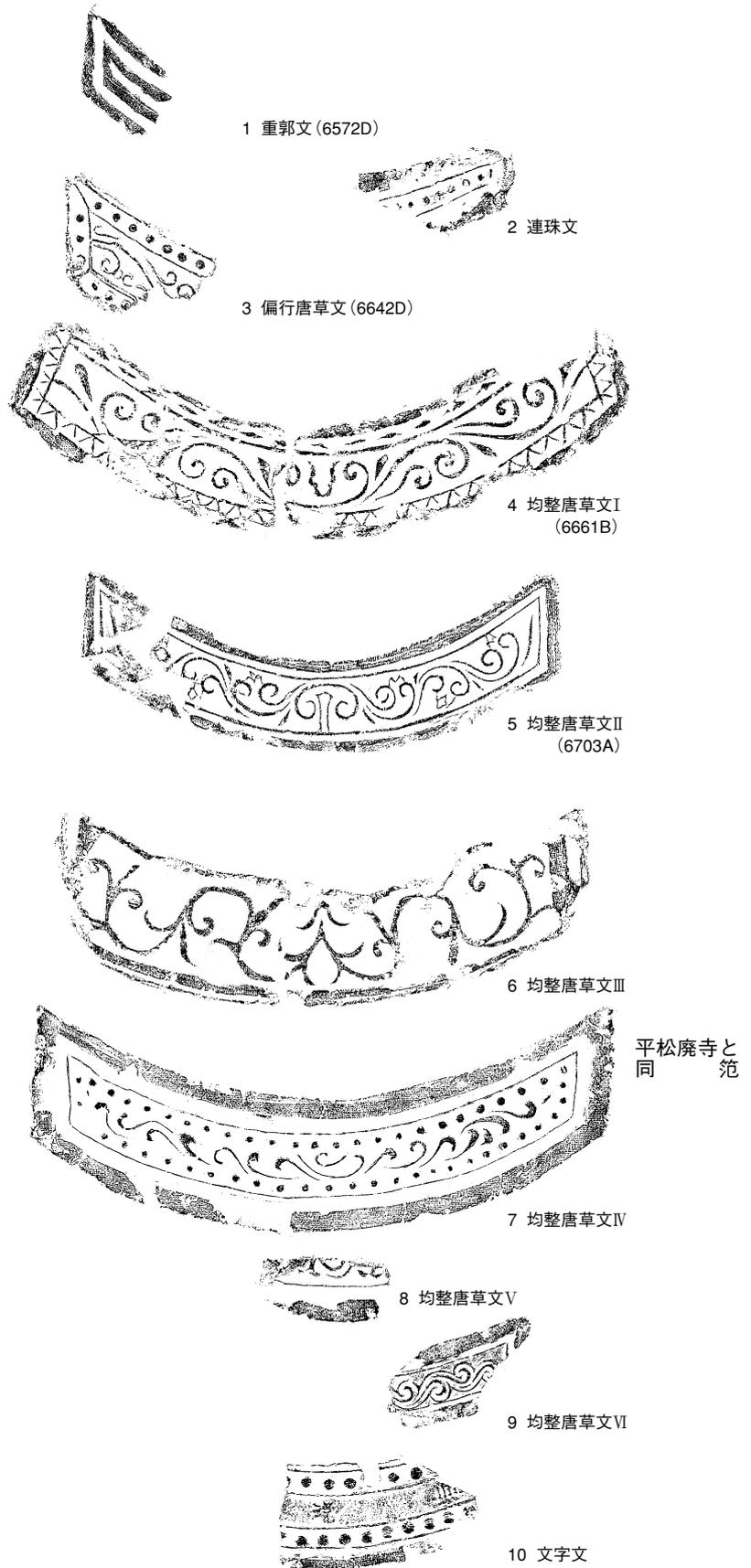


Fig.102 重弧文以外の軒平瓦 1:4

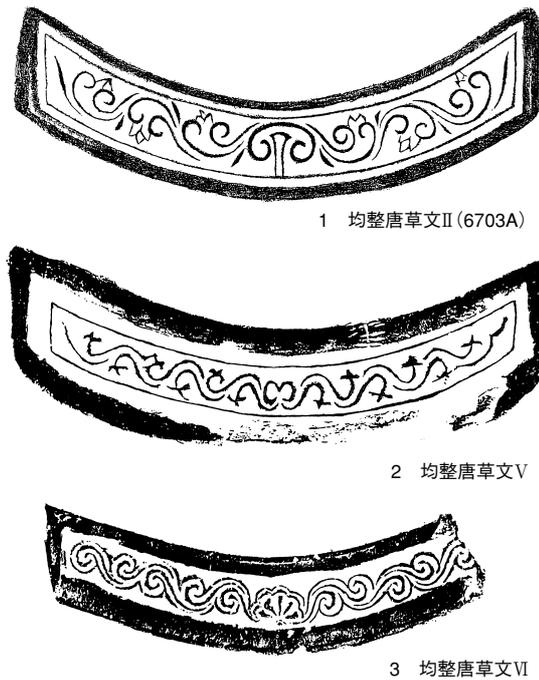


Fig. 103 関連軒平瓦 1:4

の花頭形垂れ飾りを入れた中心飾りをもち、唐草文は第1・第2単位が3葉構成、第3単位のみ2葉構成。

粘土紐桶巻き作りで、顎は貼り付け削り出し段顎。凹凸面はナデ調整、顎面はヘラケズリののちナデ調整。瓦当幅は35.9cm。顎の長さ8.1cm。出土個体数は6点。第1・2次調査区の金堂・塔周辺から5点（下層瓦敷とSK203から各1点）、第5次調査区の東面大垣付近から1点出土した。

6661型式は、A～C種が文武朝大官大寺（明日香村小山）所用、Da・Db種は平城元興寺所用瓦。B種は大官大寺の塔および中門・回廊所用¹⁵⁾。大官大寺のほか、大安寺、飛鳥寺、奥山廃寺、雷丘北方遺跡から同范品が出土。軒丸瓦6231Bと組む。

均整唐草文軒平瓦II (Fig. 102-5) 素文縁の3回反転均整唐草文軒平瓦。花頭形中心飾りが下の界線から立ち上がり、奈良時代通有の中心飾りとは上下逆転する。唐草文各単位は3葉構成をとり、主葉と第1支葉の間に蕾の表現がある。平城薬師寺の6703A (Fig. 103-1、薬師寺253型式)と同范。一枚作りで、広い顎面をもった曲線顎II。凸面には粗いタテ方向の縄叩き目が残る。凹面は瓦当近くをヨコにヘラケズリする。

平城薬師寺
ほかと同范

6703Aは、軒丸瓦6143A（薬師寺25型式）と組む。第1次調査区の塔周辺から1点、第4・5次調査区の東面回廊周辺から8点の、計9点（個体数3点）出土。後者には回廊倒壊瓦中で検出されたものがある。同范品が、平城薬師寺、平城京、唐招提寺、秋篠・山陵遺跡、川原寺のほか、愛媛県西条市真導廃寺²⁵⁾にもある。

類例のない
唐草文

均整唐草文軒平瓦III (Fig. 102-6) 下向きの蕾状の中心飾りをもった3回反転均整唐草文。唐草文は蔓状に連続し、大きく反転する。結節から蕾の付いた単位文が派生する。外縁は幅の狭い素文縁。一枚作りで、顎は段顎。凹面をヘラケズリ、凸面はヨコナデで調整する。第2次調査区の金堂周囲の焼土層から1点（個体数1点）出土した。類例を知らない。

均整唐草文軒平瓦IV (Fig. 102-7) 中心飾りを欠いた左行7単位、右行7単位の均整唐草文軒平瓦。唐草文は主葉だけで支葉はなく、連続しない。右行の第1単位はほかより大きく、上方に逆向きの唐草文をおく。これがちょうど瓦当面の中央に位置するので、この単位を中心飾りの変形とみることもできる。その場合、右行の唐草文は6単位となる。外区は珠文の内縁と素文の外縁からなり、その間に界線がめぐる。

久米寺に
類似品

顎は削り顎。凸面と側面をタテ方向、凹面はヨコ方向にそれぞれナデ調整する。凹面にはかすかに細かな布圧痕が、凸面には朱線が付く。久米寺（橿原市久米町）に類品がある²⁶⁾。

第2次調査区の金堂基壇上の攪乱土と、第3次調査区の井戸SE480から各1点（個体数1.5点）出土した。

均整唐草文軒平瓦V (Fig.102-8) 小破片しかないため全体の文様は判然としない。内区と外縁を界線で区画し、内区には先端が二つに分かれた屈曲の強い唐草文をおく。おそらく、C字形が対向した眼鏡形の中心飾りに、一見泥鰯のような唐草文を6回か7回反転させた均整唐草文だろう。顎は貼り付けの削り顎。同文例が、川原寺²⁷⁾、橘寺²⁸⁾、東大寺²⁹⁾のほか、京都市栢杜遺跡³⁰⁾ (Fig.103-2)にある。第3次調査区の講堂・北面回廊間から1点(個体数0点)出土。

均整唐草文軒平瓦VI (Fig.102-9) 素文縁の均整唐草文軒平瓦。複線表現の唐草文を左右に展開した文様か。高い素文の外縁と内区とを界線で区画する。同様の唐草文の表現が、薬師寺³¹⁾ (Fig.103-3)、秋篠寺³²⁾にあり、菊花文を中心飾りとする。顎は削り顎で、凹凸面ともナデ調整。平瓦部凸面に凹型台の圧痕がある。第2次調査区の金堂北から1点(個体数0.5点)出土。

中心飾りは
菊花文か

e 文字文軒平瓦 (Fig.102-10)

「興福寺」銘を飾る文字文軒平瓦が1種ある。内区に右から「興」「福」の2文字が残る。外区内縁にはやや密に珠文を並べ、その内と外に界線をおく。興福寺出土例³³⁾と同範。第3次調査区の梵鐘鑄造土坑SK440周辺から1点(個体数0点)出土。

興福寺と
同 範

f 重弧文以外の軒平瓦の時期

以上の軒平瓦は、次の4時期に区分できよう。

- ① 藤原宮期から奈良時代初め [偏行唐草文 (6642D) と均整唐草文 I (6661B)]
- ② 奈良時代中頃 [重郭文 (6572D) と均整唐草文 II (6703A)]
- ③ 平安時代後期 [均整唐草文 III]
- ④ 鎌倉時代前期から室町時代中期 [均整唐草文 IV～VI と連珠文、文字文]

①は、6642型式の年代観と、大官大寺塔・中門・回廊の造営年代が、文武朝から和銅4年(711)の間にあることから導かれる年代。

②では、6572Dが平城宮・京軒瓦編年第II-2期(730年頃～745年頃)におかれる³⁴⁾。6703Aは、平城薬師寺出土例によって、これを天禄4年(973)の薬師寺罹災後の復興瓦とみて平安時代中期とする考えがあった。だが、軒丸瓦6143Aと組み合わせることが、山田寺と平城薬師寺のほか、川原寺でも確認できること、顎の形態が「曲線顎II」に分類できることなどからすると、平安時代ではなく奈良時代の750年代を前後する瓦とみてまちがいない。平城京では、平城京左京七条一坊十五・十六坪の発掘調査(平城宮第252・253次調査)において、東一坊大路東側溝の暗灰砂層から6703Aが出土した。共伴した土器は奈良時代でおさまる³⁵⁾。

6703Aは
奈良時代

③の均整唐草文IIIは、類例がなく年代を確定できないが、これが金堂焼失にともなう焼土層から出土したことから、12世紀末以前における。また、この軒平瓦は1cmを越える深さの段顎をもつが、同様の顎は平安時代後期の軒平瓦にある³⁶⁾。さらに、薬師寺ではこの種の段顎が11世紀中頃から後半に限定できることが層位的に確認されている³⁷⁾。この時期、寺院ごとに軒平瓦の製作技法にはバラエティがあって確定はできないが、均整唐草文IIIは顎の形態から11世紀中頃から後半頃を前後する年代と考える。

金堂焼失直
前の軒平瓦

④のうち均整唐草文Vは、同文の軒平瓦を出土した栢杜遺跡九体阿弥陀堂の年代(建久6年(1195)以前に建立)から、12世紀末から13世紀初頭の瓦とする考えがあった。これに対して、山崎信二氏は当該資料を中世II期後半(1230～1260年)に編年している³⁸⁾。13世紀でも中頃前後と考えるほうがよいだろう。「興福寺銘」文字文軒平瓦(興福寺104型式)は、かつて坪井清足

鎌倉時代軒
平瓦の年代

氏が13世紀中頃の年代を提起した。最近、藪中五百樹氏は、興福寺の鎌倉時代における造営と関連させた研究成果を発表し、「興福寺」銘軒平瓦（藪中分類IX平A1～3）を、興福寺瓦編年第IX期（建治3年（1277）～嘉暦2年（1327））にあてた。³⁹⁾藪中氏は、これらの軒瓦を建治3年（1277）被災、正安2年（1300）に完成供養された、金堂の瓦にあてている。したがって、山田寺から出土した同範の「興福寺」銘軒平瓦についても、13世紀末から14世紀初めの年代を与えることができるだろう。連珠文軒平瓦もおおよそ13世紀前後とみられる。

均整唐草文IVとVIは、法隆寺などの類例から推して、前者が鎌倉時代前期（12世紀末～13世紀中期）、後者が室町時代中期（15世紀）に比定できよう。⁴⁰⁾

④の瓦は、出土地点が講堂周辺に限られ、また均整唐草文IVに朱線の痕跡があることからみて、金堂や塔などの焼失後、講堂の跡地に建てられた建物に使用されたと推定する。その建立時期はおおむね13世紀で、15世紀に入って修理等が加えられたと考える。

v 四重弧文隅軒平瓦 (Ph.126-1、Fig.104)

四重弧文軒平瓦には、焼成後に打ち欠いた隅軒平瓦があることは述べた。これ以外に、隅軒平瓦として製作された四重弧文軒平瓦がある。これらを「四重弧文隅軒平瓦」として報告する。

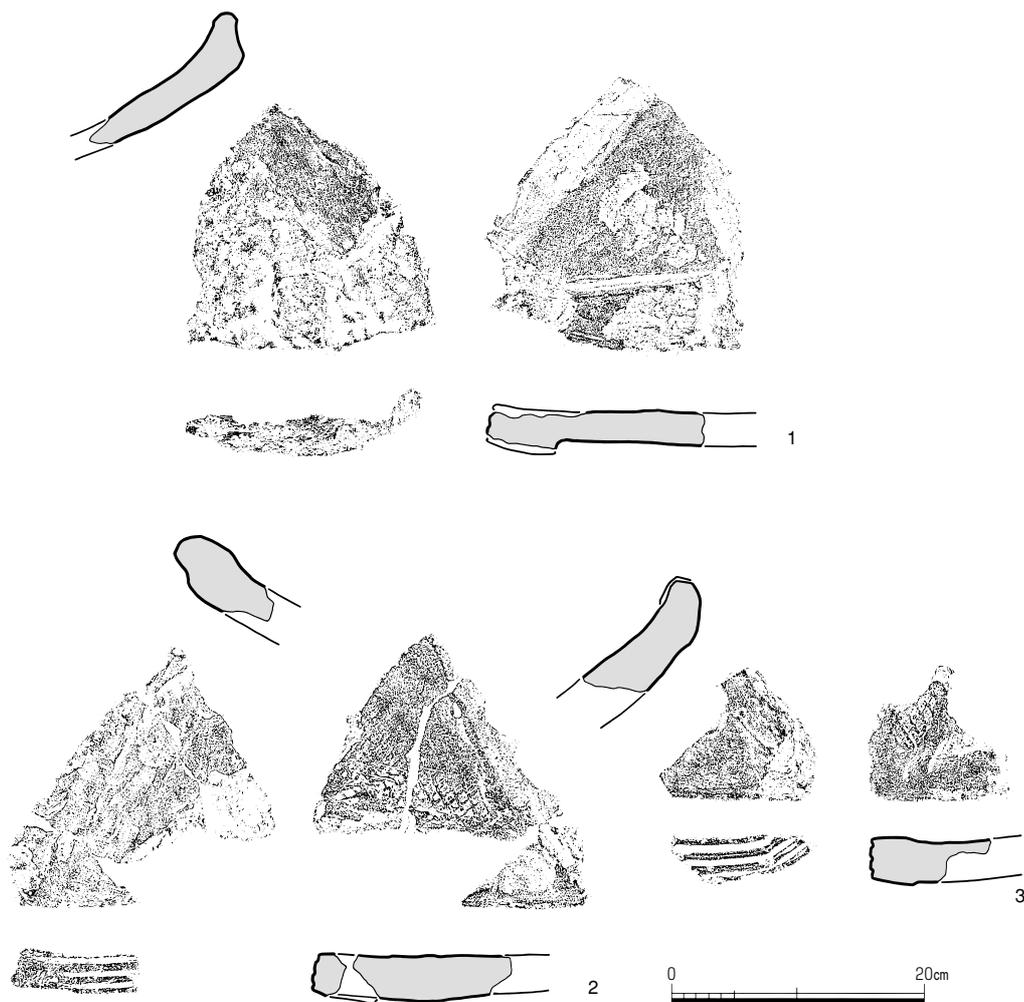


Fig.104 四重弧文隅軒平瓦 1:6

全形をうかがえる資料はないが、瓦当面向かって左側を斜めに作る個体1点 (Fig.104-2) と、右側を斜めに作る個体2点 (Ph.126-1、Fig.104-1・3) の計3点ある。いずれも、第7次調査区出土。斜めの側辺と瓦当面向とはほぼ45°の角度をなす。斜めに作られた側辺は、凹面側と側面にヘラでキザミ目をつけて粘土を貼り足し、低くて幅の広い突帯をもうける。

瓦当文様は、第2・第3弧線が太く、2本をくらべると第2弧線の方がやや太い。第1・第4弧線は極端に細い。瓦当左端の残る資料をみると、文様は端まで届かず、右端の残る資料では文様が屈折する。凹面を丁寧にナデ調整するため、桶側板圧痕の有無は確認できないが、一枚作りか

顎は段顎。顎の深さ1cmほどの例と、瓦当端で顎をヘラケズリして段差のほとんどない例とがある。顎の長さは5cmほどだが、瓦当端では短くなる⁴¹⁾。

vi 軒平瓦凸面のいわゆる朱線と朱書、墨線と墨書について (Color ph.6・7)

山田寺から出土した軒平瓦には、平瓦部凸面に赤色あるいは黒色の彩色を残す例が多数ある。特に、東回廊から倒壊したままの状態、あるいは若干整理された状況で出土した軒平瓦は、平瓦部の残存状況が良好なため、他に例がないほどの資料数がある。四重弧文A IおよびA IIについては、平瓦部が残る資料のほとんどすべてに何らかの彩色の痕跡が認められた。これらについては本来、すべてに彩色の痕跡があったと判断してよいだろう。

赤色の彩色は、建物の柱などの部材と同じようにベンガラ (酸化第二鉄など。自然科学的分析の成果は補論7参照) であって、水銀朱ではないから「朱」という用語を使うべきではない。だが、「ベンガラ線」とか「ベンガラ書」といった言葉は用語としてなじまないし、「赤線」ではもっと困る。ここでは、便宜的に「朱線」「朱書」の用語を用いて記述する。また、黒色の彩色については、「墨線」「墨書」を用いる。

材質は
ベンガラ

山田寺の軒平瓦に朱線と朱書があることは、すでに『飛鳥・藤原宮概報13・14』⁴²⁾ でふれ、これを「屋根に葺く前に朱線を引いて軒の出を示し、番付を施して葺く位置を表示した」と解釈した。しかし、朱線や朱書には多様な形態があり、一概にその性格を示せるものではない。まず、事実関係を記述する。

a 朱の分類と型式別にみた朱と墨

山田寺跡から出土した軒平瓦に残る朱線や朱書を比較すると、一つは淡い朱色、もう一つは赤黒い深みのある濃い朱色、という視覚的に二つの色合いに分かれる。ここでは、淡い朱色をした朱を「朱A」、濃い朱色を「朱B」とよびわける。両者は、別項の科学的分析にも明らかのように成分が違う。

淡い朱色と
濃い朱色

次に、朱線・朱書および墨線・墨書が軒平瓦の型式ごとにどのように出現しているかをみよう (Tab.15)。

朱線は、四重弧文軒平瓦では、四重弧文F IIをのぞいたすべての型式にある。ただし、四重弧文C Iの場合、朱を確認できたのは、C I 4とC I 10の2種に限られ、東面回廊北東にある宝蔵周辺から出土したC I 1などでは、朱の痕跡を全く確認できなかった。また、三重弧文軒平瓦には1点だけ朱線を残す例があったが、重弧文以外の軒平瓦では、鎌倉時代と推定した均整唐草文IVに朱線を確認した以外、朱は付いていない。なお、朱線の位置は後述するように瓦当面向

Tab.15 型式別朱線・朱書・墨線・墨書一覧

	朱線	朱書	墨線	墨書	備考
A I	○A・B	○	○	○	
A II	○A・B	○(1)	○(1)	○(1)	墨線・墨書は同一個体で共存
B I	○A・B	○	×	○(1)	中央に朱書あるものは朱線あり。
B II	○A・B	○	×	×	
C I	○	×	×	×	
C II	○Bカ	×	×	×	
D	○A・B	○(1)	×	×	
E	○	×	×	×	
F I	○B	×	×	×	
F II	×	×	×	×	
G I	○B	×	×	×	
G II	○B	×	×	×	
H I	○B	×	×	×	
H II	○	○?記号	×	×	
H III	○	×	×	×	
均整唐草文IV	○				
螭羽瓦	○A・B				
平瓦転用	○B				

ら10cm以上離れているので、瓦当部だけの破片では、元々朱が付いていなかったか判別できない。従って、出土個体数に対する割合は算定していない。

朱線には、「朱A」と「朱B」がある。四重弧文A I・A II・B I・B II・Dの5型式には、両者があり、同一個体に両者が引かれたものもある。一方、それ以外の型式では、「朱B」に限られるようだ。

朱書は、四重弧文A I・A II・B I・B II・D・H IIに確認した。ただし、四重弧文A IIとDは漢数字1点のみ。これらの朱書に使われた朱は、肉眼による判定ではすべて「朱A」。四重弧文H IIも1点だが、これは記号か何か判定できない。こちらは「朱B」。

墨線は、四重弧文A IIに1点があるほかは、四重弧文A Iに確認できただけ。同様に、墨書も、四重弧文A IIとB Iに各1点があった以外は、すべて四重弧文A Iだった。

b 朱線と墨線

四重弧文軒平瓦A Iの朱線と墨線 四重弧文軒平瓦A Iは、東面回廊と南面回廊を中心に多量に出土した。平瓦部を残存する例の多くが凸面に朱線や墨線を残している。朱線・墨線とも、瓦当面に平行する直線ではなく、狭端方向に膨らんだ弓形の線となる (Color Ph. 5 - 1・2)。

太い朱線と
細い朱線

朱線は、幅0.5~1cmほどのやや幅の広い朱線 (以下、「朱線1」) と、幅0.2~0.3cmの細筆で書いたような細い朱線 (以下、「朱線2」) とがある。朱線2が線に切れ目がなく一気に引いた感を与えるのに対し、朱線1のなかには途中で筆を接いだように見えるものや朱の幅が広くなったり狭くなったりするものがある。四重弧文軒平瓦A Iの朱線2はすべて淡い朱色をした「朱A」に限られ、朱線1も濃い朱色の「朱B」はごく稀にしかない。次に述べる四重弧文A IIでは、「朱A」と「朱B」が共存する個体はいくつでもみつかるが、東面回廊や南面回廊から出土した平瓦部を完全に残す個体でも、「朱B」がつくものは皆無に近い。四重弧文A Iで「朱B」の朱線1をもつ個体は、第1・2次調査区の瓦敷と包含層から出土したものにほぼ限られ、これらは

A Iの朱B
は塔所用

塔に葺かれていた個体と推定することができよう。

Tab.16 四重弧文Aの朱線

「朱A」の朱線1を残し、かつ瓦当中央部で計測が可能な189点について、瓦当面から朱線までの距離（朱線の狭端側の縁までの距離）を測ると、14cm以上16cm未満（以下、～で表示）の2cmの間に148点・78%が収まる（Tab.16）。

一方、「朱B」の朱線1は、全27点中、9.5～11.5cmの範囲に22点（81%）が収まり、12cmを越えるものがない。「朱A」の朱線1より、およそ5cmは瓦当に近づいた位置に引かれる。

朱線1は、それ単独で平瓦部凸面に残る例が多いが、朱線2は単独の場合だけでなく、朱線1と共存する場合も多い。朱線2が朱線1と共存する例をみると、朱線1と完全に重複する例もあるが、朱線2の多くは朱線1より2cmほど離れた狭端側に位置する。

墨線を残す例は少なく、20点程度しかない。朱線2に似た細筆で描いたような細い線に限られる。単独で残る例はなく、朱線1あるいは朱線2と共存する。朱線1と共存する例では、朱線より狭端側に若干ずれた位置に墨線がある。それに対し、朱線2と共存する例では、朱線より瓦当側にずれた位置に墨線が引かれている。墨線をもつ例に朱書は確認できない。

瓦当面からの距離	朱A		朱B	
	A I	A II	A I	A II
～9 cm			3	
9～9.5 cm			1	
9.5～10 cm			6	
10～10.5 cm			6	
10.5～11 cm			6	3
11～11.5 cm			4	1
11.5～12 cm			1	
12～12.5 cm				2
12.5～13 cm	1			
13～13.5 cm	2			2
13.5～14 cm	7	2		1
14～14.5 cm	20			1
14.5～15 cm	40			
15～15.5 cm	60			
15.5～16 cm	28	2		
16～16.5 cm	14			
16.5～17 cm	11			
17～17.5 cm	3			
17.5～18 cm	3	14		
18～18.5 cm		4		
18.5～19 cm		6		
19～19.5 cm		1		
	189	29	27	10

四重弧文軒平瓦A IIの朱線と墨線 四重弧文A IIには、朱線1と朱線2および墨線がある。朱線1には「朱A・B」があるが、朱線2は「朱A」に限られる。この点は四重弧文A Iと同じ。四重弧文A Iとの違いは朱線1の位置、つまり瓦当面から朱線までの距離にある。四重弧文A IIで「朱A」の朱線1の位置を計測可能な29点をみると、瓦当面からの距離とその点数は、13.5～14cm = 2点、15.5～16cm = 2点、17.5～18cm = 14点、18～18.5cm = 4点、18.5cm以上 = 7点、となる。17.5～19cmに24点・83%が収まる。この距離は、四重弧文A Iにくらべて、およそ3cm長い。

「朱A」の朱線1は創建時に建物外面を丹塗りしたときに付着し、朱線1の位置は茅負からの軒平瓦の出を示すと考えてよい。とすれば、四重弧文A Iと四重弧文A IIとでは、瓦の出におよそ1寸の違いがあったとみなせるから、四重弧文A IIを創建軒平瓦とする金堂では、回廊などよりも瓦の出が長かったことになる。

朱Aは創建

「朱B」の朱線1には、計測可能な資料数が少ない。瓦当面からの距離は、10.5～11.5cmが4点、12～12.5cmが2点、13～14.5cmが4点ある。このうち、もっとも短い10.5～11.5cmという値は、四重弧文A Iの「朱B」朱線1が示す値の範囲に包含される（Tab.16）。これが、塔に関わるものとすれば、これより長い13～14cmの値は金堂に関連する可能性が考えられる。つまり、塔と同じように金堂でも葺き替えの時におよそ1寸、瓦の出を縮めたが、それでも瓦の出は長

朱Bは修理

瓦の出を縮める

朱線2も例数が少ない。「朱A」朱線1の1.5cmほど狭端寄りに引かれた例がある。

墨線は1例のみ。平瓦部の左側辺近くに孔をあけ、その脇の側辺にも加工を施した特殊な軒平瓦(Ph.95-1)に墨線がある。この個体には朱線と墨書もあり、墨線は朱線より狭端側に引かれている。瓦当面から墨線と朱線までの距離は、おのおの18.5cmと17.3cm。墨書は判読不可。

四重弧文軒平瓦B I・B IIの朱線と墨線 四重弧文B I・B IIには、朱線1と朱線2の例があり、朱線1に「朱A」と「朱B」がある。四重弧文B Iの場合、朱書のある個体で朱線1のある個体とない個体とがあり、瓦当近く中央に朱書されたものには1点を除いて朱線1があるが、平瓦部の瓦当近く隅に朱書されたものには朱線1がない。後者は、第4次調査区の東面築地SA535の西側からまとまって出土した。また、墨線を引いた例は確認されなかった。

四重弧文B I・B IIの朱線1は出土地区で多少様相に違いがある。「朱A」と「朱B」が共存する例は、金堂と塔の周辺から出土し、「朱B」だけをもつ例も金堂周辺から出土した。これに対して、回廊周辺から出土した個体には、「朱B」の例がない。このような出土傾向は四重弧文A Iとよく似ている。また、瓦当面から「朱A」の朱線1までの距離もおよそ15~16cmあり、これも四重弧文A Iに類似する。朱線2の例は、南門と南面回廊に各1点ある。

回廊出土例
に朱Bなし

四重弧文軒平瓦C I・C IIの朱線 四重弧文C Iは、宝蔵SB660周辺から大量に出土したが、C I 1など宝蔵に使われた軒平瓦には朱線がない。これらの資料を除くと平瓦部の残りがあまりよくないこともあって、四重弧文C Iで朱線を残していた例は、C I 3とC I 4に各1点しかなかった(Color Ph. 5-3)。朱書や墨線、墨書はない。

四重弧文C I 3の例は、「朱B」の朱線1。瓦当面からの距離は11cm。四重弧文C I 4の例は、「朱B」の朱線1。側辺で瓦当面からの距離は10.3cm。このほか、C I 10に朱の付着するものがあり、これも「朱B」だった。

四重弧文C IIでは、C II 1・C II 2・C II 4などに朱線が残る。「朱B」の朱線1に限られ、「朱A」の例がない。塔や金堂の周辺から出土した。朱書、墨線、墨書は確認できなかった。四重弧文C IIの朱線1は、瓦当面からの距離がおよそ10cm。この値は、四重弧文A Iに残る「朱B」の朱線1が示す値と似る。

四重弧文軒平瓦Dの朱線 四重弧文Dには「朱A」および「朱B」の朱線1と、1点だけ朱書がある。墨線と墨書はない。朱線1は、「朱A」を残すものと、「朱A」と「朱B」が共存するものがある。後者の例では瓦当面からの距離に違いがあり、「朱A」が15cm、「朱B」が11cmとなる例(第1次調査塔周辺出土:D 1)と、「朱A」が20cm、「朱B」が15.5cmとなる例(第4次調査東面回廊出土:D 4、Color Ph. 5-6)がある。このほか、四重弧文D 1で瓦当面から8.3cmのところに「朱B」の朱線1を残す例がある(第3次調査北面回廊北側出土)。

四重弧文軒平瓦E~Hの朱線 四重弧文E~Hの各型式は、四重弧文F II以外の型式で「朱B」の朱線1だけを確認したが、朱書や墨線、墨書は1点も確認できなかった。

四重弧文Eは出土点数が少ない上、平瓦部を残す資料もわずかなため、朱線を確認したのは1点のみ(第10次調査南面回廊出土)。瓦当面からの距離は、11.5cm。

四重弧文F Iの朱線1は、瓦当面からの距離が11.6~12.8cmある(Color Ph. 5-1)。四重弧文H IIIのそれも12.5~13.2cmあり、ほぼ同じような位置に引かれている。これに対して、四重弧文GとHの朱線1は、10~11.5cmしかなく、瓦当面からの距離が短い。

三重弧文軒平瓦およびそのほかの朱線 塔周辺から出土した三重弧文Cに「朱B」の朱線1を残す例がある。瓦当面からの距離は12cm。以上のほか、四重弧文隅軒平瓦と螭羽瓦A2・A5に、ともに「朱A」「朱B」が認められる。鎌倉時代の均整唐草文Vにも朱線がある。

また、平瓦で凸面広端近くに朱線を残す例が若干ある。平瓦で朱線をもつ例は型式にまともりはないが、いずれも「朱B」。瓦当面からの距離は、11~12cm。

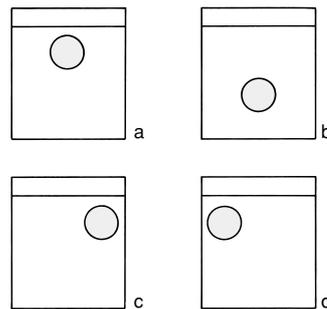


Fig.105 朱書・墨書記載位置模式図

朱線の機能と時期 まず、「朱A」と「朱B」とした朱の違いを型式別にまとめると、淡い朱色の「朱A」は四重弧文A I・A II・B I・B II・Dにあり、それ以外の型式にはない。これらの型式は石川麻呂造営期と天武朝造営再開期を含んだ、山田寺の創建段階に使用された。したがって、「朱A」は創建時の山田寺諸堂塔の彩色に用いられた朱だったと考えてよからう。

創建の朱A

一方、濃い朱色の「朱B」は、それ以降の時期に使われた軒平瓦と、一部創建時の軒平瓦に付いている。これは、後世に建物の塗り直しがおこなわれ、そのときに用いられた朱が「朱B」だったことを示す。「朱B」を残す軒平瓦は金堂と塔周辺に多くみつがっている。奈良時代にこれらの建物に、瓦の葺き替えと建物の化粧直しがおこなわれたのは間違いなく。回廊の軒平瓦には「朱B」がないので、回廊軸部の塗り直しはおこなわれなかった可能性がある。

奈良の朱B

c 朱書と墨書 (Color Ph. 6、Fig. 105)

朱書は、いずれも平瓦部凸面に記され、四重弧文軒平瓦A I・A II・B I・B II・D・H IIに確認した。四重弧文A II・D・H IIの各型式は各々1点のみ。一方、墨書は四重弧文軒平瓦A I・A II・B Iにあったが、四重弧文A IIとB Iには各1点を確認したにすぎない。このように、四重弧文B IとB IIに若干の朱書の記載例がある以外、朱書と墨書の大半は四重弧文A Iに記載されていた。

朱書と墨書の記載位置 朱書・墨書の記載位置には一定の法則性がある。ここでは、記載位置(以下「位置」) a~dに分類して記述する (Fig.105)。

記載位置は4種類

位置 a : 軒平瓦凸面のほぼ中軸線上で顎部と朱線の間

位置 b : 軒平瓦凸面のほぼ中軸線上で朱線より狭端よりの位置

位置 c : 軒平瓦凸面の瓦当近く右隅 (瓦当を上に向けた状態で)

位置 d : 軒平瓦凸面の瓦当近く左隅 (瓦当を上に向けた状態で)

さらに、文字の天地によって細分できるが、明瞭な規則性を見出せなかったので省略する。

四重弧文軒平瓦A Iの朱書と墨書 四重弧文軒平瓦A Iには多数の朱書がある。これらは、漢数字を記載したものとそれ以外の文字にわかれる。

漢数字は、記載位置に「位置a・b・c」の3種があるが、「位置b」は1点(「八」)、「位置c」は2点(「四」(Color Ph. 6-1)と「廿」)しかなく、35点を数える「位置a」が圧倒的に多い。「位置a」に記された漢数字には、「二」「三」「五」「七」「八」「九」「十」「十一」「十七」「廿」「卅」(「卅」と書かれたものを含む)がある (Color Ph. 6-1・4)。ほかに、釈文を確定できないもので、「一」「六」「一七」「万」(または「五」か)「卅一」(あるいは「玉」か)がある (Color Ph. 6-11)。

漢数字多し

漢数字以外の文字を記載した朱書の例(26点)で記載位置をみると、判読不能の文字に「位置c」の例が1点ある以外、すべて「位置a」だった。記載された文字には、「東」「南」「北」「白」「奈」「牛」「木」「口」「力」「マ(部)」「夫」「冻」などがあり(Color Ph. 6-5~12)、釈文を確定できない文字に「柱」「女」「郡」「宇」「乙」「宮」(あるいは「官」か)「井」(あるいは「甘」か)などがある(Color Ph. 6-14)。

A Iの墨書
は漢数字

次に、四重弧文A Iの墨書をみると、こちらは漢数字に限られる。また、その記載位置は、「位置b」が7点、「位置a」が2点(判読不能1点)あり、朱書とはその傾向が違う。「位置b」の墨書には、「三」(2点)「十八」「廿三」「廿四」(2点)「卅一」があり(Color Ph. 6-15・16)、「位置a」の墨書には、「七二」がある。

四重弧文軒平瓦B I・B IIの朱書と墨書 四重弧文軒平瓦B IとB IIには、朱書15点(うちB IIが4点)と墨書1点(第1次調査出土:B I 1)がある。朱書は、釈読不能の1点(第2次調査出土:B II 4)を除くと漢数字に限られる。これらの記載位置は、「位置a」6点と「位置c」8点に分かれる。

第4次調査区東面築地SA535の西側からは、朱書をもつ四重弧文B Iが8点出土した。これらは、「位置c」に記載された7点と「位置a」に記載された1点。いずれも朱線がない。

「位置c」に記載された文字は、「十五」「十九」「廿四」「廿五」「廿六」「卅一」があり、いずれも左隅を天にしている。瓦当を左に向けて記載されたようだ(Color Ph. 6-2・13)。「十五」の記載をもつ瓦は、「位置a」にも文字があり、あるいは「卅」と読めるか。「位置a」の1例は「十八」と書かれ、瓦当方向に天を向ける(Color Ph. 6-3)。

このほかに四重弧文B Iには、「位置c」に「廿四」と朱書した例(第7次調査出土)や、「位置a」に「十」(第10次調査出土)「卅」(第1次調査区出土)と朱書した例がある。後者は2点とも朱線をとまなう。1点のみ確認した墨書は、「位置c」に「二」と書く。

四重弧文B IIの朱書は4点あり、いずれも「位置a」に記載される。「卍」「々」「〇」および判読不能の1点。文字なのか記号なのか判断に迷う。

その他の型式の朱書と墨書 四重弧文A IIに朱書と墨書が各1点(第2次調査区出土)、四重弧文DとH IIに朱書が各1点ある。

四重弧文A IIの朱書は、「位置a」に「二」と書かれた例(A II 6)。墨書は文字を判読できない。四重弧文Dの朱書は、「位置a」に「卅」と書かれた例(第7次調査区:D 5)。朱線なし。四重弧文H IIの朱書は、「位置c」に「C」とあるもの(第8次調査区)だが、文字なのか記号なのかかわからない。朱線はない。

朱書のある軒平瓦の分布と機能 朱書のある軒平瓦を型式別にみると、四重弧文A Iが圧倒的に多く、これに四重弧文B Iが続く。ほかの型式はごく少ない。出土地点をみても、朱書のある四重弧文A Iは東面回廊と南面東回廊に集中している。『飛鳥・藤原宮概報13・14』でも推定したように回廊の軒平瓦に特徴的な点は、形式的にも分布の状況からも首肯できよう。

番付か

四重弧文A Iの朱書には漢数字が最も多く、これが番付を表現した蓋然性は高い。漢数字は墨書されたものもあるが、朱書とは記載位置に違いが認められた。また、朱書の漢数字には、「二十(廿)」を越える大きさの数が「三十(卅)」しかないのに対し、墨書では「廿三」などがあって、多少記載方式にも違いがあるのかもしれない。漢数字以外の文字は、番付とは考えが

たいが、機能や意味は判明でない。

四重弧文B Iの朱書は漢数字しかないから、これも番付に関わると推測できるが、四重弧文A Iとは記載位置が違う。また、出土地点が限定されるので、記載時期が違うのだろう。

以上、朱書のある軒平瓦は東面回廊と南面東回廊とに集中し、金堂の創建軒平瓦や塔所用軒平瓦にはほとんど見いだせない。『飛鳥・藤原宮概報』でも指摘したように、回廊だけは、瓦葺きの時に茅負とのカーブを合わせるため、番付を付けて茅負を調整したのだろう。

Tab.17 山田寺出土軒平瓦の型式別出土点数

型式	成形方法	叩き	施文手法	布袋	個体数		
四重弧文	A I	粘土板 桶巻き作り	平行 格子	型挽 施文後分割	布 a・b c	741.5 (45.1%)	913.5 (54.9%)
	A II				布 d	168.5 (10.2%)	
	B I	粘土板 桶巻き作り	格子	型挽 施文後分割	布 e・f g・h	181 (11.0%)	332 (20.0%)
	B II				布 j	147 (8.9%)	
	C I	粘土板 桶巻き作り	格子	型挽 施文後分割	布 k・m n・p・o	69.5 (4.2%)	135.5 (8.1%)
	C II				布 r・s t・u	65.5 (4.0%)	
	D	粘土板 桶巻き作り	格子	型挽 分割後施文	布 j	91 (5.5%)	
	E	粘土板 桶巻き作り	縄	型挽 施文後分割	布 w	7 (0.4%)	
F	一枚作り	格子	型挽		46.5 (2.8%)		
G	一枚作り	縄	型挽		37 (2.2%)		
H	一枚作り	縄	瓦範押捺		50.5 (3.0%)		
三重弧文					22.5 (1.4%)		
唐草文ほか					15 (0.9%)		
不明					14.5 (0.8%)		
合計					1665 (100%)		

- 1) 個体数は、瓦当左右の端部を数え、その総数の1/2を個体数とした。
- 2) 九州歴史資料館『九州古瓦図録』柏書房、1981年、宮城県教委『多賀城跡 政庁跡本文編』1982年など。
- 3) 『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊、1960年など。
- 4) 製作技法に関する観察視点や用語は、佐原真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』第58巻第2号、日本考古学会、1972年、pp.30-72による。
- 5) 東面回廊の茅負から算出される瓦座の割付は、平均で310mm。『山田寺出土建築部材集成』奈文研史料第40冊、1995年、pp.30-31。
- 6) 回転台の回転方向は成形時と同じ向きだから、施文の方向と凸面のヨコナデの方向は逆転する。ただし、施文時に顎部とその近くを再度調整することもあり、その場合そこだけは施文と同じ方向のヨコナデとなる。
- 7) 四重弧文A IIは、屋根葺きの時に瓦当部の両端あるいは片端を削っているものが多く、本来の瓦当幅がわからないものがある。それらについては、現状での幅に「以上」を付した。
- 8) 類例は富山県高岡市御亭角廢寺近辺の美野下遺跡出土重弧文軒平瓦にある。高岡市教委『美野下遺跡調査概報』1986年、図面17-701、図版14-701。
- 9) 平城宮・京の軒瓦型式番号は、奈文研・奈良市教委『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』1996年参照。
- 10) 採集にもある。『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』奈文研飛鳥資料館図録第24冊、1991年、p.27 No.112。
- 11) 顎の長さよりも広く粘土を貼り付け、段部を削り出して作る手法。『飛鳥・藤原宮報告II』を参照。
- 12) 篠原豊一「平城京右京四条四坊十二・十三坪の調査 第129次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告』

- 書 昭和62年度』1988年。
- 13) 奈良国立博物館『飛鳥白鳳の古瓦』1970年、No.467。
 - 14) 田辺征夫「遺跡遺物からみた原始古代の伏見町」『伏見町史』1981年。竹田政敬「平松廢寺－前身寺院は飛鳥に－」『古代寺院の移建と再建を考える』帝塚山考古学研究所 1995年、pp.60～70
 - 15) 『飛鳥・藤原宮概報6』1976年、『飛鳥・藤原宮概報9』1979年。
 - 16) 山本忠尚「大安寺の屋瓦」『大安寺史・史料』1984年。宮崎正裕「瓦塼類」『史跡大安寺旧境内Ⅰ－杉山古墳地区の発掘調査整備事業報告－』奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊、1997年、pp.149～200。
 - 17) 『飛鳥寺発掘調査報告』奈文研学報第5冊 1958年、PL.68－27。
 - 18) 『飛鳥・藤原宮概報18』1988年、『飛鳥・藤原宮概報20』1990年。
 - 19) 『飛鳥・藤原宮概報22』1992年。
 - 20) 軒平瓦の顎の型式分類は『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈文研学報第50冊、1991年、pp.298～303を参照。
 - 21) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」(『研究論集Ⅵ』奈文研学報第38冊 1980年、pp.129～177)。『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊 1987年、pp.122～123、PL.94。
これらの中では、この均整唐草文Ⅲ(薬師寺253型式)を平安時代中期(山崎信二氏の大和の平安時代瓦編年では中期Ⅱ(973～1040))においたが、後述するようにこの年代観は改訂されるべきである。
 - 22) 平城京東一坊大路西側溝(『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈文研学報第56冊、1997年)など。
 - 23) 秋篠・山陵遺跡調査会・奈良大学文学部考古学研究室『秋篠・山陵遺跡－奈良大学附属高等学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第17集、1998年、PL.62－2・149－59。
 - 24) 川原寺782型式。『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊 1960年、PL.46－44。
 - 25) 長井数秋ほか『伊豫国真導廢寺跡発掘調査報告書』愛媛県教委、1977年。
 - 26) 石田茂作『古瓦図鑑』1937年、図版第178。高取町子島寺所蔵品にも久米寺出土と推測される資料がある。
 - 27) 川原寺951型式。『川原寺発掘調査報告』奈文研学報第9冊、1960年、PL.48－66。
 - 28) 『飛鳥・藤原宮概報25』1995年、p.108 Fig.80。
 - 29) 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」(前掲)。
 - 30) 杉山信三ほか『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所、1975年。
 - 31) 薬師寺353型式。『薬師寺発掘調査報告』(前掲) p.142Fig.68－353。
 - 32) 薬師寺と同範。森郁夫「瓦」『大和古寺大観』第五巻 秋篠寺・法華寺・海竜王寺・不退寺、岩波書店、1978年、p.18、挿図11－24。
 - 33) 『興福寺食堂発掘調査報告』奈文研学報第7冊 1959年、PL.31軒平瓦104。
 - 34) 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈文研学報第50冊、1991年。
 - 35) 『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈文研学報第56冊、1997年。
 - 36) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』第13・14号 1978年。
 - 37) 毛利光俊彦・山崎信二「薬師寺宝積院の調査 第223－3次」『1991年度平城概報』1992年 pp.115～135
 - 38) 山崎信二『中世瓦の研究』奈文研学報第59冊、2000年、pp.133～138。
 - 39) 藪中五百樹「鎌倉時代に於ける興福寺の造営と瓦」『仏教芸術』第257号、2001年、pp.111～135。
『同』第258号、2001年、pp.99～117。
 - 40) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷 浩『法隆寺の至宝・瓦』昭和資財帳第15巻、小学館、1992年。
 - 41) 隅軒平瓦で顎が斜めの側辺に向かって短くなる例として、平城京長屋王邸跡出土6644型式がある。『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告書』奈文研学報第54冊 1995年、pp.183～184、Pl.60・61、Ph.135・136。
 - 42) 「凸面の顎近くに、十八、十九、廿四、廿六、卅一など番付を朱書したものが、瓦敷SX535の西側を中心に出土」(『飛鳥・藤原宮概報13』p.40)。
「平瓦部凸面の顎に近い箇所に朱線を1～2条横方向に描き、同時に朱線と顎部との間の平瓦部凸面に文字や漢数字を朱書きするものが多い」と指摘し、朱書の例として、「北・東・一・二・五・七・九・十八・廿・卅等の例」をあげた(『飛鳥・藤原宮概報14』p.68)

C 丸 瓦 (Ph.128~133, Fig.106~108)

丸瓦は、第1~11次調査で出土したもののうち、全長が判明する行基丸瓦228点と筒部長が判明する玉縁丸瓦1297点の総計1525点を分析対象とした。これらは3群9種19類に分類でき、製作年代は7世紀中頃から15世紀前半(室町時代中期)までである。

山田寺出土の丸瓦には、行基丸瓦(A群)と玉縁丸瓦(B・C群)とがある。行基丸瓦の第1次成形技法はすべて粘土板巻きつけ技法を用いており、玉縁丸瓦も粘土板巻きつけ技法によるB群が圧倒的に多いが、粘土紐巻きつけ技法によるC群が若干ある。粘土板巻きつけ技法によるものは凹面に糸切り痕か粘土板合わせ目を残し(Ph.133-4)、粘土紐巻きつけ技法によるものは凹面に粘土紐の重なりを残している(Ph.133-22)。つぎに第2次成形技法、すなわち凸面の叩き目によって、I種-平行叩き目、II種-斜格子叩き目、III種-縦位縄叩き目、IV種-叩き目不明に分け、凸面調整手法によって、a類-叩き目を完全に、あるいはほとんどナデ消す、b類-叩き目を部分的にナデ消す、c類-特定部位(狭端寄りや玉縁)の叩き目をナデ消す、d類-叩き目をナデ消さない、に分類した。このような基本的な製作技法の組み合わせによって分類してから、側面、広端、玉縁側面などの端縁の調整手法、布の粗密、吊り紐(中・近世に行われた模骨の布袋に紐を縫い込んで粘土板を密着させるための工夫)の有無、法量、胎土、焼成によってさらに細分した。

丸瓦の分類

i 行基丸瓦(A群)

調査対象とした行基丸瓦は228点で、すべて粘土板巻きつけ技法によって製作しており、第2次成形技法によって4種6類に分類した(Ph.128)。

粘土板巻きつけ技法

丸瓦A I a (Ph.128-1) 凸面に平行叩き目を施し、それをほとんどナデ消す。全長41.5~42.5cm、広端幅17.5~18cm。凹面側の側縁と広端縁を5~30mm削る。凹面の布目は密である。硬質で、青灰色を呈する。2点を確認した。

丸瓦A II A IIは凸面に斜格子叩き目を施したものであり、叩き目のナデ消しかたによって、b、dに細分した。

斜格子叩き

丸瓦A II a 凸面に斜格子叩き目を施し、それをほとんどナデ消す。全長39~42.5cm、広端幅15.5~20cm。厚さが約20mmのA II a 1が標準である(Ph.128-2)が、25mmとやや厚手のA II a 2も数個体ある。前者は凹面側の側縁と広端縁を、後者は側縁を5~30mm削る。凹面の布目は密である。硬質で、青灰色を呈する。戯画、ヘラ記号「×」などが刻まれている。

丸瓦A II b 凸面に斜格子叩き目を施し、それを部分的にナデ消す。全長37~42.5cm、広端幅16~20cm。斜格子叩き目の大きさとナデ方によって、A II b 1~3の3つに細分した。

A II b 1は量的にもっとも多く、凸面のナデ調整が不良のために凹凸が目立ち、かつ厚さが1.8~2.1mmある(Ph.128-3)。

A II b 2も、凸面のナデ調整が不良のために凹凸が目立つが、厚さが薄手(1.7mm)である。これは量的に少ないので、将来A II b 1に再編される可能性もある。

A II b 3は前二者と比べて、斜格子叩き目が小型で、軽いナデ調整が広範囲にわたるが、斜格

子叩き目のナデ消しが甘い。これらはAⅠaとAⅡaに比べて、硬質の度合いが劣り、黄灰色を呈するものが目立つ。凹面側の側縁と広端縁を5～30mm軽く削るのが一般的である。とくに、AⅡb3のケズリはあまい。凹面の布目は、基本的に密である。

丸瓦AⅡd 凸面に斜格子叩き目を施すが、それをナデ消さない。全長36～41cm、広端幅18.5～20cmと幅広い例が目立つ。斜格子叩き目の一辺が7～10mmの大きいAⅡd1 (Ph.128-4)と3～4mmの小さいAⅡd2がある。前者の凸面には、やや凹凸がみられる。焼き質と色調がAⅡbに近い。凹面側の側縁と広端縁を5～30mm軽く削るのが一般的である。

縦位の
縄叩き目

丸瓦AⅢ 凸面に縦位縄叩き目を施し、AⅠaとAⅡaに比べて、軟質で、黒～黒灰色を呈する。AⅢはA群の約3割を占める。全長36～42cm、広端幅14.5～22cm。なかでも凸面の狭端寄りの幅6～10mmの範囲にタテケズリとヨコナデ調整をほどこして、縄叩き目を消すAⅢcが圧倒的に多い(Ph.128-5)。その結果、狭端部はやや薄くなり、すぼまり気味になる。この縄叩き目が消去された部分は、瓦の重なりのおおむね一致する。それはこの重なり部分が風雨にさらされていなかったため、風化していないからである。

葺き足痕跡

このほかに、凸面の縄叩き目をほとんどナデ消すAⅢaと凸面縄叩き目の狭端寄りをナデ消さないAⅢdがある。しかし、AⅢaとAⅢdともに2～3点しかなく、AⅢcの例外品や単なるナデ忘れの可能性もある。これらは凹面側の側縁と広端縁をそれぞれ20～30mm削るのが一般的である。凹面の布目は、基本的に密である。ヘラ記号「↑」(矢印1)と「×」が刻まれている。

丸瓦AⅣa 凸面の叩き目を完全にナデ消す。全長38.5～43.5cm、広端幅15.5～21cm。厚さが16～19mmであるAⅣa1 (Ph.128-6)が主体だが、厚さが20～22mmのやや厚手のAⅣa2が若干ある。これらのほかの特徴は、AⅠaとAⅡaに一致するので、AⅣaの凸面には、ナデ消し前に平行叩き目か斜格子叩き目を施していたとみられる。おそらく、AⅠaとAⅡaの叩き目も、本来は完全に消去する予定だったと考えられる。ヘラ記号「↑」(矢印1)、「↑」(矢印2)、「×」などが刻まれている。

叩き目を
ナデ消す

ii 玉縁丸瓦 (B・C群)

調査対象とした玉縁丸瓦は1297個体で、粘土板巻きつけ技法によるものをB群 (Ph.129～133)、粘土紐巻きつけ技法によるものをC群 (Ph.132-6)とする。玉縁を作り出すためのくびれを彫り込んだ瓶形の模骨に、粘土板か粘土紐を巻きつけた後、筒部と玉縁の境の凸面に粘土を付加して肩部の段差を作る。B群は1295点で、4種12類に分類した。

丸瓦BⅠa (Ph.129-1) 凸面に平行叩き目を施し、それをほとんどナデ消したものである (Ph.133-1)。玉縁は端部幅と基部幅がほぼ同じですぼまらない。段部凹面の屈曲は強い。硬質で、暗青灰色を呈する。ただし、1点(広端部破損)を確認できたにすぎない。

斜格子叩き

丸瓦BⅡ BⅡは凸面に斜格子叩き目を施したものである。

丸瓦BⅡa 筒部、玉縁とも凸面に斜格子叩き目を施した後、それを板状の工具を横方向に使用してほとんどナデ消し、平滑にする (Ph.133-2)。筒部長29～38cm、筒部幅15～20cm。とくに筒部長では33～36cmに、広端幅では16～18cmに集中がみられ (Fig.106)、標準品といえる (BⅡa2, Ph.129-3)。さらに、それを越える大型品もある (BⅡa1, Ph.129-2)。

凹面にも斜格子叩き目を残すものがあるので、丸瓦素材の粘土板をタタラから糸切りする前

に、タタラを叩きしめた可能性がある (Ph.133-3)。

玉縁は、端面幅と基部幅がほぼ同じですぼまらないものが主体であり、端部幅がやや狭いものも若干ある。なかには玉縁長が短く、玉縁端部が剥落して粘土紐接合面を残すものがある (Ph.133-5)。これは粘土板の幅が模骨よりも若干短かったので、玉縁が短くなり、それを粘土紐を付加して補った結果である。また、肩部凹面の屈曲が強い点も特徴で、いかにも古式を帯びている (Ph.133-4)。

肩部凹面の
屈曲が強い

いずれも凹面側の側縁を幅5~20mm、凹面側の広端縁を幅20~50mm削るのが一般的である。さらに、凸面側の側縁を幅2mm面取りすることが多い。凹面の布目は密である。硬質なものも多く、色調は青灰色や暗灰色を呈する。これらの特徴は行基丸瓦AⅡa・Ⅳaと後述する玉縁丸瓦BⅣaでも認められる。また、山田寺式軒丸瓦A・B・D種の丸瓦部のなかには、BⅡa瓦と同一の特徴をもつものがある。さらに、弓形のヘラ書が刻まれている。

軒丸瓦A種
など同一

丸瓦BⅡb 筒部、玉縁とも凸面に斜格子叩き目を施すが、それを部分的に粗くナデ消すだけで平坦にしないので、凸面に凹凸を残す (Ph.133-6)。玉縁は、端部幅と基部幅がほぼ同じものに加えて、端部幅がやや狭くてすぼまるものも出現する。段部凹面側の屈曲は強いものが多い。

玉縁凸面に凸線をつけないBⅡb1 (Ph.129-4~6) が一般的だが、玉縁端面寄りに凸線をつけるBⅡb2 (Ph.129-7、133-8) が4点ある。

BⅡb1の法量は、筒部長が30~36cm、広端幅が15~18cmの範囲内に大部分が収まる (Fig.107)。凹面側の側縁と広端縁を削る。さらにBⅡb1の広端縁のケズリには、①約20~30mmと幅広いもの (Ph.129-4)、②10mm前後と幅狭いもの (Ph.129-5)、③幅広いケズリを施した後にさらに幅狭いケズリを加えるもの (Ph.129-6、133-7) の3種がある。ケズリのかわりにナデで調整する場合もある。

BⅡbの凹面の布目は密である。硬さの度合いはBⅡaと後述するBⅣaに比べてやや劣る。色調は青灰色、黄灰色を呈するものが多い。BⅡb1のなかには表面が黒褐色で芯が赤褐色のものもある。これら特徴は山田寺式軒丸瓦C・F種の丸瓦部と面戸瓦AⅠa3のなかにもみられる。さらに、ヘラ書「大」が玉縁に刻まれることがある。

軒丸瓦C・
F種と同一

丸瓦BⅢb BⅢbは筒部凸面に縦位縄叩き目を施した後、それを部分的にナデ消す共通点がある。以下、玉縁凹面の屈曲の度合いと玉縁のすぼまり具合、凹面の布目の粗密、吊り紐の有無、ケズリや面取りの調整手法によって細分した。

丸瓦BⅢb1 (Ph.130-1) 凸面に縦位縄叩き目を施し、筒部の縄叩き目は部分的にナデ消し、玉縁は広範囲をナデ消す (Ph.133-9)。玉縁の端面幅と基部幅がほぼ同じものも多く (Ph.133-9)、肩部凹面の屈曲が強い (Ph.133-10) という特徴がある。筒部長は28~33cm、筒部幅は15~20cm (Fig.107)。肩部凸面の成形粘土が剥落した例があり、そこに布目痕がみられる (Ph.133-11)。粘土の接着を補助するものであろう。

肩部凹面の
屈曲が強い

BⅢb1は、凹面側の側縁を幅20mm、凹面側の広端縁を幅40~70mm削る。BⅢb1の凹面の布目は密である。硬さの度合い、色調が灰色ないし灰白色を呈する点は、BⅡbと共通する。ヘラ書「大」とヘラ記号「↑」(矢印1)などが刻まれている。

丸瓦BⅢb2 凸面に縦位縄叩き目を施した後、筒部は部分的にナデ消す (Ph.133-12)。と

肩部凹面の
屈曲は弱い

くに玉縁の縄叩き目を完全にナデ消し、玉縁はすべて端部幅が基部幅より狭くすぼまるものとなり、肩部凹面の屈曲が緩やかになる点で、BⅢb1と区別される。玉縁の特徴と筒部の長さや幅の違いから以下の4つに細分した。まず、玉縁凸面が素文であるBⅢb2①(Ph.130-2)と玉縁凸面中央に平行沈線で凸線状の効果を施すBⅢb2②(Ph.130-3、133-13)がある。ともに筒部長は33cm前後、筒部幅は16cm前後で、玉縁側面の凹面寄りを削る。

つぎに、筒部長33.3cm、筒部幅20.3cmの大型品をBⅢb2③とする(Ph.130-4)。これは1点のみで、玉縁凸面に凸線様の平行線はない。BⅢb2④は筒部長17.8cm、筒部幅15cmの小型品である(Ph.130-5)。これも1点のみで、しかも玉縁を欠くので、凸線様の平行線の存否は不明である。

BⅢb2①~④とも凹面の布目は密であり、凹面側の側縁のケズリ(あるいはナデ)幅は0~15mmと狭いものが目立つ。広端縁のケズリ幅はBⅢb2①と同②で30mm前後だが、同③は10mm、同④は7mm。やや軟質で、色調は灰白色や黒灰色を呈する。BⅢb2①は広端に刻印「田」を押し出すものがある。

丸瓦BⅢb3 (Ph.130-6) 筒部凸面に縦位縄叩き目を、玉縁凸面に横位縄叩き目(Ph.133-14)を施し、それらを部分的にナデ消す。玉縁がすぼまり、凹面側の屈曲が緩やかである点はBⅢb2と共通するが、筒部の縦位縄叩き目の節が細かく(Ph.133-15)、凹面玉縁長が11~12cmと長い点で、BⅢb2と区別できる。BⅢb3の筒部長は33cm前後、筒部幅は16cm前後である。凹面側の側縁を幅8~15mm削り、凹面側の広端縁は幅10mm削る場合と軽くナデを施す場合とがある。凹面の布目は密である。やや軟質となり、色調は黒灰色を呈する。

玉縁凸面に
凸線1条

丸瓦BⅢb4 (Ph.131-1) 凸面の縦位縄叩き目を、筒部は部分的に、玉縁は完全にナデ消す以外は、BⅢb3に類似した特徴をもつ。玉縁凸面に凸線を1条めぐらす点に特徴がある。凹面側の側縁を幅15mm削る。玉縁寄りの破片資料のため多くを語れない。

丸瓦BⅢb5 凸面の縦位縄叩き目は、玉縁、筒部とも部分的にナデ消す場合(Ph.133-18)と、玉縁の叩き目を完全にナデ消す場合とがある。ナデ調整が施された範囲の表面が非常に平滑である点は、BⅢb2~4と異なる。玉縁はすぼまり、肩部凹面の屈曲は緩やかである。筒部長は34.7~38cm。

内叩き

これらは筒部幅が17~18cmで厚さ18~20mmの一群であるBⅢb5①(Ph.131-2)と、筒部幅が14~15cmで厚さ22~25mmの一群であるBⅢb5②(Ph.131-3)に細分できる。BⅢb5①は、筒部幅をやや広げて湾曲をやや弱くするために、凹面に内叩きを頻繁に行うが(Ph.133-17)、BⅢb5②の場合、内叩き痕はないか少ない。BⅢb5①、同②とも凹面側の玉縁・筒部側縁を幅10~20mm、広端縁を幅20~30mm、玉縁端縁を幅5~38mm削る。さらに、玉縁側面を端面に向かって斜めに軽く削る。凹面側の玉縁端面寄りには軽くナデる。布目は一般的に密である。模骨にかぶせる布袋の玉縁位置を絞るために、横位の刺し縫いをするものが多い(Ph.133-19)。BⅢb5①はやや軟質で、色調が表面、芯ともに橙褐色を呈するものが多いが、BⅢb5②はやや硬質で、表面のみ暗灰色を呈する例が若干ある。

刺し縫い

丸瓦BⅢb6 筒部凸面に横位縄叩き目を施すもので、2点あるにすぎない。BⅢb6①は筒部広端寄りの破片で、凹面の側縁を幅40mm、広端縁を幅40mm削る(Ph.131-4)。BⅢb6②は玉縁寄りの破片だが、玉縁凸面と玉縁寄りの筒部凸面にまず横位縄叩き目を、さらに同①と異なり

筒部凸面全体に縦位縄叩き目を施す (Ph.131-5)。破片資料であり多くを語れないが、これらはBⅢb5の変異型となる可能性もある。

丸瓦BⅢb7 筒部凹面に吊り紐痕を残すのが特徴である。凸面の縦位縄叩き目は、玉縁では完全にナデ消し、筒部では大半をナデ消す。ナデが丁寧で、表面が非常に平滑である。玉縁はすぼまり、凹面側の屈曲は緩やかである。吊り紐痕の種類によって①～④の4つに細分する。

BⅢb7①の吊り紐は細くてあまり垂れない法隆寺Aタイプである (Ph.131-6)。凹面側の側縁を幅10～20mm、広端縁を50～60mm、玉縁端縁を15mm削る。凹面の布目は密である。右三巴文Aの丸瓦部であり、またそれと組む丸瓦である。

吊り紐痕は
法隆寺A

BⅢb7②の吊り紐は、太くて大きく垂れる法隆寺B1タイプである (Ph.131-7)。紐を布袋に通した痕跡がないので、おそらく糸で留めたのであろう。凹面側の側縁を幅15mm、広端縁を10mm削る。玉縁凸面の側縁を肩口を含めて幅3mm面取りする。筒部幅が14cmなので、小型品と推定される。凹面の布目は密である。

BⅢb7③の吊り紐は法隆寺Bタイプをたすき掛けに重ねたものの下に、さらにBタイプの吊り紐を結び目をつけながら1段加える法隆寺B2タイプである (Ph.132-1)。凹面側の側縁を幅30mm、広端縁を60mm、玉縁端縁を20mm削る。玉縁凸面の側縁のみを幅3mm面取りする。凹面の布目は密である。

吊り紐痕は
法隆寺B

BⅢb7④の吊り紐は布袋にループ状に通すので 字形をなす法隆寺Cタイプ (Ph.132-2)

吊り紐痕は
法隆寺C

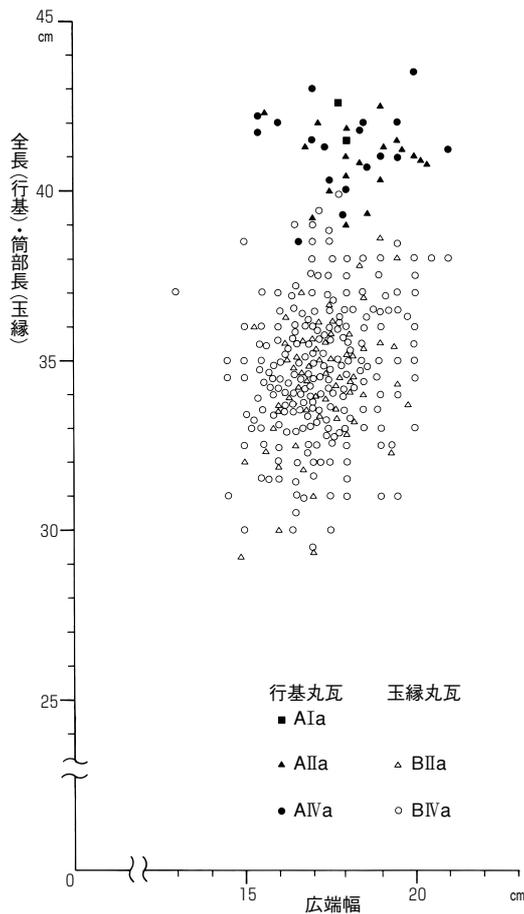


Fig.106 丸瓦の法量1 (飛鳥)

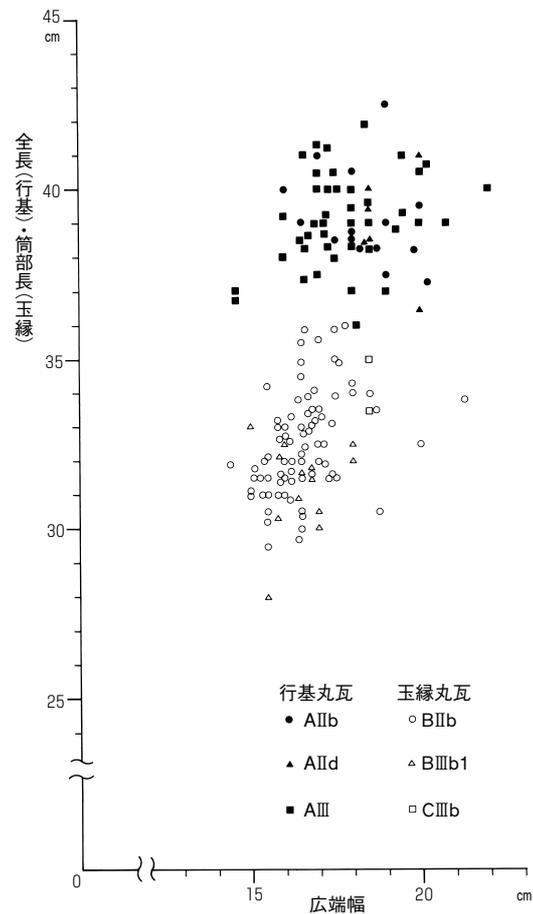


Fig.107 丸瓦の法量2 (白鳳)

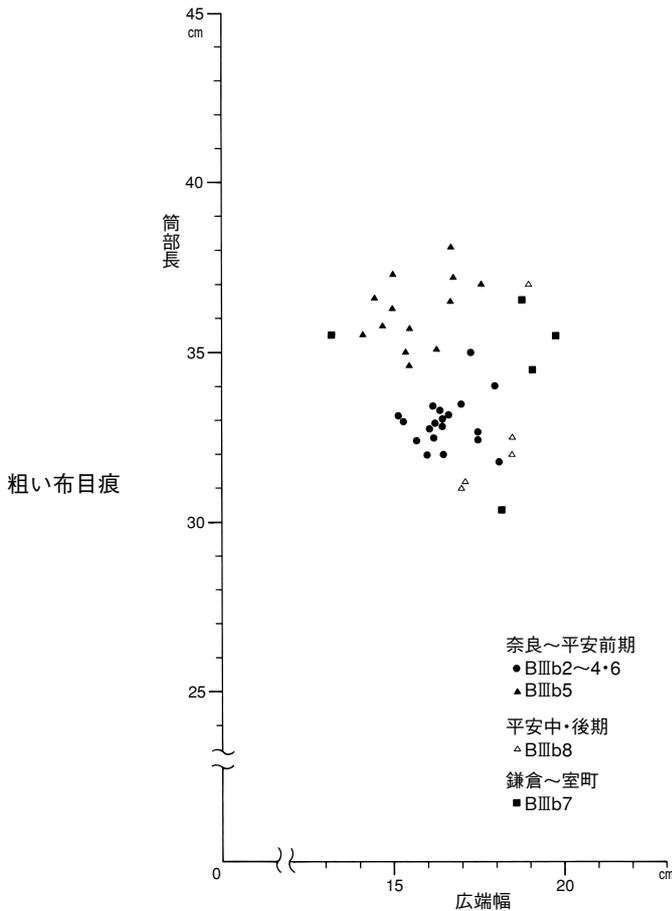


Fig.108 丸瓦の法量3 (奈良～室町)

である。硬質であり、色調は暗灰色を呈する。筒部長が25.5cm、筒部幅13.2cmの小型品である。凹面側の側縁と広端縁をそれぞれ幅25mm、60～70mmに大きく削る。さらに、凸面側の広端縁に幅1mmの、凹・凸両面の玉縁端縁にそれぞれ1mm、4～5mmの、凸面側の玉縁側縁にも幅3mmの面取りを施す。凸面側の玉縁側縁の面取りが肩に達するか否かは、破損箇所のため不明である。筒部凹面に小判状の内叩き痕がある。凹面の布目は密である。

丸瓦BⅢb8 (Ph.132-3) 布目が3cm四方あたり縦糸14本、横糸14本と粗い点で、他のBⅢbと区別できる。筒部凸面に縦位縄叩き目を、玉縁凸面に横位縄叩き目を施し、それらを部分的にナデ消すが、粗雑である。玉縁はすぼまり、凹面側の屈曲も緩やかである。筒部長は約31.5cmである。凹面側の側縁は削らないが、広端縁を幅約20mm削る。凸面側の玉縁側縁を幅20mm削る点も特徴である。(Ph.133-16)。やや軟質で、色調は灰褐色を呈する。

丸瓦BⅣa 筒部、玉縁とも凸面の叩き目を、板状の工具を横方向に使用して完全にナデ消す。筒部長は29.5～40cm、筒部幅は14.5～21cmの範囲内にある (Fig.106)。筒部長が36cm前後で筒部幅が19cm前後の大振りのBⅣa1 (Ph.132-4) と筒部長が33cm前後で筒部幅が16.5cm前後のBⅣa2 (Ph.132-5) がある。BⅣaの出土量が玉縁丸瓦のなかで最も多い。側面に分割断面を若干残す場合がある (Ph.133-20)、凸面側の側縁に幅3～5mmのケズリを施す場合がある (Ph.133-21) など、BⅠa・Ⅱaと同様の特徴をもつ。「大」、「○」、「×」、「↑」(矢印1)、などのヘラ書と戯画が描かれている。

玉縁丸瓦で出土量最多

粘土紐巻きつけ技法

C群は粘土紐巻きつけ技法によって製作しており、2点ある。すべて筒部凸面に縦位縄叩き目を施している。

丸瓦CⅢb (Ph.132-6) 粘土紐の幅は3～4cm (Ph.133-22)。玉縁はすぼまり、玉縁凹面の屈曲は緩やかである。筒部に縄叩き目を施した後に、木目を持つ板状工具の木口でヨコナデ調整をほどこすので、ハケ目調整に類似した効果を残す (Ph.133-23)。筒部長は約34cm、筒部幅約17cm。焼成は普通で、色調は灰色を呈する。

1) 吊り紐の分類は、以下の文献を参照。小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦－法隆寺出土古瓦の調査速報(2)」『伊弉留我』法隆寺昭和資財帳調査速報10、小学館、1989年、pp.14～31。毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩『法隆寺の至宝 瓦』昭和資財帳第15巻、小学館、1992年。

D 平 瓦 (Ph.134~169, Fig.109~115)

山田寺からは、東面回廊および南面回廊に葺かれていた平瓦がほぼ完存して大量に出土した。東面大垣では平安時代に入る平瓦も出土しているが、ここでは、回廊周辺から出土した資料を中心に報告する。

i 平瓦の分類

a 基本的な分類の基準

成形技法

A：粘土板桶巻き作り

B：粘土紐桶巻き作り

C：粘土板一枚作り

Aのなかには、視覚的には台形の瓦と長方形の瓦がある。これを狭端幅と広端幅の差でみると、5 cm以上あるか3 cm前後未満しかないと、一応の基準とした。この平瓦の形の違いは、おおむね、桶の形がバケツを伏せたような截頭円錐形なのか、あるいは円筒形か、の違いに対応する。

平瓦に台形
と長方形

叩き板

山田寺の平瓦に確認できる叩き目の種類は、次のⅠ～Ⅷの8種類がある。

Ⅰ：叩き締め円弧を描く平行叩き目

叩き板に刻まれた平行刻線には、木目に直交する刻線と木目に斜交する刻線がある。

Ⅱ：叩き締め円弧を描く細かい格子・斜格子叩き目（刻線の間隔1 cm未満）

格子叩き目は、いわゆる正格子叩き目。2方向の刻線とも木目に斜交する格子目刻線と、木目に平行する刻線と直交する刻線を組み合わせた格子目刻線がある。斜格子叩き目には、2方向とも木目に斜交する刻線の叩き目、木目に平行する刻線と斜交する刻線を組み合わせる叩き目、木目に直交する刻線と斜交する刻線を組み合わせる叩き目、の3種類がある。

Ⅲ：叩き締め円弧を描く粗い斜格子叩き目（刻線の間隔1 cm以上）

Ⅳ：叩き締め円弧を描かない格子叩き目

Ⅴ：叩き締め円弧を描く縄叩き目

縄叩き目には、縄巻き叩き板を使い、叩き板の軸に対して縄を直交して巻き付けたものと、平行して巻き付けるものがある。

Ⅵ：側辺に平行するタテ縄叩き目

Ⅶ：斜めの縄叩き目

凸面調整

凸面調整には、次の4種がある。

a：叩き目をほぼ完全にすり消す

b：全体にすり消すが不完全か、部分的なすり消しにとどまる

c：カキ目

o：調整しない

調整しない場合でも、凹型台の上で凹面調整をした段階に、叩き目が潰れるものはある。

凹面調整

凹面調整には、次の3種がある。

①：調整しない

②：ナデ調整

③：ヘラケズリ調整

側面調整（おもに桶巻き作り平瓦の場合）

1：調整しない（a手法）

2：分割破面だけを削る（b手法）

3：分割截面と平行する面で截面と破面を削る（c1手法）

4：分割截面と破面を凸面側に深く削る（c2手法）

法量

b 山田寺出土平瓦の型式分類

平瓦の型式は、上記の要素の組み合わせで設定することを目指したが、すべての組合せが存在するわけではないし、また単純に各分類基準によるとしても、記載がきわめて煩雑になる。さらに、同じ桶で製作された製品（正確には同じ布袋で作られた平瓦）にも複数の叩き板が使用される場合が多々あるうえに、凸面調整が比較的丁寧なため叩き板を完全に特定できなかった資料が大半を占める。

そこで、軒平瓦との対応関係を考慮しつつ、成形技法と叩き板および叩き方の違いを基本的な基準として形式分類した。その結果、粘土板桶巻き作りの平瓦を1～7類に、粘土紐桶巻き作り平瓦を8類に、粘土板一枚作り平瓦を9～12類に型式設定した。

粘土板桶巻き作り平瓦

平瓦1類 狭端幅が狭い台形の瓦。側面調整はb手法かc1手法。刻線叩き板を使うが、ごく一部に平行刻線がある以外は木目に斜交する格子目刻線ないし斜格子目刻線。ただし、凸面は叩き目をほぼ完全にナデ消す。四重弧文軒平瓦AⅡ・BⅡ・Dに対応する。

平瓦2類 狭端幅が狭い台形の平瓦。1類と製作技法はほとんど同じだが平行叩き目はない。瓦の全長が40cmをこえて長い。四重弧文軒平瓦BⅠに対応する。

平瓦3類 狭端幅が広端幅に近く、長方形に近い平瓦。叩き目は、平行叩き目と細かな格子・斜格子叩き目の両者があり、共存する例も多い。側面調整はb手法またはc1手法。四重弧文軒平瓦AⅠに対応する。

平瓦4類 長方形に近い平瓦。製作技法は3類にほぼ同じ。側面調整はc2手法。四重弧軒平瓦AⅠに対応する。

平瓦5類 1～4類に較べて凸面調整が雑なため、斜格子叩き目をほぼ凸面全体に残す平瓦。平行叩き目はない。側面調整c2手法。四重弧文軒平瓦CⅡに対応する。

平瓦6類 5類と同様、凸面全面に斜格子叩き目を残す。5類より叩き目が粗い。側面調整はc2手法。四重弧文軒平瓦CⅠ・CⅡに対応する。

平瓦7類 細かい縄叩き目をもつ。凸面はヨコナデ調整するが、薄く叩き目が残る。四重弧文

軒平瓦Eに対応する。

粘土紐桶巻き作り平瓦

平瓦8類 縄叩き目をもった粘土紐桶巻き作り平瓦。

一枚作り平瓦

叩き板の違いと叩き方により、4類に分類した。

平瓦9類 格子目刻線叩き板による粘土板一枚作り平瓦。四重弧文軒平瓦Fに対応する。

平瓦10類 叩き目が側辺とほぼ平行するタテ縄叩きの一枚作り平瓦。四重弧文軒平瓦Gに対応。

平瓦11類 縄叩き目が平瓦の側辺と平行しないナナメ縄叩きの平瓦。

平瓦12類 ごく粗い斜格子目刻線叩き板の平瓦。叩き板は瓦の全長と同じ長さで、叩き目が重複しないように叩く。離れ砂を使用する。

ii 平瓦各説

a 平瓦1類 (Ph.134~140, Fig.109・110)

平瓦1類は、瓦の平面形が台形をした粘土板桶巻き作り平瓦。広端幅と狭端幅が3cm以上違う。全長はおよそ40cm前後以下、側面調整は破面だけをヘラケズりするb手法か截面に平行して側面全体をヘラケズりするc1手法。側面の面取りの手法と凹面調整の有無により、1類A~Cにわけける。

平瓦1類A (Ph.134~136) 平瓦1類Aは、側面の凹凸両面側に面取りのヘラケズりをおこなう。凹面は布綴じ痕や粘土板合わせ目以外は調整しない。法量により、1類AⅠ・AⅡ・AⅢに細分した。

AⅠ~Ⅲは
大・中・小

平瓦1類AⅠ (Ph.134-1) は、全長41~42cm、広端幅34~35cm、狭端幅30cmあり、重さは6kg前後、平瓦1類Aでは最も大型。凹面は全く調整しない。凹面には、布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕、布袋の綴じ合わせ痕などが残る。綴じ合わせは「布綴じ1a」を確認した (Fig.109¹⁾)。

「布綴じ1a」は、左にぐし縫いの綴じ目痕、右にぐし縫いの縫い目痕がある「綴じ合わせGSg」²⁾。両者は狭端に向かって少しずつ開いていく。

布綴じの別

狭端を除く凹面四周と側・広端面は、凹面からみて時計回りにヘラケズりする。側面は分割截面が残るb手法。狭端面と凹面の狭端縁は逆時計回りにヘラケズりする。凸面は全体にヨコナデ調整するが、叩き目や叩き板の輪郭がかすかに残る。叩き板は木目に斜交する斜格子刻線を刻む。凸面の四周は逆時計回り方向にヘラケズリ調整。胎土は砂粒や小石を多く含んだややきめの粗い土。焼成は良好で、淡青灰色。

平瓦1類AⅡ (Ph.134-2、135、136) は、AⅠよりやや小ぶり。全長36.5~40.5cm、広端幅31~32.5cm、狭端幅27~28.5cm、重さ5~5.5kg。凹面は布袋の綴じ合わせ痕と粘土板の合わせ目をナデやヘラケズリで調整するものがあるが、それ以外は四周を除いて基本的に調整しない。凹面四周のヘラケズリは、広端側のそれがやや幅広い。凸面はかなり丁寧にヨコナデ調整し、叩き目をほとんど残さない。木目に斜交する斜格子刻線を刻む叩き板と木目に斜交する平行刻線の叩き板とがある。平行刻線の叩き板を使うのは、後述する「布綴じ1d」に限られるようだ。凸面四周の面取りは幅が狭く、ヘラケズリの方向がわからないものも多いが、時計回り方

1類AⅡも
平行叩き稀

向にヘラが動く例が目立つ。

側面調整は、基本的に破面だけをヘラケズリ調整する手法。ケズリの方向は両側面とも広端から狭端に向かう方向の例が多いが、逆に狭端から広端に向かうものや左右で方向の違うものもある。

布綴じ6種 平瓦1類AⅡの布綴じ痕は「布綴じ1b・1c・1d・1e・1f・1g」の6種類がある (Fig. 109)。

「布綴じ1b」(Ph.135-4)は、右に綴じ目痕、左に縫い目痕がある。両者の間隔はやや広く、狭端に向かって開く。綴じ目、縫い目ともにまつり縫いし、綴じ目は左上がりに対し、縫い目は右上がり (Ph.135-1)。「綴じ合わせMZlm (r)」。綴じ目痕と縫い目痕の間がやや深くくぼむのは、折り山の布の厚みが反映した結果。

「布綴じ1c」(Ph.134-2、135-6・7)は、「布綴じ1b」と同じく右に綴じ目痕、左に縫い目痕があって、両者は狭端方向に開く。綴じ目と縫い目はほぼ完全にナデ調整されるが、ぐし縫いとわかる。「綴じ合わせGZg」。使用された布は、織りが粗い。「布綴じ1c」の布袋には、襷をとって縫いつけた「襷縫い(ダーツ)」の痕跡がある。

襷縫い 襷縫いの長さは、狭端から布袋の丈の2/3ほどある。ケズリ調整されてわかりにくいだが、ぐし縫いか。襷縫いの痕跡をとどめる2例を比較すると、襷縫い痕の位置が全く一致するばかりか、その右側のこれまた同じところに粘土板合わせ目Sが位置する (PL.70-3)。もう1例、襷縫いの痕跡に重複して粘土板合わせ目Zを確認できる例がある。布袋の綴じ合わせ目と襷縫いとの位置関係は不明だが、桶に対して布袋のかぶせ方と粘土板の巻き付け方にきまりがあったことを伺わせる。

「布綴じ1d」(Ph.135-5)は、布綴じ1cと同様、右に綴じ目痕、左に縫い目痕があり、ともにぐし縫いする。両者は、10cm以上離れてほぼ並行する。布綴じ痕の下端(布の耳)から左にのびる布端の痕跡は縫い目の裏側に連続し、狭端近くで二またに分かれるので、ここに折り山をとった布端がある。「綴じ合わせGZg」。

折り山の
ない重ね 「布綴じ1e」(Ph.136-8・9)は、時計回り方向に布を回し、折り山をとらないで布端を別々に縫い付けた布重ね目「C」。左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕があり、両者は狭端方向に開く。綴じ目、縫い目ともにまつり縫いし、縫い目の一部だけが右上がりの「綴じ合わせMClm (lr)」。綴じ目、縫い目とも、針目は広端側の布の耳までは及んでいない。また、布の織りは「布綴じ1d」よりかなり細かい。

ほつれた
綴じ目 「布綴じ1f」(Ph.136-10)は、「布綴じ1b」に似た「綴じ合わせMZlm (r)」。広端側の綴じ目がほつれて布袋が開いてしまっているが、その部分にも縫い目痕があるので、初めから広端側を縫い合わせない形式(大脇分類「布B」)ではなく、ある段階で綴じ目がほつれてしまったのだろう。

「布綴じ1g」(Ph.136-11)も、Zタイプの重ね目で、綴じ目をまつり縫いする。ただし、「布綴じ1b」や「布綴じ1f」とは針目の傾きが違い、綴じ目と縫い目の糸目が「八字形」になる「綴じ合わせMZrm (1)」。

以上、平瓦1類AⅡの布綴じ6種類は、次の3つに大別できる。

①折り山をとって綴じ目をぐし縫いする「布綴じ1c・1d」。

②折り山をとって綴じ目をまつり縫いする「布綴じ1b・1f・1g」。縫い目もすべてまつり縫いする。

③折り山をとらない「布綴じ1e」。

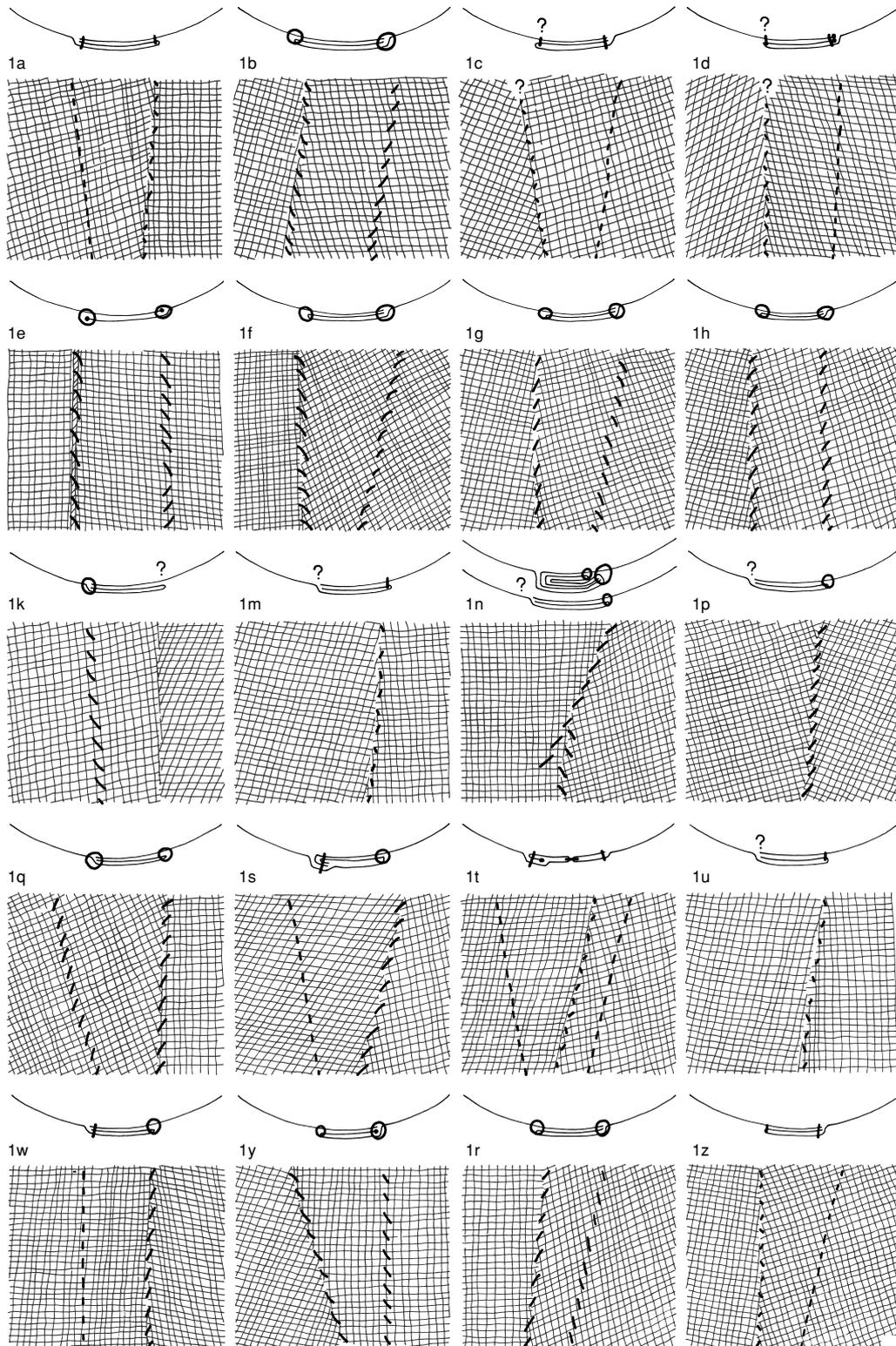


Fig.109 平瓦1類の布綴じ合わせ模式図①

平瓦1類AⅢ (Ph.134-3、136-1・2・12・14)は、1類Aでは最も法量が小さく、全長37.2~39cm、広端幅29.5~30cm、狭端幅23.5~26.5cm、重さ4.3~5.1kg。凹面は、四周と布袋の綴じ合わせ痕や粘土板の合わせ目を除いて基本的に調整しない。凹面四周のヘラケズリは、広端側のそれがやや幅広い。凸面はかなり丁寧にヨコナデ調整する。確認できる限りでは、木目に斜交する斜格子刻線を刻む叩き板に限られる。凸面四周の面取りは幅が狭く、ヘラケズリの方向がわからないものも多いが、時計回り方向にヘラが動く例が目立つ。

斜格子刻線
叩き板のみ

側面調整は、基本的に破面だけをヘラケズリ調整するb手法と截面も削りとするc1手法がある。ケズリの方向は両側面とも同方向、広端から狭端ないし狭端から広端に向かう例が多い。左右で方向の違うものも少数ある。

布綴じ5種 平瓦1類AⅢの布綴じ痕は、「布綴じ1h・1j・1k・1m・1n」の5種類 (Fig.109)。

「布綴じ1h」(Ph.136-12)は、右に布綴じ痕、左に縫い目痕があり、両者の間隔が狭い。綴じ目・縫い目ともまつり縫いする「綴じ合わせMZrm (r)」。

「布綴じ1j」(Ph.134-3)は、狭端近くに残る布綴じの痕跡が判明するにすぎず、詳細は不明。布綴じ痕の左側にあるタテナデが縫い目痕を消すための調整ならば、「綴じ合わせGZx」または「綴じ合わせMZx」。

「布綴じ1k」(Ph.136-1)は、縫い目痕しかわからないが、縫い目痕が他の布綴じとは一致しないので別種に設定した。縫い目は左上がりのまつり縫いなので、「綴じ合わせXSxm (1)」としておく。

綴じ目に
襷が重複

「布綴じ1m」(Ph.136-13)は、ぐし縫いの布綴じ痕だけがみえる。綴じ目痕の右側をタテナに長くナデ調整しており、ここに縫い目痕がある可能性もあるが、そこが粘土板合わせ目にあたっているため、それにとまなう調整の可能性もあって断定できない。布の織り目から考えて、「布綴じ1m」にとまなうと思われる襷縫いの痕跡がある (Ph.136-2)。襷はまつり縫いしてあり、「綴じ合わせMSm」。

「布綴じ1n」(Ph.136-14)は、綴じ目痕が「く」の字に屈折してみえる布綴じ痕。屈折部を境に狭端側と広端側の布圧痕は糸目が食い違う。従って、布袋の綴じ合わせ目と重なるように襷がとってあるものと考え。襷は、綴じ目の上に逆時計回りで重なる。綴じ目の針目は左上がりのまつり縫い、襷の留め付けは左上がりのまつり縫い。縫い目は確認できない。「綴じ合わせMSrx」。

以上、平瓦1類AⅢの布綴じ5種は、次の3種に大別される。

- ①綴じ目をぐし縫いする「布綴じ1j・1m」。
- ②綴じ目をまつり縫いする「布綴じ1h・1n」。2種は布の重ね方が逆になる。
- ③綴じ目の縫い方が不明の「布綴じ1k」。

法量と面取
りで細分

平瓦1類B (Ph.137・138・140、Fig.109) 平瓦1類Bは、凹面の縁だけに面取りがあり、凸面側側縁には面取りを行わない。法量と凹面両側縁の面取り手法により1類BI~BIVに細分する。1類BI~IIIは、凹面側縁に狭い面取りのヘラケズリをおこなう。法量によって細分した。1類BIVは、凹面側縁の面取りが幅広いもの。

平瓦1類BI (Ph.137-15)は、平瓦1類Bで最も大型。全長38.3cm、広端幅約35cm、狭端幅約32cm、重さ約5kg。凹面は、四周をヘラケズリすると布綴じ痕や粘土板合わせ目を指ナデ

調整する以外は調整しない。布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕が明瞭に残る。凸面は丁寧にヨコナデ調整する。かすかに格子叩き目が残る。側面調整は、破面だけをヘラケズりするb手法。ヘラケズりは凹面からみて時計回り方向に動く。胎土に砂粒を含み、焼成はしっかりしていて灰色。

平瓦1類BⅠの布綴じ痕は「布綴じ1p」の1種類を確認した(Ph.137-12, Fig.109)。左に綴じ目痕、右に縫い目痕がある。ユビナデ調整するので、縫い目(付加手法)については不明だが、綴じ目をまつり縫いすることは判明する。「綴じ合わせMSrx」。

布綴じ1種

平瓦1類BⅡ(Ph.137-16, 138-1・19~22)は、全長37.5~41cm、広端幅31~32.5cm、狭端幅27.5~29cm、重さ5~6.3kg。広端幅と狭端幅が平瓦1類BⅠより、およそ3cm小さい。凹面は、四周をヘラケズりするのと綴じ合わせ痕などをナデないしヘラケズりする以外は調整しない。側面調整は、b手法とc1手法があり、ケズリの方向も時計回り方向や左右同じ方向などバリエーションがある。凸面は全面を丁寧にナデ調整する。叩き板は、木目に斜交する格子目ないし斜格子目の刻線叩き板。砂粒を含んだやや粗い胎土。焼きは堅く、青灰色ないし灰色をしたものが多い。

一回り小型

平瓦1類BⅡの布綴じ痕は「布綴じ1q・s・t・u・w」の5種類を確認した(Fig.109)。

布綴じ5種

「布綴じ1q」(Ph.137-16)は、左に綴じ痕目、右に縫い目痕があり、狭端から広端に向かって両者が開いていく。綴じ目、縫い目ともまつり縫いの「綴じ合わせMSrm(r)」。

「布綴じ1s」(Ph.138-21)は、左に綴じ目痕、右に縫い目痕があり、広端に向かって両者が開く。綴じ目はまつり縫い、縫い目はぐし縫いする。縫い目痕に沿って左側に布端の圧痕があるので、重なる布端を内側に短く折り返していることがわかる。「綴じ合わせMSrg」。

「布綴じ1t」(Ph.138-19)は、綴じ目痕の左右両側に縫い目痕が現れる「割縫い」の布袋。綴じ目痕の左にある縫い目痕は綴じ目痕と平行し、右側に10cmほど離れてある縫い目痕は広端に向かって開く。綴じ目痕と右側の縫い目痕の間には、布端を折けた痕跡がみえる。綴じ目と縫い目はすべてぐし縫いする。「綴じ合わせWg」。

割縫い布袋

「布綴じ1u」(Ph.138-20)は、綴じ目痕の右側に縫い目痕があり、両者広端に向かって開く。綴じ目はぐし縫いとわかるが、縫い目の針目は調整で潰れていて不明。「綴じ合わせGSx」。

「布綴じ1w」(Ph.138-1・22)は、左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕があり、綴じ目はまつり縫い、縫い目はぐし縫いする「綴じ合わせMSrg」。布の重ね方と縫い方は「布綴じ1s」と同じだが、外側に重なる布の布端を内側で折り返した痕跡がなく、また、綴じ目での布の重なり具合が一致しない。

以上、平瓦1類BⅡの布綴じ5種は、

- ①綴じ目をぐし縫いする「布綴じ1u」。
- ②綴じ目をまつり縫いする「布綴じ1q・1s・1w」。「布綴じ1q」は縫い目もまつり縫い、他の2種は縫い目をぐし縫いする。
- ③割り縫いする「布綴じ1t」。

このほか、どの布綴じ(布袋)かは不明だが、ダーツの痕跡がある(PL.75-3)。襷の基部をぐし縫いし、折り返した先をジグザグのまつり縫いで留めつける。

平瓦1類BⅢ(Ph.137-17, 140-29)は、全長37~39.5cm、広端幅28.5~29cm、狭端幅24~

B IIIはB IIより小型

25.5cm、重さ4.5～5 kg。1類B IIよりさらに一回り小さい。凹凸面の調整手法は、1類B I・IIとほとんど変わらない。側面調整もb手法かc1手法。叩き目は斜格子叩き目が確認できる。砂粒を含んだ胎土で、青灰色をした硬質の瓦。布綴じ痕は、「布綴じ1y」がある。

「布綴じ1y」(Ph.137-17、140-29、Fig.109)は、左に縫い目痕、右側に綴じ目痕が位置する。両者は狭端方向に開く。綴じ目、縫い目とも左上がりのまつり縫いで、裏側に拵けた布端がある。「綴じ合わせMZlm(1)」。

B IIは平行刻線叩き板

平瓦1類BIV(PL.73-1)は、全長約39～40cm、広端幅30～32cm、狭端幅約28.5cm、重さ約5 kgあり、瓦の規格は1類B IIとほぼ同じだが、木目斜交の平行刻線叩き板を使うことと、凹面の左右側縁を幅広く面取りする点で区別した。砂粒の少ない緻密な胎土をもち、灰白色のやや軟質のもの、灰色で硬質のものがある。布綴じ痕は、「布綴じr・z」の2種があり、綴じ目の縫い方が違う(Fig.109)。

「布綴じ1r」(Ph.138-18)は、布のつまみが短く、綴じ目痕(右)と縫い目痕(左)が近接して平行する。綴じ目、縫い目ともまつり縫いの「綴じ合わせMZrm(1)」。

「布綴じ1z」(Ph.140-27)は、右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕が位置する。折り山は狭端側に広く、ために綴じ目痕と縫い目痕は狭端方向に開く。綴じ目、縫い目ともぐし縫いする「綴じ合わせGZg」。

凹面調整する1類C

平瓦1類C(Ph.139-140、Fig.110)平瓦1類Cは、凹面のほぼ全面をナデ調整あるいはヘラケズリ調整して、布圧痕や側板圧痕を消す一群。法量や凹面調整手法によって、平瓦1類C I～C IVに細分する。布綴じ痕は「布綴じ1 α ・ β ・ γ 」の3種を確認した(Fig.110)。

平瓦1類C I(Ph.139-23)は、凹面をヘラケズリ調整して主に桶側板圧痕の段差をケズリとばすもの。凹面には、布圧痕、布綴じ痕、分割界線などが残っている。全長38～40cm、広端幅31～32cm、狭端幅26～26.5cm、重さ5～5.3kg。

凹面のヘラケズリは、狭端から広端に向かうものとその逆に広端から狭端へ向かうものがある。凹面四周もヘラケズリする。四周のヘラケズリ方向は、三辺のヘラケズリが時計回り方向に向かい、一辺だけが逆方向を向く。側面調整は、端部に分割断面を残すこともあるが、基本的にはc1手法。ヘラケズリは凹面四周の面取りのヘラケズリ同様、一辺をのぞいて時計回り方向を向く。凸面は全面をヨコナデ調整し、叩き目をほとんど消し去る。叩き板は、木目に斜交する格子目刻線を刻んだもの。凸面の両側縁に面取りのヘラケズリを加えるが、ないものもある。

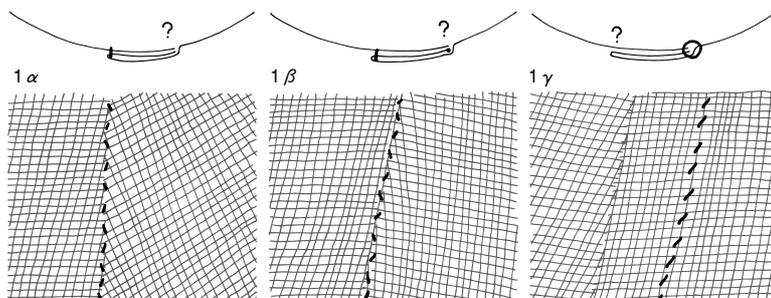


Fig.110 平瓦1類の布綴じ合わせ模式図②

平瓦 1 類C I の布綴じ痕は「布綴じ 1 a」(Ph.139-23)。ぐし縫いの綴じ目痕しかわからない。「綴じ合わせGZx」。

平瓦 1 類C II (Ph.139-24) は、凹面全面をタテヘラケズリとタテナデで調整する。さらに、凹面の広端側と狭端側に幅広のヨコヘラケズリを加えるので、布圧痕や桶の側板圧痕はほとんど残らない。布綴じ痕は綴じ目痕が深いためかろうじて残っている。右側にぐし縫いと思われる綴じ目痕があり、その左12cmほど離れてそれと平行する^く紮けた布端の圧痕がある。ここが綴じ目痕(「布綴じ 1 β」)だろう。「布綴じ 1 β」は、綴じ目をぐし縫いするが縫い目痕は確認できない。「綴じ合わせGZx」。

凸面も全面をヨコナデ調整し、叩き目をほとんど残さないが、叩き板が木目斜交の格子目刻線だったことはわかる。凸面の両側縁には面取りのヘラケズリがある。側面調整はb手法。一辺が逆方向になる以外は、時計回り方向にヘラケズリする。全長39cm、広端幅32cm、狭端幅24.5cm、重さ5.9kg。広端幅に比べて狭端が狭いのも特徴。胎土はやや粗い。焼きは硬質で灰色。

平瓦 1 類C III (Ph.139-25) は、全長37.5cm、広端幅28cm、狭端幅24cm、重さ約 5 kg。1 類Cで最も小型。凹面は、ナデやケズリで調整するが、布圧痕や桶の側板の段差が残る。凹面四周はヘラケズリで面取りする。側面調整はb手法。凸面は全面ヨコナデ調整。叩き目は格子叩き目だろう。小石を含むやや粗い胎土。硬質の焼きで青灰色をしている。

平瓦 1 類C IV (Ph.140-26) は、凹面全面ををヨコないしナナメにヘラケズリ調整する。全長37.5cm、広端幅32~33cm、狭端幅29cm、重さ5.5kg。法量は1類C I・C IIとほとんど同じだが、やや狭端幅が大きい。1類C IVの特徴は、凹凸両面の側縁を数回ヘラケズリして、丸く仕上げる点にある。面取りのヘラケズリはすべて広端から狭端に向かう。凸面は全面をヨコナデ調整する。叩き板は木目に斜交する斜格子目刻線を刻む。粗い胎土をもち、硬質で青灰色。

平瓦 1 類C IV の布袋綴じ合わせは「布綴じ 1 γ」(Ph.140-26, Fig.110)。綴じ目痕は確認できないが、側縁に平行する縫い目痕がある。縫い目はまつり縫いで、縫い目が溝状にくぼむので、裏に布端があるらしい。「布綴じ 1 γ」は「綴じ合わせXZm (r)」。

b 平瓦 2 類 (Ph.141~144, Fig.111)

平瓦 2 類は、粘土板桶巻き作り平瓦の一つ。木目斜交の格子目あるいは斜格子目刻線を入れた叩き板を使う。広端幅は32cm以下だが、全長が41cmをこえる長手の平瓦。凹面調整をおこなわない平瓦 2 類Aと、凹面を調整する平瓦 2 類Bに大別し、各々を法量や細部の手法によって細分する。

2 類は長手

平瓦 2 類A (Ph.141・143・144, Fig.111) 広端幅32cm以下で全長が41cmをこえる長手の平瓦で、凹面調整をおこなわないもの。法量によって、2類A I・A II・A IIIに細分する。

2 類 A は凹面未調整

平瓦 2 類A I (Ph.141-30, 143-38・39, 144-40) は、全長41~43cm、広端幅31~33cm、狭端幅26~28cm、重さ5.5~6 kgあり、平瓦 2 類Aでは最も大型。凹面は、粘土板合わせ目を軽くナデ調整するのと四周に面取りのヘラケズリをおこなう以外は調整しない。凹面に残る布綴じ痕は4種類あり、これを「布綴じ 2 a・2 b・2 c・2 d」と区別する (Fig.26)。

布綴じ 4 種

側面調整は、破面だけをヘラケズリするb手法。広端面と狭端面もヘラケズリ調整する。凸面は全面を丁寧にヨコナデ調整し、格子叩き目あるいは斜格子叩き目はごくかすかにしか残らない。凸面の両側縁には面取りのヘラケズリを加える。砂粒を多く含んだ粗い胎土で、焼きはしつ

かりしている。暗灰色。

「布綴じ2a」(Ph.141-30)は、ぐし縫いの綴じ目痕だけがみえ、その右側に位置すると思われる縫い目痕は不明。「綴じ合わせGSx」あるいは布を重ねただけの「綴じ合わせGCx」だろう。

「布綴じ2b」(Ph.143-38)も、右上がりの綴じ目痕だけがみえる。綴じ目痕の左側に、綴じ目痕とほぼ平行する新けた布端のくぼみがみえるが、ここには縫い目の痕跡がない。付加手法を伴わない「綴じ合わせGZo」か。

「布綴じ2c」(Ph.143-39)は、右側にまつり縫いの綴じ目痕、左側にぐし縫いの縫い目痕がある「綴じ合わせMZrg」。縫い目は蛇行し、狭端側で綴じ目との間隔が狭くなる。布の織り目は粗い。

「布綴じ2d」(Ph.144-40)は、まつり縫いした綴じ目痕だけがわかり、その右側にある縫い目痕の詳細がわからない。「綴じ合わせMSrx」。

2類AⅡは
細身

平瓦2類AⅡ(Ph.141-31、144-41)は、全長41~42cm、広端幅31cm、狭端幅22.5~24cm、重さ4.5~5.6kg。2類AⅠにくらべて、狭端幅が狭い。また、凸面両側縁の面取りのヘラケズリがやや幅広い点でも区別できよう。側面調整はb手法。凸面はヨコナデ調整。叩き板は木目に斜交する細かい斜格子刻線を刻んだもの。広端から5.5cmの位置に叩き板側面の圧痕があり、叩き板の幅はその程度と推測できる。砂粒の少ない胎土をもち、焼き締まる。茶褐色ないし暗灰褐色。平瓦2類AⅡには、焼成以前に広端の一方の隅をごく小さく切り欠いた資料(Ph.141-31)がある。これとPh.144-41の2点は、凹面の中央やや広端よりの位置に全く同じ布袋の破れた痕跡がみえる。布袋のかぶせ方に法則性があったとみてよいだろう。

布袋の
ほころび

平瓦2類AⅢ(Ph.141-32)は、全長40.5cm前後、広端幅28cm、狭端幅約25cm、重さ約5kg。広端幅と狭端幅との差がAⅠ・AⅡよりも小さい。側面調整はb手法。凹面は未調整で、粘土板合わせ目、糸切り痕、布圧痕、桶の側板圧痕が残る。布袋の綴じ合わせは確認できなかった。凸面は格子叩き目がかすかに残る程度までヨコナデ調整される。砂粒を含み焼き締まっている。青灰色。

2類Bは
凹面調整

平瓦2類B(Ph.142~144、Fig.111) 平瓦2類Bは、全長41cmをこえる長手の平瓦のうち、凹面に調整をおこなう一群。側面調整がb手法2類BⅠと、c1手法の2類BⅡにわたる。

平瓦2類BⅠ(Ph.142-33、143-36・37、144-42~44)は、全長41~45cm、広端幅31~32cm、狭端幅25~26cm、重さ約5~6kg。凹面にナデ調整またはヘラケズリ調整をおこなって凹面の布圧痕や側板痕などを消すが、完全には消し去っていない。そのため、後述する布綴じ痕はある程度判明する。粘土板合わせ目は、S型とZ型がある。

側面調整は破面だけをヘラケズリするb手法。側面のヘラケズリは、ともに狭端から広端に向かうもの、ともに広端から狭端に向かうもの、両者逆方向を向くもの、といろいろある。

凸面は全面をヨコナデ調整して叩き目を消すが、叩き板が木目に斜交する格子目刻線ないしは斜格子目刻線を刻んでいたことはわかる。斜格子目刻線には格子目の長軸が叩き板と平行するものと、直交するものがあり、バリエーションがある。このほか、ごく少数、平行刻線叩き板を用いる個体があり、格子叩き目の上に平行刻線叩き板で補足の叩き締めをおこなう例もある。やや大型の砂粒を含んで粗めの胎土をもつが、焼きはしっかりしていて堅い。灰色ないしは明灰色をしている。

補足の
叩き締め

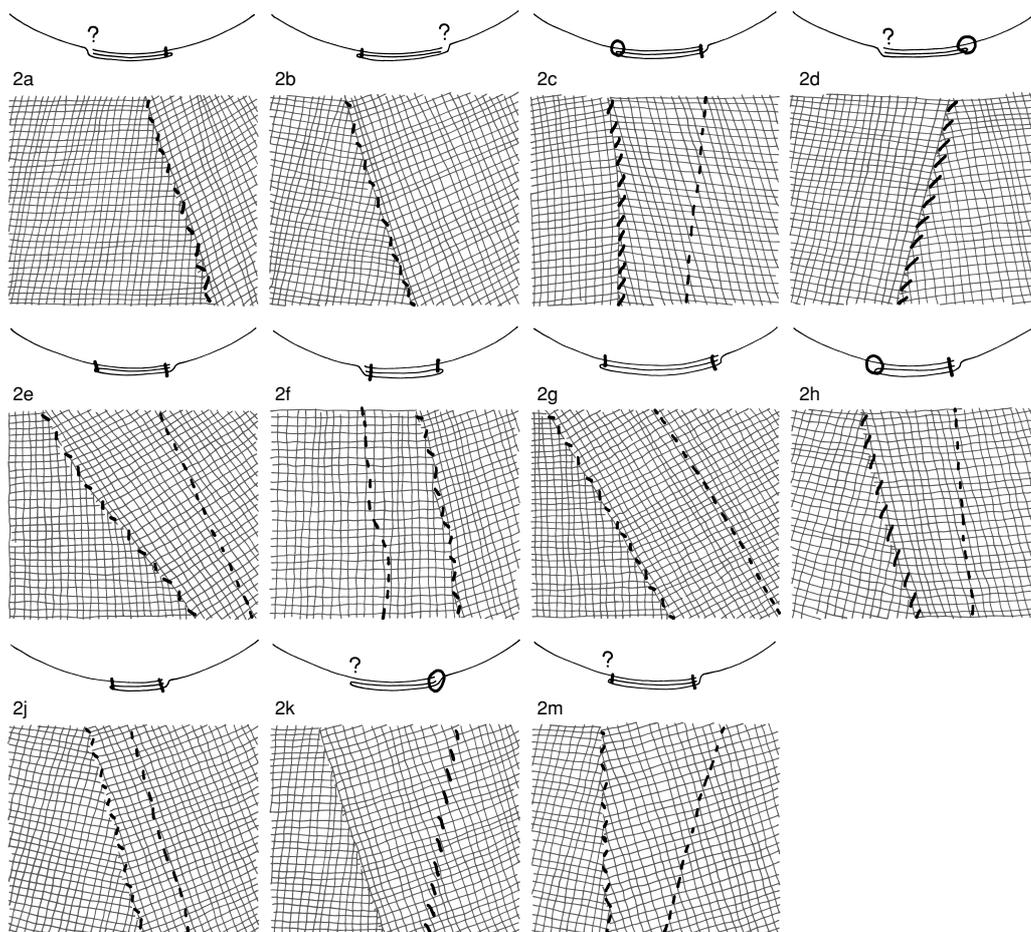


Fig.111 平瓦2類の布綴じ合わせ模式図

平瓦2類BIの布綴じ痕は、6種類を確認した。これらを「布綴じ2e・2f・2g・2h・2j・2k」とする (Fig.111)。

「布綴じ2e」(Ph.142-33)は、右側に右上がりの綴じ目痕があり、左側に縫い目痕がある。両者狭端に向かってやや開き、ともにぐし縫い。綴じ目痕の左側の布圧痕は、糸目が綴じ目痕と平行ないし直交する。「綴じ合わせGZg」

「布綴じ2f」(Ph.144-42)は、2eとは逆に左側に左上がりの綴じ目痕があり、右側に縫い目痕がある。両者狭端に向かって開き、ともにぐし縫い。綴じ目痕の右側の布圧痕が、綴じ目痕と平行ないし直交する糸目をもっている。「綴じ合わせGSg」。

「布綴じ2g」(Ph.144-43)は、2eと同じ「綴じ合わせGZg」。違いは、綴じ目と縫い目との間隔が15cmと大きく離れていて、両者ほぼ並行する点にある。

「布綴じ2h」(Ph.143-36)は、平瓦2類BIの布袋では唯一、綴じ目をまつり縫いする。縫い目はぐし縫い。「綴じ合わせMZrg」。

「布綴じ2j」(Ph.143-37)も、2eや2gと同じ「綴じ合わせGZg」。狭端部でしか綴じ目痕と縫い目痕を確認できないが、両者の間隔は2eや2gより狭く、これらとは逆に広端に向かって開いていくように見える。

「布綴じ2k」(Ph.144-44)は、左傾した縫い目痕しかわからないが、布の厚みから判断する

と、その右側に綴じ目痕が位置する。縫い目は左上がりのまつり縫い。「綴じ合わせXZm(1)」。

側面調整は
c 1 手法

平瓦2類BⅡ(Ph.142-34、144-45)は、側面に分割断面を残さないc1手法をとる。凹面は全面をヘラケズリ調整して布圧痕などをほとんど消し去る。凸面は、木目斜交の斜格子目刻線の叩き板で叩いたのち、丁寧にヨコナデ調整して叩き目をけす。凸面の両側縁に面取りのヘラケズリをおこなうタイプと面取りしないタイプがある。前者は、全長42cm、広端幅約31cm、狭端幅24cmあるが、後者は全長41cm、広端幅28.5cmでやや小さい。

分割凸帯の
とめつけ

凸面両側縁を面取りするタイプに、布綴じの痕跡(「布綴じ2m」と、分割凸帯の痕跡が確認できた。「布綴じ2m」(Ph.144-43)は、右に綴じ目痕(縫い方不明)、左にぐし縫いの縫い目痕がある「綴じ合わせXZg」。分割凸帯は捩り紐を桶の上下で両端をとめ、全高のおよそ1/2のところ桶の側板裏側にくぐらせている。そのため、分割界線が上下で切れたようにみえる(Ph.142-34)。

c 平瓦3類(Ph.145~148、Fig.112)

平瓦3類は、広端幅と狭端幅の差が3cm前後未満しかなく長方形に近い平面形をした粘土板桶巻き作り平瓦のうち、側面調整にb手法ないしc1手法を用いる一群。凹面調整の有無によって3類Aと3類Bに細分する。

平瓦3類A(Ph.145~148、Fig.112) 平瓦3類Aは、粘土板の合わせ目や布綴じ合わせ痕をユビナデする場合がある以外、基本的に凹面調整をおこなわない。凹面側辺におこなう面取りのヘラケズリ幅が狭い3類AⅠと幅の広い3類AⅡに細分するが、後者の数は少ない。

平瓦3類AⅠは、全長37~41cm、広端幅30~31cm、狭端幅28~29cm、重さ4.7~6kgほどある。凹面は粘土板合わせ目をユビナデ調整するが、それ以外には調整を行わない。そのため、糸切り痕や布圧痕、桶の側板圧痕、布綴じ痕などがほぼ明瞭に残っている。

S型とZ型

粘土板合わせ目は、S型とZ型がほぼ同数あり、おおよそ2枚に1つの割合で見つかる。したがって、粘土板の2枚巻き付けとみてよい。さらに、2枚で円筒を一周しなかった場合も間々あったらしく、その場合、すき間を繋ぐように細い粘土板を貼り足したため、1枚の平瓦にS型とZ型が共存する例も散見される(Ph.145-2、147-57)。桶の側板は2.5~3cmほどの幅で、桶を綴じ合わせた紐の痕跡などがみえる例はない。広端近くの隅に、桶側板の隙間に連続して直角三角形の突起がみえるものがある(Ph.148-61)。同様の例は、平瓦4類にもあるが、桶の開閉装置に関係するのだろうか。

側面調整は、破面だけをヘラケズリするb手法か、破面と断面を断面に平行してヘラケズリするc1手法。ために、左右の側面は平行しない。分割線は凹面側から入れる(Ph.148-60)。狭端面と広端面および凹面の四周もヘラケズリする。これらのヘラケズリは、左右ともに狭端から広端に向かうもの、逆に広端から狭端に向かうもの、両者逆方向を向くもの、といろいろあり、布袋が同一と判定できる一群でもヘラケズリの方法は一定しない。広端面に藁座状圧痕をとどめる例がある。

凸面は全面をヨコナデ調整して叩き目を消すが、叩き板の種類は判明する。木目に斜交する平行刻線叩き板を用いるものが最も多い。刻線の間隔は7本/3cmほど(Ph.145-46・48)。ほかに、格子目刻線ないし斜格子目刻線を刻んだ叩き板がある。格子目刻線叩き板は、木目に平行および直交する刻線を刻む例(Ph.145-47)と、木目に斜交する刻線を刻んだ例(Ph.147-

59・60)がある。広端に平行して叩き板の側縁の圧痕が残る例があり(Ph.147-60)、これによ
 ると叩き板の幅は、5.5~6cmある。また、一部、格子目刻線叩き板と斜格子目刻線叩き板、あ
 るいは平行刻線叩き板と斜格子刻線叩き板、といった2種類の叩き板が併用された例がある
 (Ph.147-59・60)。粘土板の叩き締めめに2種の叩き板を用いる場合(Ph.147-60)が多いが、
 補足の叩き締めめに成形段階の叩き板とは違う板を使う場合もある。

叩き板の幅
 叩き板2種

平瓦3類A Iは、大型の砂粒を含むが、焼きはしっかりしておおむね堅い。灰色ないし明灰
 色をしている。

平瓦3類A Iの布綴じ痕は「布綴じ3a~d、f~h」の7種類(Fig.112)。

布綴じ7種

「布綴じ3a」は、八形に2条の綴じ目痕がある。2枚の布を継ぎ足したのだから。縫い目痕
 が2条あるものと1条しかないものがあり、前者を「布綴じ3a1」とし、後者を「布綴じ3a
 2」とする。

「布綴じ3a1」(Ph.145-46、146-49・50)は、右側に左上がりの綴じ目痕とこれに平行す
 る縫い目痕があり、両者の間が浅くくぼむ(Ph.146-49・50)。綴じ目はぐし縫い、縫い目はま
 ったり縫いなので、折り山をとった「綴じ合わせGZm(1)」。さらに、この縫い目痕の狭端側の
 端に接して右上がりの別の綴じ目痕(ぐし縫い)が走る(Ph.145-46、146-49)。こちらの綴
 じ目痕の左側10cmほど離れた位置には、左上がりの縫い目痕(ぐし縫い)がある(Ph.145-46)。

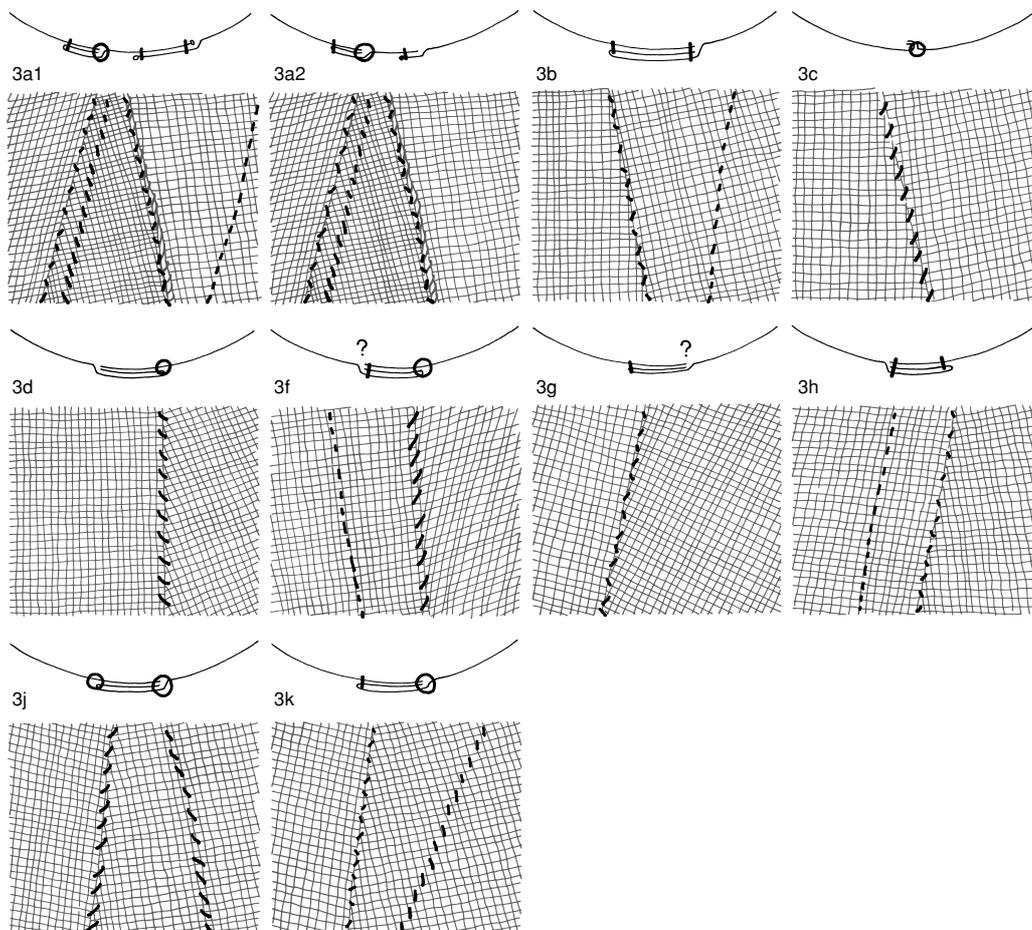


Fig.112 平瓦3類の布綴じ合わせ模式図

こちらも綴じ目痕と縫い目痕との間がごく浅くくぼみ、綴じ目と縫い目の裏には、それぞれ広端側の布端と連続する衿けた布端がもぐっている。こちらは、折り山をとらない「綴じ合わせGCg」とみてよからう。したがって、「布綴じ3a1」は、「綴じ合わせGZm(1)+GCg」となる。

綴じ目の
やり直し

一方、「布綴じ3a2」(Ph.146-51・52)は、右側の綴じ目痕は「布綴じ3a1」と全く同じだが、二つの綴じ目痕の間隔が狭く、右上がりの綴じ目痕に平行するくぼみが「布綴じ3a1」よりも太い(Ph.146-51)。加えて、左側にある綴じ目痕の左側に縫い目痕がみられない(Ph.146-52)。おそらく、左側にある右上がりの綴じ目をいったんほどき、重ね合わせの長さをごく短くして綴じ合わせ、布端を留めつける縫い足しを省略したのだろう。したがって、「布綴じ3a2」は、「綴じ合わせGZm(1)+GZo」。右側に位置する左上がりの綴じ目痕がやや開き気味になっていることから使い込まれた時間の経過がうかがえるので、「布綴じ3a2」が新しい。なお、「布綴じ3a1」および「布綴じ3a2」ともに、2条の綴じ目の頂点近くで瓦が分割されている点は共通し、分割凸帯の位置と布袋のかぶせ方に一定の規則性がうかがえる。

かぶせ方に
規則性

なお、「布綴じ3a1」13例と「布綴じ3a2」17例について凸面の叩き目を調べると、「布綴じ3a1」はすべて木目斜交の平行叩き目。「布綴じ3a2」は、14例が木目斜交の平行叩き目、3例が木目斜交の斜格子叩き目だった。

「布綴じ3b」(Ph.146-53)は、右側にぐし縫いの綴じ目痕、左側にやはりぐし縫いの縫い目痕があり、両者は狭端方向に開く。「綴じ合わせGZg」。縫い目は糸が太く、狭端までは縫っていない。

「布綴じ3c」(Ph.146-54)は、右上がりの綴じ目痕(まつり縫い)はあるが、折り山の端を留めつけた縫い目痕が観察できない。幅の狭い折り山は布袋の裏側で遊んでおり、重ねた布端が左右に蛇行している。「綴じ合わせMLr」。「布綴じ3c」は、4例中3例が木目に斜交する斜格子叩き目、1例が木目に斜交する平行叩き目だった。

折り山を
とめつけず

「布綴じ3d」(Ph.147-55)は、側辺に平行するかやや左に傾いたまつり縫いの綴じ目痕だけが確認できた。綴じ目の裏側で折り山が遊んでいるようにみえる個体があるので、折り山を留めつける付加手法がない可能性が高い。「綴じ合わせMLl」だろう。「布綴じ3c」とはまつり縫いの針目が逆の傾きをしている。「布綴じ3d」にともなう叩き板には、格子刻線叩き板、斜格子刻線叩き板、平行刻線叩き板の3種があり、いずれも刻線は叩き板の木目に斜交する。格子刻線叩き板は刻線の間隔が狭い。

「布綴じ3f」(Ph.147-56)は、凹面右側辺近くにまつり縫いの綴じ目痕が確認できる。左側辺近くに縫い目痕を残す例があり、これが両者一組とすると、「綴じ合わせMSrg」。凸面の叩き目には、やや目の粗い斜格子叩き目がある。

「布綴じ3g」(Ph.147-57)は、左に傾いたぐし縫いの綴じ目痕だけが確認できる。「布綴じ3b」に似るが、綴じ目痕の傾きが逆になるので区別した。「綴じ合わせGZx」。凸面の叩き目は、刻線の間隔が違う2種の斜格子叩き目が重複する例がある。

「布綴じ3h」(Ph.146-58)は、綴じ目と縫い目が並行する。ともにごし縫いの「綴じ合わせGSg」。

以上の平瓦3類Aにみいだせた布綴じ痕を整理すると、次の3種に大別できる。

- ① 2枚の布をぐし縫いで綴じ合わせる「布綴じ3a1・3a2」。
- ② 綴じ目をぐし縫いする一群。縫い目もぐし縫いする「布綴じ3b・3g・3h」と、縫い目をまつり縫いする「布綴じ3k」にわかれ、さらに、前者は左側の布が上にくる「布綴じ3h」と右側の布が上にくる「布綴じ3b・3g」とにわかれる。
- ③ 綴じ目をまつり縫いする一群。縫い目もまつり縫いする「布綴じ3j」と、付加手法の縫い目がない「布綴じ3c・3d」、縫い目の縫い方がわからない「布綴じ3f」がある。

次に、平瓦3類AⅡ(Ph.145-47、148-62~64)は、凹面側縁におこなう面取りのヘラケズリが幅広いことで、3類AⅠと区別したが、その他の製作技法や胎土焼成、あるいは規格は3類AⅠと大きな違いがない。叩き目も、平行叩き目、格子叩き目、斜格子叩き目がある点で3類AⅠと似ている。ただし、叩き板の異同までは判別できなかった。

AⅡは面取りが広い

布袋の綴じ合わせは「布綴じ3j・3k」(Fig.112)があつて、3類AⅠとは違うと考えてよからう。

布袋2種はAⅠと違う

「布綴じ3j」(Ph.148-62・63)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、ともにまつり縫いする「綴じ合わせMZrm(1)」。狭端に向かって縫い目と綴じ目が近づくので、折り山は広端に向かって幅広くとってある。

「布綴じ3k」(Ph.148-64)は、やはり左に縫い目痕、右に綴じ目痕があるが、縫い目をまつり縫い、綴じ目をぐし縫いする「綴じ合わせGZm(1)」。「布綴じ3j」とは逆に、縫い目と綴じ目は広端で距離を縮めるので、折り山の幅は狭端で広がっている。

平瓦3類B(Ph.145-48) 平瓦3類Bは、凹面のほぼ全面をナデやヘラケズリで調整する一群。それ以外の製作技法や胎土・焼成あるいは規格については3類Aと全く同じ。また、確認できた布袋の綴じ合わせも、3類AⅠの「布綴じ3a2」および「布綴じ3a」なので、粘土板の合わせ目や布袋の綴じ合わせ痕を調整するときに、たまたま全体まで調整を及ぼした、といった程度の違いなのだろう。

3類Bは凹面調整

d 平瓦4類(Ph.149~155、Fig.113)

平瓦4類は、狭端幅と広端幅の差が小さく、ほぼ長方形をした粘土板桶巻き作り平瓦のうち、側面調整c2手法をとる一群。c2手法は、分割後の側面調整で、凸面側に深くヘラケズリして分割破面と分割断面をケズリとする手法。このため、左右の側面がほぼ平行する。法量の違いによって、A~Cに細分する。

法量で3種に区別

平瓦4類A(Ph.149~154、Fig.113) 平瓦4類Aは、全長35~40cm、広端幅27~30cm、狭端幅25~28cm、重さ4~5.5kg。平瓦3類よりも全体に小ぶりの瓦。狭端と広端の幅の差が1~3cmほどしかなく、広端と狭端を逆向きに屋根に葺いたものもまま存在する。

凹面は、粘土板合わせ目と布袋の綴じ合わせ目をユビナデ調整する以外には調整を行わない。このため、糸切り痕や布圧痕、桶の側板圧痕、布綴じ合わせ痕などが明瞭に残る。粘土板合わせ目は、S型とZ型がほぼ同数、おおよそ2枚に一つの割合でみつかるので、粘土板を2枚巻き付けた粘土円筒を作っていることがわかる。平瓦3類Aと同様、1枚の平瓦にS型とZ型が共存する例も散見される。桶の側板は2.5~3cmほどの幅がある。桶を綴り合わせた紐の痕跡はない。平瓦3類と同様、広端近くの隅に、桶側板の隙間に連続する直角三角形の突起がみえるものがある(Ph.153-86)。分割の指標は、撚り紐の分割凸帯である(Ph.153-88)。分割截線は凹面

桶綴り紐の痕跡なし

側から入れる。

側面調整は、破面と断面を凸面側に深くヘラケズりするc2手法。ために、左右の側面は平行する。狭端面と広端面および凹面の四周もヘラケズりする。凹面左右の側縁のヘラケズリ調整は、平瓦3類よりも幅が広い。これらのヘラケズリは、左右ともに狭端から広端に向かうもの、逆に広端から狭端に向かうもの、両者逆方向を向くもの、といろいろあり、布袋が同一と判定できる一群でもヘラケズリの方向は一定しない。広端面に藁座状圧痕をとどめる例がある。これには、円形の藁束を、×印形に縛ったものと、その円弧に直交する方向で縛ったものがある(Ph.154-1・2)。まれに、凸面についた例がある(Ph.153-89)。

広端面に
藁座状圧痕

凸面は叩き成形の後、全面をヨコナデ調整して叩き目を消す。叩き板は、木目に斜交する平行刻線叩き板(Ph.149-66)、木目に直交する平行刻線叩き板(Ph.150-68)、木目に斜交する斜格子刻線刻線叩き板(Ph.149-65・67)、木目に斜交する格子刻線叩き板(Ph.150-72)、木目に平行および斜交する斜格子刻線叩き板、木目に平行・直交する格子刻線叩き板、木目に斜交する平行四辺形の斜格子刻線(Ph.150-69・70)などがある。量的には、平行刻線叩き板が、斜格子・格子刻線叩き板よりも多い。叩き目はいずれも叩き締め円弧を描く。広端に平行して叩き板の側縁の圧痕が残る例があり、これによると叩き板の幅は6cm前後ある。また、2種類の叩き板が併用された例がある。平瓦3類と同じように、粘土円筒の叩き締めに2種の叩き板を用いる場合と、補足の叩き締めに初めの叩き板とは違う板を使う場合とがある。補足の叩き締めは、広端側におこなう例(Ph.150-71、153-87)と、狭端側におこなう例があり、まれに、凹面を叩く例もある(Ph.153-87)。

平行刻線
叩き板が主

布綴じ15種

平瓦4類Aの布綴じ痕は15種類を確認し、これらを「布綴じ4a・4b・4c・4d・4e・4f・4h・4j・4k・4m・4n・4p・4q・4r」とした(Fig.113)。

「布綴じ4a」(Ph.149-65)は、左に綴じ目痕、右に縫い目痕があり、両者ともぐし縫いする。「綴じ合わせGSg」。綴じ目と縫い目の間隔は3cmほどだが、全高のおよそ1/2のあたりで縫い目が蛇行して綴じ目から離れる。

「布綴じ4b」(Ph.149-67、150-72、151-73)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕がある。縫い目、綴じ目ともにごし縫い。「綴じ合わせGZg」。綴じ目と縫い目は狭端方向に開き、狭端部では10cmほど離れる。綴じ目がしっかりしたもの(Ph.149-67)から、若干ほつれ気味のもの(Ph.150-72)、完全にはずれたもの(Ph.151-73)まである。「布綴じ4b」は「布綴じ4p」に似ているが、縫い目と綴じ目の間隔がより広く、広端と狭端での距離の差が小さいことで区別した。

布袋のほど
ける様子

「布綴じ4c」(Ph.151-74)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、両者ともにごし縫い。「綴じ合わせGZg」。綴じ目が逆S字状に蛇行するので、平瓦凹面の中央あたりで縫い目との間隔が最も広くなり、狭端部で最も間隔が狭くなる。

「布綴じ4d」(Ph.151-75)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕がある。ともにまつり縫いするが、綴じ目は左上がりの針目、縫い目は右上がりの針目。「綴じ合わせMZlm(r)」。

「布綴じ4e」(Ph.151-76)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕がある。綴じ目はまつり縫い、縫い目はぐし縫いで、狭端近くでは両者近接しているが、途中から徐々に開いていく。綴じ目の針目は左上がり。「布綴じMZlg」。縫い目の裏側には桁けた布端がある。

「布綴じ4f」(Ph.151-77)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕がある。両者がかなり離れるの

で、折り山の幅は広く、狭端側により広がる。綴じ目と縫い目ともぐし縫いの「布綴じGZg」。縫い目の裏側には衽けた布端がある。

「布綴じ4g」(Ph.151-78)は、左に綴じ目痕、右に縫い目痕があり、狭端側にわずかに開く。綴じ目はぐし縫いだが、縫い目は右上がりのまつり縫い。「綴じ合わせGSm (r)」。

「布綴じ4h」(Ph.152-79)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、両者ほぼ平行する。縫い目・綴じ目ともぐし縫いする「綴じ合わせGZg」。

「布綴じ4j」(Ph.149-60、152-80)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があって、狭端に向かって両者徐々に開く。綴じ目はぐし縫いし、縫い目は針目左上がりのまつり縫いする「綴じ合わせGZm (1)」。

布袋のいた
みが判明

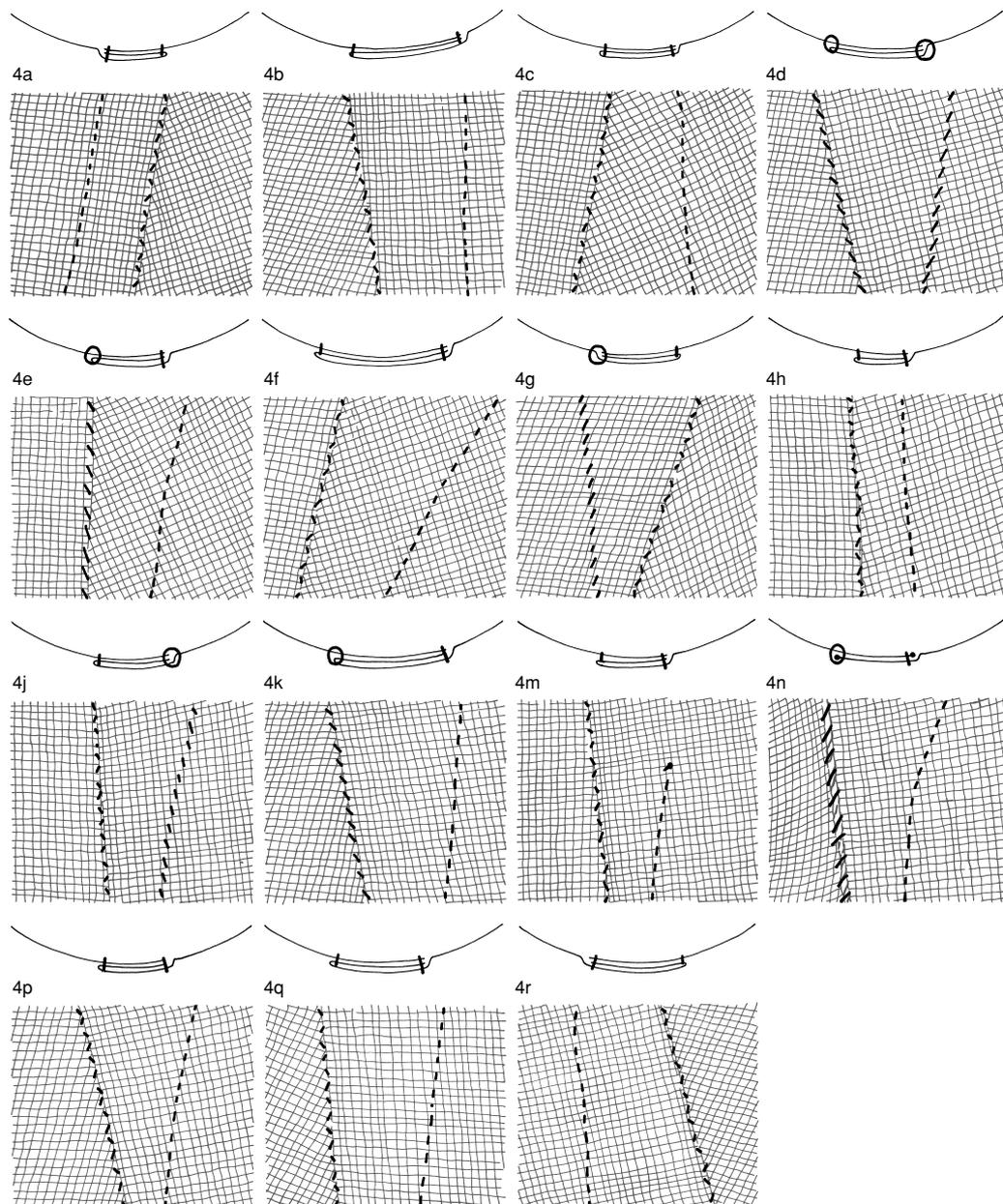


Fig.113 平瓦4類の布綴じ合わせ模式図

「布綴じ4k」(Ph.152-81)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、両者が狭端に向かって開く。綴じ目は針目が左上がりのまつり縫い、縫い目がぐし縫いの「綴じ合わせMZlg」。綴じ方と縫い方は「布綴じ4e」と同じだが、縫い目と綴じ目の間隔が広く、綴じ目左右での布の重なり方が違う。

「布綴じ4m」(Ph.152-82)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、両者は狭端方向に開く。縫い目・綴じ目ともにぐし縫いの「綴じ合わせGZg」。縫い目は狭端まで届かず、全高の2/3ほどの位置で留め縫いされている。

「布綴じ4n」(Ph.152-83)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕がある。縫い目はぐし縫い、綴じ目は右上がりの針目のまつり縫い。縫い目と綴じ目の裏側には、それぞれ広端部の布の耳から連続する拵けた布端がある。したがって、「布綴じ4n」は、折り山をとらないで布を重ねただけの「綴じ合わせMCrg」。

折り山のない布重ね

「布綴じ4p」(Ph.152-84)は、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、両者狭端方向に開く。縫い目、綴じ目ともにぐし縫いの「布綴じGZg」。

「布綴じ4q」(Ph.149-67)も、左に縫い目痕、右に綴じ目痕があり、縫い目、綴じ目ともにぐし縫いの「布綴じGZg」。「布綴じ4q」の方が縫い目と綴じ目の間隔が広い。

「布綴じ4r」(Ph.153-85)は、左に綴じ目痕、右に縫い目痕があり、両者の距離は狭端方向に狭くなる。縫い目・綴じ目ともにぐし縫い。狭端方向に縫い目と綴じ目が近接していく縫い方は「布綴じ4c」に似るが、布の重ね方が逆転している点で区別できる。

4類BはAより長手

平瓦4類B(Ph.155-80・89) 側面調整c手法だが、平瓦4類Aにくらべると幅に対して全長の比率が大きい一群。幅は平瓦4類Aとほぼ同じだが、全長が40cmを越える平瓦4類BIと、全長はほぼ同じで幅の狭い平瓦4類BIIにわけられる。出土量はごく少量。

平瓦4類BI(Ph.155-88)は、全長42cm、広端幅29.5cm、重さ5.3kgある。平瓦2類に似るが、側面調整で区別した。凹面は四周以外は調整をおこなわない。布圧痕と糸切り痕のほかまつり縫いの布綴じ痕がある。縫い目痕は残っていない。

平瓦4類BII(Ph.155-89)は、全長36cm、狭端幅27cm、重さ4.8kgあり、側面調整が粗雑だったため、広端幅の方が狭端よりも2cmほど小さくなっている。凹面は四周をヘラケズリ調整する以外、手を加えない。凸面は、平行刻線にごく粗い斜格子刻線を重ねた特殊な叩き板で叩いている。ヨコナデ調整で叩き目を消した後、凸面狭端側を、粗雑なヘラケズリで調整している。

4類Cは寸足らず

平瓦4類C(Ph.155-90) 平瓦4類Aと製作技法は同じだが、全長が短く正方形に近い。全長33cm、広端幅31cm、狭端幅29cm、重さ4.5kg。凹面四周をヘラケズリ調整する以外は、調整しない。布綴じ痕と撚り紐の分割凸帯の痕跡が残っている。

e 平瓦5類(Ph.156、Fig.114)

叩き目残る

平瓦5類は、対角線で測って1.0×0.8cm前後の比較的細かな斜格子刻線叩き板を使う、粘土板桶巻き作り平瓦。叩き板の刻線はともに木目に斜交する。凸面全面をヨコナデ調整するが、調整が不十分なためにほぼ全面に叩き目を残す点と、狭端幅と広端幅との差がやや大きい点で平瓦4類と区別する。叩き目は、叩き締めの際の円弧を描く。A・B2種に細分する。

平瓦5類A(Ph.156-1・91・93、Fig.114) 平瓦5類Aは、凹面のほぼ全面をタテヘラケズリで調整する。まれに、撚り紐の分割凸帯の痕跡や布綴じ合わせ痕(PL.91-4)を残すものがある。

る。凹面のヘラケズリは、狭端側半分が中央→狭端方向、広端側半分はそれと逆に中央→広端方向に動く。

凹面ヘラケズリの方向

凸面にはヨコナデ調整はあるが、ほぼ全面に叩き目が残る。凸面の広端から7cmほどの位置に、広端と平行する叩き板縁辺の圧痕があるので、叩き板の幅は7cmを大きくは超えないと考えられる。また、凸面に一辺3.5cmほどの方形の圧痕と凹型台の縁の圧痕があって、凹型台の使用を物語る資料がある(Ph.156-93)。

凹型台痕跡

側面は、分割破面と分割断面をともに凸面側に深く削るc2手法。側面と広端狭端面のヘラケズリは、凹面側からみて時計回り方向に動く。凸面の叩き目に圧迫痕があり、凹型台の上で瓦を回しながらヘラケズリしたことがわかる。

広端幅31.5~32.5cm、狭端幅30~31.5cm、全長42~44cm、厚さ2~2.5cm、重さ5.6~6.4kg。硬質で灰色をしたものと、軟質で表面が黒灰色をしたものがある。

布綴じ痕は「布綴じ5a」。凹面に向かって右側に綴じ目痕、左側に縫い目痕がほぼ並行して並ぶ。綴じ目、縫い目ともぐし縫いする「綴じ合わせGSg」。糸目が、かなり太いのも特徴(Ph.156-93、Fig.114)。

平瓦5類B(Ph.156-92、Fig.115) 平瓦5類Bは、桶側板の段差を部分的にヘラケズリするほかは、凹面を調整しない。布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕などが残る。

5類Bは凹面調整簡素

側面調整は平瓦5類Aとおなじくc2手法である。側面と広端狭端面を、凹面側からみて逆時計回りに、凹面縁を時計回りにヘラケズリするものと、ともに時計回り方向にヘラケズリするものとの二者がある。前者は側面調整には凸型台を、凹面調整に凹型台を使い、後者は凹型台だけを使う。

凹・凸型台

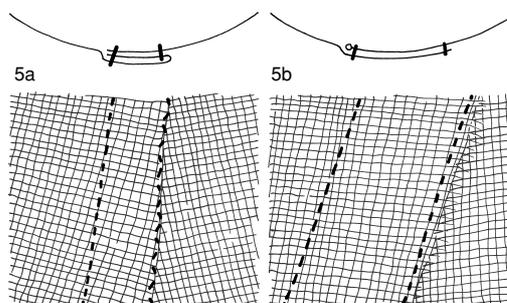
全長41.7~43.5cm、広端幅32cm、狭端幅29.3~30cm、厚さ2.5cm前後、重さ5.8~6kgある。軟質で暗灰色をしている。

平瓦5類Bの布綴じ痕は「布綴じ5b」を確認した。

凹面の狭端側左上隅と広端側右下隅にほぼ平行する2条の縫い目をとどめる。左上の縫い目には、平行して走る溝状のくぼみがあるので、布袋の内側に膝った布端が位置している。右下の縫い目は一見するとその左右で布目が食い違っており綴じ目にみえるが、縫い目の右側にはつれた布端がある。桶に布を時計回りに巻き付け、布の両端を縫いつけた「綴じ合わせGCg」だろう(Ph.156-92、Fig.114)。

f 平瓦6類(Ph.157~160、Fig.115)

平瓦6類は、凸面全面に斜格子叩き目を残す、粘土板桶巻き作り平瓦。叩き板の刻線はいずれも木目に斜交し、その間隔は1cm以上ある。叩き目の単位は、対角線で1.5×1cm程度あり、平瓦5類より粗い。凸面をヨコナデ調整するものと、これを欠くものがあるが、調整をおこなう場合でも不十分なため、叩き目が明瞭に残る。平瓦6類は、法量や凹面調整の違いでA~Gの7種に細分した。



叩き目明瞭

Fig.114 平瓦5類の布綴じ合わせ模式図

平瓦6類A (Ph.157, Fig.115) 斜格子叩き目の深いもの。叩き目は、右上がりの線がやや太い。凸面は、粗い斜格子刻線の叩き板で叩いたのち、雑なヨコナデ調整をする。

凹面は、四周をヘラケズリで面取りする以外調整しない。側面調整はc2手法。側面と広端面・狭端面のヘラケズリおよび凹面四周のヘラケズリは、基本的に時計回り方向にヘラが動く。凹型台の上で調整したとみてよく、凸面には凹型台の縁の圧痕がある。凹面には、布圧痕、桶側板痕、糸切り痕のほか、粘土板合わせ目や分割凸帯の圧痕、布綴じ痕が観察される。

全長41～43.5cm、広端幅28～29.5cm、狭端幅27～28.5cm、厚さ約1.5～2cm、重さ5.5kg程度。砂粒の少ない胎土をもち、褐色ないし赤褐色に発色したものが多い。

布綴じ4種 布綴じ痕は、「布綴じ6a・6b・6c・6d」の4種がある (Fig.115)。

「布綴じ6a」(Ph.157-1・2)は、左側に綴じ目痕、右側に縫い目痕があり、狭端に向かって両者の間隔が狭くなる逆V字形の布綴じ痕。綴じ目はまつり縫い、縫い目は2条あり、ぐし縫いで布端から1cmほどの所をとめたのち、それをもう一度折り返してまつり縫いでとめる。綴じ目のまつり縫いの針目は左上がり、縫い目のそれは右上がり。「綴じ合わせMSmlg+mr」。「布綴じ6a」は、四重弧文CI1にある「布m」の布綴じ合わせ痕 (Ph.111-2)と一致する。綴じ目が破れた資料もある (Ph.157-2)

応急処理した布袋

「布綴じ6b」(Ph.157-3)は、布の合わせ目が大きく開いたため、布袋の横糸を抜き、縦糸を撚って勝ったもの。布目のないところにジグザグに紐状の圧痕があり、ところどころにその紐を結わえつけた瘤状のくぼみがみえる。布の破れ方や勝り方が、四重弧文軒平瓦CI1の「布n」と一致する。「布綴じ6b」の布袋は各所にほころびができており、布袋製作当初の状況とは思えない。「布綴じ6a」に綴じ合わせ部分がちぎれかけた痕跡をとどめる資料 (Ph.157-94)があるので、「布綴じ6a」(=「布m」)がばらけてしまったのち、応急処置を施して使い続けた姿が「布綴じ6b」(=「布n」)だった可能性は十分にあるだろう。

「布綴じ6c」(Ph.157-5)は、綴じ目痕の右側に縫い目痕が平行して走る。両者の間は幅の狭いくぼみとなっている。綴じ目、縫い目ともまつり縫いの「MSml(r)」。「縫い目のところで布袋が破れかけた資料がある。

「布綴じ6d」(Ph.157-4)は、綴じ目痕の右側に縫い目痕が平行し、また綴じ目も縫い目もまつり縫いするので、「布綴じ6c」と同じ「MSml(r)」。「綴じ目と縫い目の間隔が「布綴じ6c」よりも広く、しかも左に傾く特徴で区別した。

縄叩き目が稀に共存

平瓦6類Aは、回廊東北隅の宝蔵SB660周辺から多量に出土したほか、回廊内各所からも出土した。宝蔵周辺出土例に、打ち欠いて作った隅平瓦がある。打ち欠き部分に鬘斗積みが重なった痕跡が明瞭に認められる (Ph.157-6)。また、ごく少数、平瓦7類Aのタテ縄叩き目が重なる資料がある (Ph.157-7)。

細い叩き目

平瓦6類B (Ph.158, Fig.115) 格子目は対角線で1.5×0.9cmほどの大きさ。6類Aよりも格子目の刻線が浅く、かつ細いもの。凸面を叩き締めたのち、ごく軽いヨコナデ調整をするかあるいはまったく調整しないので、円弧を描く叩き目が明瞭に残る。凸面の左右の側辺近くに凹型台側縁の圧痕を残すものがある。

側面調整はc2手法、凹面は四周をヘラケズリ調整する以外は調整しない。凹面狭端近くに丸いくぼみと紐状のくぼみがある。桶側板の連結に関係するか。側面と端面のヘラケズリは凹面

側からみて逆時計回り方向、これに対し凹面四周のヘラケズリは時計回り方向。凸型台の上で側面調整、凹型台の上で凹面調整をした結果だろう。

凹・凸型台

粘土板の合わせ目はS型とZ型の両者がある。桶に固定された分割凸帯は撚り紐を使い、広端から13~14cmほど（全長の約1/3）のところで長さ3~5cmほど、側板の内側にくぐらせている（Ph.158-3・96）。

分割凸帯は撚り紐

全長37~40cm、広端幅29~31cm、狭端幅26.4~28.2cm、厚さ2cm前後、重さ4.7~5.2kg。葦足長は20~23cmの幅があるが、21cm前後が最も多い。硬質で灰色ないし黒灰色をしたものと、やや軟質で暗褐色ないし灰褐色をしたものがある。

布綴じ痕は、「布綴じ6e」と「布綴じ6f」の2種類がある（Fig.115）。

布綴じ2種

「布綴じ6e」（Ph.158-1）は、右に綴じ目痕、左に縫い目痕があって両者ほぼ平行する「綴じ合わせGZg」。「布綴じ6e」は、四重弧文軒平瓦CⅡの「布綴じq」と一致する可能性が大きい。また、凹面の狭端から3cmほど離れた位置には、狭端と平行して並ぶ紐の圧痕と結び目の圧痕がある。布袋の裏側にあるので、桶の連結に関わる痕跡だろうか。同様のものが平瓦6類C~Eにもある。

「布綴じ6f」（Ph.158-2）は、「布綴じ6e」とは逆に、綴じ目痕が左、縫い目痕が右にある「綴じ合わせGSg」。狭端方向に綴じ目と縫い目の距離が開く。縫い目痕に平行して布袋の内側に布端がある。

平瓦6類C（Ph.158~160, Fig.115）叩き板は木目斜交の斜格子目刻線を入れたものだが、平瓦6類A・Bの叩き板刻線と違って刻線と木目がつくる角度が大きく、縦長の斜格子叩き目となるのが特徴（Ph.158-97, 159-98）。

縦長の斜格子叩き目

凸面は叩き締めのおちごく軽いヨコナデ調整をおこなうのみ。叩き目がよく残る。叩き板の幅は7cmを大きくは超えない。叩き板の柄の一部が圧痕として残った例がある（Ph.160-1）。また、凸面の一部に平瓦6類Bの叩き目が共存する例や、凹型台の圧痕をとどめる例がある。

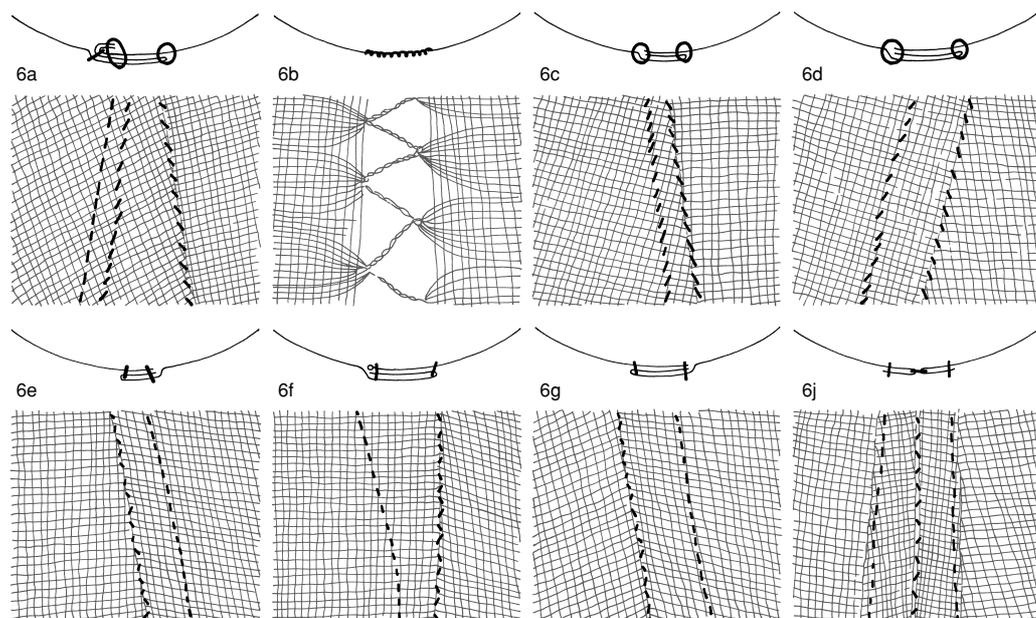


Fig.115 平瓦6類の布綴じ合わせ模式図

側面調整はc2手法、凹面は四周をケズリ調整する以外は調整しない。側面および端面と、凹面四周のヘラケズリの方向が逆向きなのは平瓦6類Bと同じ。

凹面には、布圧痕、桶の側板圧痕、糸切り痕のほか粘土板合わせ目、分割凸帯痕、布綴じ痕内叩き痕がある。また、刻線のない内叩き痕が顕著に残る。分割凸帯は紐で、平瓦6類B同様、一部が桶の側板をくぐる。

全長38.6～40.2cm、広端幅30.4～30.5cm、狭端幅27.0～27.8cm、厚さ2～2.5cm、重さ4.9～5.1kg。葦足の長さ21cm前後。硬質の焼きで、灰色ないし暗灰色。

布綴じ痕は右に綴じ合わせ目痕、左に縫い目痕がある「布綴じ6g」(Ph.158-3)。綴じ目、縫い目ともぐし縫いの「綴じ合わせGZg」。平瓦6類Bの「布綴じ6e」に似るが、折り山の幅が6～7.5cmあり一致しない。

平瓦6類D (Ph.159-99) 全長36.5cmしかなく、平瓦6類A～Cより寸詰まりな感を与える。

凸面には、対角線で1×0.5cmほどの細かい斜格子叩き目と1.5×1cmほどのやや粗い斜格子叩きとがある。両者の境目では、細かい叩き目の方があとから付いている。

側面調整は分割破面と分割断面を凸面側に深くヘラケズリするc2手法。側面と広端・狭端面のヘラケズリは凹面側からみて逆時計回りに動き、凹面四周のヘラケズリは時計回りに動く。まず、凸型台の上で側面などを調整し、次に凹型台を使って凹面四周をヘラケズリした結果だろう。その後、側面の縁をわずかに面取りする。

凹面は、四周のヘラケズリ以外に調整をおこなわない。そのため、布圧痕、桶側板圧痕、糸切り痕のほか、分割凸帯痕がある。分割凸帯は両端を桶に留めた撚り紐。狭端側の端に結び目状のくぼみとこれに直交した短いくぼみがあるが、用途がわからない。凹型台の上で調整をおこなうときに、断面の丸い棒のようなもので凹面の全体を叩く。

全長36.5cm、広端幅30cm、狭端幅28cm、厚さ2.2cm前後、重さ5.3kg。硬質の焼きで、暗褐色をしている。

平瓦6類E (Ph.159-100) 法量は6類Dに近いが、凹面全面を調整することで区別した。

凸面はヨコナデ調整されるが、対角線ではかって0.9×1.5cmほどの斜格子叩き目をほぼ全面に残す。叩き目は叩き締め円弧を描く。狭端近くには、凹型台の縁辺の圧痕が残る。

側面調整はc2手法で、さらに凹面の両側と狭端側に面取りのヘラケズリを加える。側面のヘラケズリは左右とも狭端方向、面取りのヘラケズリは逆時計回り方向に一周する。

凹面は全面をヘラナデ調整する。この調整は凹面縁辺のヘラケズリのあとの仕事。桶の側板圧痕などは消されてしまっているが、撚り紐の分割凸帯の痕跡が観察できる。分割凸帯は桶の下方から1/3ほどのところで途切れており、ここで側板にくぐらせたことがわかる。また、狭端付近にはほぼ等間隔に並ぶ円形のくぼみが3個ある。桶の連結に関わる痕跡だろうか。

広端幅29.5cm、狭端幅27.8cm、全長36cm、厚さ1.6～2.2cm、重さ4.7kg。やや軟質の焼きで、暗灰色をし、表面は燻し焼き風に黒くなる。

平瓦6類F (Ph.160-3・101) 平瓦6類Eと同じく凹面のほぼ全面を調整する。長い瓦。

凸面はヨコナデ調整されるが、ほぼ全面に、0.5×1.5cmほどの斜格子叩き目を残す。叩き目は叩き締め円弧を描く。

側面調整はc2手法で、さらに凹面の両側と狭端側に面取りのヘラケズリを加える。側面およ

び凹面縁辺のヘラケズリとも、左側が広端→狭端方向、右側はその逆に狭端→広端方向に動く。

凹面はほぼ全面をタテナデ調整する。かすかに、布圧痕や糸切り痕、側板の圧痕が確認できる。また、広端面に藁座の圧痕を残す例がある(Ph.160-3)。

全長42.3cm、広端幅29.7cm、厚さ2.7cm、重さおよそ5.6kg。硬質で灰色をしている。

平瓦 6 類G (Ph.160-2・102, Fig.115) 法量は平瓦 6 類Fに似るが、凹面調整がない。

凸面はヨコナデ調整されるが、ほぼ全面に叩き締め円弧を描く斜格子叩き目を残す。

側面調整はc2手法で、さらに凹面の両側と狭端側に面取りのヘラケズリを加える。両側面にごくわずかに分割断面が残る。側面および凹面縁辺のヘラケズリとも、左側が広端→狭端方向、右側はその逆に狭端→広端方向に動く。

凹面は、狭端近くにヘラケズリをおこなう以外は調整しない。布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕や布綴じ痕が残る。

全長43cm、広端幅30cm強、狭端幅29cm、厚さ約2.2cm、重さ約5.3kg。硬質で灰色をしている。

布綴じ痕は「布綴じ6j」。綴じ合わせ目を境にして、布の重ね代を左右に折り返して縫い止める割り縫いの「綴じ合わせWg」。布袋の外側に布端を折り返すため、3条の綴じ目や縫い目はいずれもその左右で布目が連続しない(Ph.160-2)。

g 平瓦 7 類 (Ph.161・169)

平瓦 7 類は、縄巻き叩き板を使う粘土板桶巻き作り平瓦。凸面は全く調整しないか、部分的な調整をするにとどまるため、叩き目が明瞭に残る。叩き目や叩き方の違いなどにより、A～Dの4種に細分した。

平瓦 7 類A (Ph.105-1・2, 161-103) 縄の条が8本/3cmほどのやや粗い縄叩き目をもつ平瓦 (Ph.161-103)。叩き目は叩き締め円弧を描く。縄の条は広端部でタテ方向を向くので、叩き板の軸線に対して直交方向に縄を巻き付けた叩き板だろう。稀に、平瓦 6 類Aと同じ斜格子叩き目が共存する資料がある(Ph.161-105)。

粗い縄叩き

側面調整は分割破面と分割断面を凸面側に深くヘラケズリするc2手法。側面と広端面・狭端面のヘラケズリは凹面側からみて逆時計回りに動き、凹面四周のヘラケズリは時計回りに動く。まず、凸型台上で側面を調整し、次に凹型台を使って凹面四周をヘラケズリした結果だろう。

凹面は四周のヘラケズリ以外は調整しない。布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕が明瞭に残る。凹面のところどころを棒状の工具で叩いた内叩きの痕跡も多くの個体で確認できた。また、粘土板合わせ目と布袋の縫い目を確認した。

棒状工具で内叩き

粘土板合わせ目はS型とZ型がある。S型の粘土板接合面に布目の痕跡がみえる資料がある(Ph.161-1)。布目の痕跡は、通常とは逆に「ボジ」の状態。この面が直接布袋に接してついたのでなく、粘土板合わせ目の相手側の粘土板についていた布圧痕(布目)が転写された結果だ。つまり、いったん桶(=布袋)に密着させていた相手側の粘土板の端をめくって、巻き終わりの粘土板の端をその下にもぐり込ませた状況がみてとれよう。

粘土板合わせ目の布痕

布綴じ合わせ痕は、綴じ目痕を見つけることはできなかったが、おそらくその左側に位置すると推定される縫い目痕はある(「布綴じ7a」、Ph.161-2)。平瓦 6 類Aと同じ叩き目が重複する例はあるが、平瓦 6 類Aの布綴じとは一致しない。

全長38.4～39.9cm、広端幅30cm、狭端幅25.9cm、厚さ2.2～2.6cm、重さ5.4kg前後。やや軟質の焼

きで、灰色ないし褐灰色をして表面だけが黒色になるものも多い。

条の細い
縄叩き目

平瓦7類B (Ph.161-104) 縄の条が側辺に平行するタテ縄叩きの平瓦。縄の条は細く、14本/3cmを数える。凸面はほとんど調整しない。

側面調整は分割断面と破面を深くヘラケズりするc2手法。凹面の四周にも面取りのヘラケズリをおこなう。これらのヘラケズリは、凹面からみて時計回り方向に動く。ともに凹型台上での調整だろう。

凹面は四周以外は調整をおこなわない。布圧痕、糸切り痕、桶の側板圧痕と布綴じ痕がある。また、側縁に近い部分を棒状の工具で叩いた痕跡が顕著に残る。凹面のほぼ中央に「大」とヘラ書する。

布綴じ痕は、側縁とほぼ平行する綴じ目とその左側に縫い目が走る「布綴じ7b」。綴じ目の左側が一段低くなるので、布袋の内側に重ね代が折り返されている。

全長40.2cm、厚さ1.8~2.4cm。硬質で暗灰色をしている。

凸面板ナデ

平瓦7類C (Ph.162-106、169-1) 平瓦7類Bと同じくタテ縄叩きの粘土板桶巻き作り平瓦。縄の条は12本/3cmほどで、細い。凸面の狭端側1/3ほどを板でナデて縄叩き目を消す。また、全長34cm前後、狭端幅24cm前後、重さ約3kgしかなく小さい。

側面調整はc2手法。凹面は調整をおこなわず、四周の面取りもない。布圧痕、糸切り痕、粘土板合わせ目、桶の側板圧痕が明瞭に残る。分割凸帯は撚り紐。粘土板合わせ目には、S型とZ型がある。凹面の狭端側を幅の狭い板状の工具で叩いた痕跡があり、それに対応するかのよう

に凸面の縄叩き目は押しつぶされている(Ph.169-1)。灰色ないし明灰色をして、硬質な焼き。
平瓦7類D (Ph.169-128) 縄の条が11本/3cmほどの縄叩き目をもつ平瓦。凸面はヨコナデ調整するが、薄く叩き目が残る。叩き目は叩き締め

円弧を描く
縄叩き目

の円弧を描く。凹面は調整をせず、布圧痕、糸切り痕、側板圧痕のほか粘土板合わせ目(Z型)がある。側面調整はc2手法。破片資料しかなく法量は不明。

細かい砂粒を含んだ緻密な胎土。焼きは硬質。灰色。

h 平瓦8類 (Ph.162)

平瓦8類は粘土紐桶巻き作り平瓦。側面調整の違うA・B2種がある。

平瓦8類A (Ph.162-107) 完形品をみいだせなかった。広端幅は29.1cm、厚さは2.4~2.7cm。

凸面は側辺に平行するタテ縄叩き目が残るが、丁寧なヨコナデ調整がなされ、叩き目はごくかすかにしかみえない。

凹面は四周をヘラケズりする以外は調整しないため、粘土紐の接合痕が4~4.5cm間隔に残る。側面調整は、分割破面と分割断面を断面に平行してケズリとばしてしまうc1手法。さらに凹面の四周を面取りする。ともに凹型台上で時計回り方向のヘラケズリ。凸面には凹型台の圧痕がある。

高台・峰寺
瓦窯の産品

細かい砂粒とクサリ礫を含み、硬質で暗青灰色をしている。高台・峰寺瓦窯(高取町・御所市)で生産された藤原宮所用の平瓦。

平瓦8類B (Ph.162-108) これも1/4程度の破片しかなく、法量は明示できない。

凸面はタテ縄叩きののち、ヨコナデ調整。縄叩き目をほぼ消し去る。

凹面は、側板の段部のごく一部をナデ調整する以外は調整せず、粘土紐の接合痕が約3cm間

隔に明瞭に残る。側面は分割截面と破面を全く調整しないa手法。広端面はヘラケズりする。胎土に砂粒をほとんど含まないが、クサリ礫がめだつ。藤原宮所用の日高山瓦窯（榎原市）の産品と推定できる。このほか、やはり日高山瓦窯産と推測される凸面カキ目調整の平瓦も出土した。

日高山瓦窯
の産品

i 平瓦9類 (Ph.162-109)

平瓦9類は、格子目刻線叩き板による粘土板一枚作り平瓦。凹面に側板の圧痕はない。叩き板の刻線は木目に斜交する。叩き目は円弧を描かない。

完形品がなく法量は不明だが、狭端幅は約32.5cmあり、同じ叩き板を使う一枚作り四重弧文軒平瓦F Iの大きさから推定して、全長は40cm、広端幅は35cm程度と考えられる。

側面には凸型台の上での成形を示す「棧」の圧痕がある。この棧は、瓦の大きさを一定にしかつ厚さをも揃える機能をもつ。側面はヘラケズりする。凹面からみて左側面は、広端→狭端方向に、右側面はその逆の方向にヘラケズりする。

凸型台に棧

凹面は調整がなく、布圧痕と糸切り痕が残る。砂粒を多く含んだ粗い胎土で、焼きはやや軟質。暗灰色。

j 平瓦10類 (Ph.163-167・169)

縄叩き目が側面に平行する、いわゆるタテ縄叩きの一枚作り平瓦。縄の条の粗密や瓦の大きさにA~Eの5種にわけられる。

平瓦10類A (Ph.163) 縄の条が3cmあたり10本未満でやや粗いが、縄の撚り目が大きい。叩き目、側面調整、胎土や焼きの違いでA I~A IVに細分した。

平瓦10類A I (Ph.163-100) は、縄の条が8本/3cm程度。叩きの縄目は瓦の長軸方向に通らず、3~4回にわけて叩いたとみられる。広端近くにユビオサエの痕跡がある。

凹面は四周をヘラケズりする以外は布圧痕と糸切り痕を残す。側面調整はヘラケズリ。側端面および凹面四周のヘラケズリは、すべて凹面側からみて時計回り方向に動く。凸面の縄叩き目が潰れる部分があり、凹型台の上での仕事とみてよい。

凹型台上で
側面調整

全長38.3cm、広端幅28.4cm、狭端幅25.5cm、重さ4.8kg。砂粒の比較的少ない緻密な胎土で硬質の焼き。四重弧文軒平瓦G II 1に対応する。

平瓦10類A II (Ph.163-111) は、縄の条が6本/3cmとやや粗い。10類A Iと同じように、叩きを瓦の長軸方向に3~4回にわけておこなう。

凹面四周と側面をヘラケズリし、ヘラは10類A Iと同じく時計回り方向に動く。凹面には布圧痕と糸切り痕があるほか、凹型台の上でおこなった内叩きの痕跡が側面の近くにある。

凹面左右に
内叩き痕

全長38cm、広端幅28cm前後、狭端幅26.4cm、重さ4kg強。砂粒を若干含んだ胎土で焼きはしっかりしている。四重弧文軒平瓦G II 3に対応する。

平瓦10類A III (Ph.163-112) は、全長38.8~39.3cm、広端幅31cm、狭端幅27.2cm、重さ5.5kgあって、ほかよりやや大きい。縄の条は7本/3cmほど。叩きは瓦の長軸方向に3~4回にわけておこなう。

凹面四周と側面を凹面からみて時計回り方向にヘラケズりする点は、10類A I・A IIと同じだが、側面のケズリ残した部分に凸型成形台にあった棧の痕跡を残すものがある。凹面には内叩き痕がある。

ヘラ書「大」I 小石や砂粒の多い粗い胎土で、焼きは硬い。凹面左側辺近くにヘラ書「大」I（後述）をもつ例がある。四重弧文軒平瓦HⅢ2に対応する。

平瓦10類AⅣは、全長39.5cm、狭端幅28.2cm、重さは5kgをこえる。10類では最も大型。縄の条は8本/3cm。

凹面の狭端近くを、幅10cmほどヘラケズリして布圧痕を消す。また側辺近くに内叩きの痕跡がある。側面と凹面四周および側辺の凸面側をヘラケズリする。側辺のヘラケズリは、狭端から広端方向に動く。

四重弧文軒平瓦HⅠ1に対応する。砂粒をやや多く含んだ胎土。焼きはやや軟質。暗灰色ないし暗灰褐色。

平瓦10類B (Ph.164・165・169) 縄の条が3cmあたり10本を超え、条の細いタテ縄叩き目をもつ平瓦。BⅠ～BⅣの4種に細分した。

平瓦10類BⅠ (Ph.164-113) は、他の10類Bに比べると見た目がやや細長い。凸面の縄の条は14本/3cmほどで、平瓦10類A同様、瓦の長軸方向に3～4回わけて叩く。狭端近くには粘土板を押さえた手の跡が明瞭に残る。

凹面は広狭端縁をわずかにヘラケズリする以外に調整せず、布圧痕と糸切り痕がある。凹面左下隅には、布を縫い合わせた痕跡 (Ph.169-5) をとどめ、一見桶巻き作りを思わせる。だが、右下隅（広端の反対側隅）にはほつれた布端がみえ、また、側面には凸型台の棧の圧痕があって、凹面の布圧痕がここまで連続する資料がある。さらに、側板の痕跡を全く確認できないので一枚作りとみてよい。糸切り痕は凹面左上から右下にかけて流れる。この糸切り痕の流れ方は、一枚作り平瓦ほとんどすべてに共通する。この点からも、一枚作りと判断できる。

側面と両端面は時計回り方向のヘラケズリ。凹面縁を面取りしないので縁が尖る。

全長40cm、広端幅29cm、狭端幅25.8cm、重さ4.9kg。砂粒を含んだやや粗い胎土。焼きは硬質で灰色ないし青灰色。四重弧文軒平瓦HⅡに対応する。

平瓦10類BⅡ (Ph.164-114) は、縄の条が10～13本/3cm。長軸方向に5～6回にわけて叩く。

側面のヘラケズリは、凹面側からみて、右側面と狭端面が逆時計回り方向、左側面と広端面は時計回り方向。これに対して、凹面四周のヘラケズリは、右側辺と狭端が時計回り、左側辺と狭端は逆時計回りで、互いに方向が逆転する。凹面の両側辺に幅の広い圧迫痕があり、これは凸型台の圧痕だろうか。凸面の縄叩き目にも潰れた部分があり、凹凸両方の調整台を使っているのだろう。

全長38.2cm、広端幅27.5cm。砂粒を多く含んだやや粗い胎土。焼きはしっかりしている。灰色ないし青灰色。

平瓦10類BⅢ (Ph.164-114) は、凸面の縄の条が10本/3cmほどで、平瓦10類Bでは最も粗い。凹面は狭端側半分を丁寧にヘラケズリ調整し、その後「大」Iの文字をヘラ書する。「大」は字の天が広端を向く。

側面と凹面の四周は3～4回ヘラケズリ調整したり面取りする。ヘラケズリはすべて時計回り方向に動く。

全長36.5cm、広端幅約30cm、狭端幅27.4cm、重さ5kg強。砂粒を含むが緻密な胎土で、硬質の焼き。暗青灰色ないし暗灰色。

平瓦10類BIV (Ph.165-116) は、全長が不明だが、狭端幅26cmはやや小さい。凸面の縄の条は12本/3cm。平瓦10類BI~BIIIにくらべると瓦の湾曲が強い。

凹面は中央部をタテにナデ調整するが、布圧痕と糸切り痕、内叩き痕が残る。側面のヘラケズリが凹面側に深いため、側縁が尖って見える。凹面両側縁と側面のヘラケズリはともに広端→狭端方向に動き、ほかのもののように時計回りには動かない。小石や砂粒を含んだやや粗い胎土。焼きは硬質。灰色だが、両側縁部分は赤褐色に発色する。

平瓦10類C (Ph.165・166・169) 撚りの細い縄を粗く巻き付けた縄巻き叩き板を使う一群。いずれも全長が40cmをこえる。CI~CIVの4種に細分した。

細くて粗い
縄叩き目

平瓦10類CI (Ph.165-117) は、縄の条が8本/3cmほど。長軸方向に4回ほどに分けて叩いているが、狭端部分は十分に叩けず、叩きの前に粘土板を手で押さえた跡がはっきり残る。

凹面は四周をヘラケズリする以外調整しない。布圧痕と糸切り痕が残る。布は粗い上になんまりほつれている。狭端面と側面にも布圧痕があり、側面に凸型台の圧痕を残すものがある。側面と凹面四周のヘラケズリは時計回り方向に動く。

全長43.5cm、広端幅約30cm、狭端幅28.2cm、重さ約6kg。砂粒や小石を含んだやや粗い胎土。焼きは比較的硬質。灰色で中央部は明赤褐色。四重弧文軒平瓦HIII 1に対応する。

平瓦10類CII (Ph.165-118) は、凸面の縄の条は7~8本/3cmほどで、平瓦10類CIとさほど変わらないが、1条だけが太くみえるのが特徴。この太い条はおよそ4cm間隔で並んでおり、これが叩き板の幅を示すとすれば、瓦の凸面中央部ではこの縄目の条が長く連続するので叩き板はかなり細長い。全体に叩きが弱いため、凸型台に粘土板を押さえつけた時についた手や指の跡が目立つ。

側面と端面および凹面四周を時計回りにヘラケズリする。凹面には布圧痕と糸切り痕のほか、広端と狭端の近くに内叩きの痕跡がある (Ph.169-2・6)。

全長40~42cm、狭端幅27.4cm。広端幅は約30~31cm、重さは5kg前後。砂粒を含むが緻密な胎土で、焼きはやや軟質。灰褐色ないし暗灰色。

平瓦10類CIII (Ph.166-119) は、全長44cmほどの長い瓦。縄の条は、11本/3cm。平瓦10類CIIと同じく縄の条が1条だけ太いが、こちらのほうが縄の撚り目が細い。この条の間隔は約5cmある。広端から9cm離れた位置に焼成前にあけられた細い穴がある。釘の痕跡は明瞭ではない。山田寺から出土した軒平瓦や平瓦で釘穴を備える例はほかにない。

唯一の釘穴

側面・端面と凹面四周を時計回り方向にヘラケズリ調整するが、ヘラケズリの及ばない側面には凹面から連続する布圧痕がある。凹面には糸切り痕のほか内叩きの痕跡もみえる。

瓦の中程あたりでの幅は31.6cm。砂粒を含んだやや粗い胎土で、焼きは軟質。黒灰色あるいは灰褐色。

平瓦10類CIV (Ph.166-120) は、10類Cのなかでは最も細長い。縄の条は8本/3cmしかなく、粗くみえる。凸面の縄叩き目が全体に潰れているのは、凹面に顕著に残る内叩きの結果。

端・側面と凹面四周をヘラケズリする。狭端面を除いてヘラケズリ方向が逆時計まわりに動くのは、平瓦10類ではこれだけ。側面は凹面側に傾く。

全長39.5cm、広端幅28cm、狭端幅25.9cm、重さ4.7kg。砂粒を多く含んだ粗い胎土。焼きはやや軟質。淡青灰色。

平瓦10類D (Ph.166・167) 平瓦10類Cに似た粗い叩き目をもつ小型の瓦。D I とD II の2種に細分した。

全面に
離れ砂

平瓦10類D I (Ph.166-121) は、縄の条が8本/3cm前後の粗い叩き目を残す。凹面には、布圧痕や糸切り痕や内叩きの痕跡があるほか、ほぼ全面に離れ砂が付着する。凹面四周と側面・端面のヘラケズリは凹面からみて時計回り方向に動く。

全長33~35.4cm、広端幅26.5~30cm、狭端幅24.2~26.4cm、重さ4~4.3kg。砂粒を多く含んだかなり粗い胎土。焼きも悪い。灰褐色ないし暗灰色。

平瓦10類D II (Ph.167-122) は、縄の条が10本/3cmほどで10類D I よりやや密。叩きが十分でないため、凸面にも側辺中央に集まる糸切り痕がみえる。

側面と端面および凹面四周をヘラケズリ調整する。凹面の布圧痕は一部側面にも及ぶ。凹面の広・狭端には内叩きの痕跡が顕著に残り、それと対応する凸面では縄叩き目が潰れる。

全長37.4cm、重さ4kg強。砂粒を多く含んだ粗い胎土。軟質の焼きで灰色。四重弧文軒平瓦G I 4に対応する。

凸面に
離れ砂

平瓦10類E (Ph.167-123) 凹凸面の全面に離れ砂が付着し、縄叩き目や凹面の布圧痕が不明瞭な平瓦。全長38.8cm、狭端幅28.6cm、重さ6kgほど。凸面の縄叩き目は8本/3cmほど。側面・端面と凹面四周は時計回り方向にヘラケズリ調整する。凹面には内叩きの痕跡がある。広端面にごくかすかに布圧痕をとどめる。

砂粒を若干含むが比較的緻密な胎土。焼きは軟質で明赤褐色。

k 平瓦11類 (Ph.167~169)

縄叩き目が平瓦の側辺と平行しないナナメ縄叩きの平瓦。縄叩き目の様子からみて、叩き板は軸に直交して縄を巻く。叩き方と叩き目の違いで3種に細分する。

平瓦11類A (Ph.167-124) 左下がりの湾曲した縄叩き目を残す平瓦。全長34.1cm、広端幅27.8cm、狭端幅26.7cm、厚さ2cm前後、重さ2.9kg。小型で薄手。

凸面は、広端右隅を支点にして円弧状に叩き締めた、と判断できる。左側辺だけほかと叩き目が連続していないのは、その位置からだ叩きにくいので、位置を変えて叩いたからだろう。

側・端面と凹面四周は時計回り方向にヘラケズリ調整する。凹面には、布圧痕と糸切り痕のほか内叩きの痕跡があり、広端部隅には焼成前に書かれたヘラ書「大」Iがある。広端に沿って布端のほつれがみえる。胎土は、砂粒を若干含むが、比較的緻密である。焼きは軟質で、明灰褐色を呈する。

ナナメの
縄叩き目

平瓦11類B (Ph.168-125) 平瓦11類Aにくらべると、傾きの小さいナナメ縄叩きの平瓦。縄の条は太い。全長43cm、広端幅約30cm、狭端幅約27cm、厚さ2.6cm前後、重さは推定5.8kgあり、厚手で大型の瓦。

凸面の縄叩き目は、瓦の左右と中央で帯状に叩き目の方向が変わる。凸面左側では広端に近くなるほど叩き板側縁と瓦側辺とのなす角度が小さくなる。この状況からすると、狭端左隅を支点にして叩き締めたのだろう。

側・端面と凹面四周は時計回り方向にヘラケズリ調整するが、一部方向の逆転するところがある。凹面には布圧痕と糸切り痕を残し、布圧痕は側面にまで連続する (Ph.169-7)。砂粒と8mmほどの小石を多く含む。比較的硬い焼きで暗灰色ないし灰色。

平瓦11類C (Ph.168-126) 狭端近くではほぼ側辺に平行するが、広端寄りでは右に傾いたナメ縄叩きをもつ平瓦。全長36.6cm。

側・端面と凹面四周をヘラケズりする。凹面は布圧痕と糸切り痕のほか、内叩きの痕跡がある (Ph.169-4)。叩き目からみて、凸面左側辺のやや狭端よりの位置を支点として叩き締めたようだ。砂粒を多量に含んだ粗い胎土。焼きは比較的硬いがもろい。淡緑灰色。

1 平瓦12類 (Ph.168・169)

木目斜交の斜格子刻線叩き板を使う一枚作り平瓦。格子目は9類よりはるかに大きい。

凹凸両面とも離れ砂の使用が顕著。凸面の叩き目は、対角線ではかって2.5×4.0cm、2.6×4.2cm、1.5×3.2cm、という少なくとも3種類がある。叩き板の幅は4.5cmほどしかないが、長さは瓦の全長分ある (Ph.168-127)。

ごく粗い
斜格子叩き

凹面は丁寧にナデ調整やミガキ調整で仕上げ、布の圧痕はほとんどみえない。凹面に叩き目が「ネガ」の状態が付いたものがある。瓦を積み重ねて乾燥させたため、下に置いた瓦の叩き目がついたのだろう (Ph.169-129)。

ほぼ全形をとどめる資料があり、それによれば、全長41.5cm、狭端幅29.8cm、広端幅約31cm、厚さ2.4cm、重さ約5.6kg。砂粒を含むがきめの細かい胎土。堅く焼き締まり、灰色をしている。

- 1) 桶巻き作り平瓦の布綴じ合わせ痕は、各類ごとにa・b・c…の記号を付して識別する。つまり、平瓦1類では「布綴じ1a・1b・1c…」、平瓦2類では「布綴じ2a・2b・2c…」と記号化した。ただし、アラビア数字やローマ数字と紛らわしい、「i・l・o・v・x」は用いなかった。なお、平瓦1類ではアルファベットが不足したので、例外的に「a・β・γ」の記号を使用した。布袋の綴じ合わせに関わる用語は、大脇潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」(『研究論集IX』奈文研学報第49冊 1991年、pp.1~56)に従い、次の記号を使用する。

M: 綴じ目まつり縫い、G: 綴じ目ぐし縫い

S: 布重ねSタイプ (左が上)、Z: 布重ねZタイプ (右が上)

l: 綴じ目まつり縫いの針目左上がり、r: 綴じ目まつり縫いの針目右上がり

m: 縫い目まつり縫い、g: 縫い目ぐし縫い

ただし、山田寺出土平瓦には、布袋の折り山を作らないで重ねるだけの例があるので、この布の重ねについては記号「C」を使う。折り山を縫いとめないで、左右どちらの布が上にくるかわからない例については記号「L」を使う。また、綴じ目あるいは縫い目がまつり縫いかぐし縫いかわからない場合は、「X」あるいは「x」の記号を用い、まつり縫いの縫い目についてはその針目が左上がりか右上がりかを()内に示した。

- 2) 以下、布綴じ痕を初め技法や調整の記述に際して「左右」を使う場合、凹面・凸面とも広端面を下にした状態で凹面あるいは凸面をみた状態での左右をいう。模式図では左右が逆になる。